

---

# 白夜叉の

薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白夜叉の

### 【Nコード】

N4231K

### 【作者名】

薫

### 【あらすじ】

真撰組がとある事件で入手したスロットマシン。

それは過去へと戻るタイムマシンだった。

今、明らかになる銀時の過去。

その時、新八たちの胸に去来するものは・・・

### 【注意】

この作品は、↑白夜叉↑さんの書かれている作品「心の闇の深さと

は」と話の設定が似ている上に、一部同じような場面が展開されます。

ありがたいことに、御本人様から了承はいただいておりますが、苦手な方はお気をつけください。

## プロローグ（前書き）

初めての二次小説、初めての投稿です。

まだ操作をマスターできてないのでお見苦しい点があるかもしれませんが

少しでも楽しんでもらえたら幸いです

## ブローグ

「副長。全員配置につきました」

「ん。あとは合図があるまで待機してろ。」

しつこいようだが、今回は何が起こるか予想がつかねえ。氣い引き締めるよう伝えておけ」

「了解しました」

報告を受けたのは真撰組副長、土方十四郎である。

とある旅館に潜伏している攘夷志士を一網打尽にするための包囲が完了したようだ。

土方は煙草を取り出し火をつけ、煙をふうと吐き出した。

時は遡り一週間ほど前。

土方は監察、山崎退から報告を受けていた。

「副長。近頃、過激派攘夷・燃える豚骨党の動きがきな臭いとの情報が流れています」

「ほう。なんだってんだ」

「どうも最強の切り札を得たとか」

「切り札？武器ってことか？」

「おそらく」

「おそらく？」

「それがどんな代物なのか一切わからないんです。」

ただ天人から手に入れたということしかわかっていません」

「天人の科学の力を得てまで攘夷活動をしようとはな。」

目的のためには手段を選ばねえ連中てのは本当に質が悪いぜ・・・しかし、どこの星から手に入れたのかもわからないのか？」

「はい。武器に関する情報は一切漏れていません。

潜入を試みましたが密偵を恐れてか、現在新たな浪士の受け入れすらしていない状況です」

「そうか・・・わかった。近藤さんに報告する。ご苦労だったな」

「はい」

そして現在。

件の攘夷志士を捕らえるため、アジトを包囲したところである。

どのような武器かも分からぬまま突入することに、土方は言い知れぬ不安を感じていた。

時間だ。

吸っていた煙草を踏み潰し、隊士全員に合図を送る。

ええい、鬼の副長と呼ばれるこの俺がいつまでもビビっていられるか。

土方は隊士の先頭を切って志士のアジトに踏み込んだ

「御用改めである！

神妙にしるテロリストども！」

「し・・・真撰組だあっ！」「逃げるな！立ち向かえ！」「アレを

絶対に渡すな！」

攘夷志士との切り合いが始まった。

30分もしないうちにだいたいがつき、残すは奥の部屋に立て籠る数人の志士だけとなった。

・・・連中、武器を手に入れたつてのはガセだったのか？非常時だつてのに一向に使おうとする気配がない。  
まさか。

自分達は罠に嵌められたのか？

一瞬のためらいを見逃さぬかのように、後ろから憎たらしい声が聞こえてきた。

「なんでい土方さん。

鬼の副長ともあろう方が数人の浪士目の前にして尻込みですかい？  
ざまあねーや。

そんな奴は真っ先に死にますぜい。てゆーか死ね土方コノヤロー」

それはバズーカを抱えた真撰組一番隊長、沖田総悟であった。

「ふざけんな総悟。下らねえ事言ってる暇があったら早くバリケードぶち破れ」

「言われなくともやりまさあつと」そう言いながらバズーカをぶつ放すと、簡単にバリケードは破れた。

それと同時に土方たちは部屋に踏み込み、切り合いが始まった。

相手は5人、獲物は刀であつた。

多少手強かつたもののなんなく片付いた。

少し乱れた息を整えながら土方は周囲を見渡した。  
例の切り札らしきものは結局見つからなかった。

山崎の野郎、ガセネタつかまされたのか・・・？

そう思いながら、何と無く目についたふすまを開けた。

「・・・！」

「・・・！土方さん・・・」

これは「・・・」



## プロローグ（後書き）

夜。

ここはスナックお登勢の二階にある万事屋。

主の坂田銀時はカレンダーを見つめていた。

「たまにやあ顔出すのも悪くないか」

そんなことを考えながら頭を掻いていた

1。ネズミーランドは1日あれば十分（前書き）

展開が遅くてすみません

# 1. ネズミーランドは1日あれば十分

「おはようございます」

いつものように志村新八は挨拶をしながら万事屋の戸を開けた。

いつものように、と言いながらも今日はいつもよりも遅い時間だった。

しかし何の問題もないことを新八は知っていた。

どうせまだ寝てるんだろうな。もうすぐ昼になるってのに。

そう思いながら上がると、和室のふすまを開けた。

「銀さん。いい加減起きてください。一体何時だと・・・」

そう言っつて新八は言葉を止めた。

いつもなら、まだ布団に潜っている時間だというのに布団はなく、銀時すらいない。

「あれ？銀さん、今日仕事入ってるって言ってたっけ・・・？」

いつもと違う風景に戸惑う新八に、後ろから足音が聞こえた。

「なんか銀ちゃん行くとこあるって朝出掛けたヨ。2、3日帰ってこないって言われたアル」

目を擦りながらパジャマ姿の神楽が答えた。

「おはよう神楽ちゃん。2、3日も銀さんいないの？どこ行くなって言ってた？」

「言っていないアル。でもお土産買ってくるって言ってたから多分ネズミーランドアル」

「絶対違うよ！ネズミーランド以外にもお土産売ってる所あるからね！？ネズミーランドだけが観光地じゃないからね！？  
そもそも2、3日もかからねーよ！」

一通りツツコミ終わった新八をだるそうに神楽は見た

「うるさい、このツツコミしか能のないダメガネが！  
ワタシ腹ペコアル。早く飯作れヨ」

「なんだよそれ！ツツコミだってセンス問われるんだぞ！

・・・ったくもう、仕方ないなあ。

「ご飯作るから、その間に顔洗って着替えなよ」

腹ペコな神樂の為に食事を用意しているとドアのチャイムが鳴った。

「誰だろう。お客さんかな」

銀さんいないからなあ、面倒な依頼じゃなきゃいいけど。

そう思いながらドアを開けると黒い制服を着、帯刀している三人の男が立っていた。

「あれ近藤さんに土方さんに沖田さん。皆さんお揃いで。どうしたんですか？」

「やあ新八くん。万事屋に用があつてな」

真撰組局長、近藤勲がいつものように明るく答えた。

「すみません、銀さんどこかへ行っちゃって。2、3日経たないと戻らないんです」

そうか困ったなと頭を掻く近藤の横で、  
余計なときに首を突っ込むくせに肝心な時にいねえとは使えねえ野

郎だと土方が毒づく。

あははすみませんと新八が苦笑いしていると着替え終わった神樂が玄關に現れた。

「税金泥棒、揃いも揃って何しに来たアルか。  
ん？そいつの後ろにある箱何アル？」

神樂が指差す先を見ると、確かに沖田の後ろに自販機ほどの箱があった。

「その箱なんですか？」

あ、もしかしてその箱に関する用事ですか？」

そう新八が聞くと、土方と近藤は目を合わせた。  
少し考えたようだったが

「危険な仕事ではないからな。大丈夫だろう」

と土方に言うと、土方もうなずいて新八に顔を向けた。

「そうだ。これが今回の依頼だ。」

と言つとその箱のようなものを持ち上げて中に入れた。

## 2. 人様のものをベタベタ触るのはやめなさい（前書き）

助走が長すぎますね。すみません

本編があとがきまで続きますのでご注意ください。これ以上話数を増やしたくなかったので・・・

今さらですがプロローグも、あとがきまで本編が続いています。  
本当に今さらですが（＾＾；



## 2. 人様のものをベタベタ触るのはやめなさい

その箱は自販機サイズだったが見た目はスロットマシンそのものであった。

ただ異なるのはスロットが3つではなく8つであること、2段に分かれており4つずつ並んでいた。

また、絵柄もスロットマシンの絵柄とは思えないほど幼稚で下手だった。

裏にも猫だか犬だか区別のつかないような絵がいくつか描かれていた。

「何アルか、この落書きばかりのスロットマシンもときは」

中に運び入れたスロットマシンを神楽が触ろうとすると沖田が制した。

「おい軽々しくさわんじゃねーよアホチャイナ。そりゃーおもちゃじゃねーんだよバカチャイナ」

「あ？今なんつったアルか？」

ワタシが触ろうとしなきゃこのシーンお前セリフ言う機会なかったアル。その分際で生意気アル」

「ああ？てめえ一体何訳わかんねえこと言ってやがんでい。もう二度とセリフも地の文も付かねーようにしてやるうか？？」

「オイおめーらしい加減にしねえか。話がいつまでたっても進まねえ」

「やめてくださいよ二人とも。このやり取りにどれだけの時間、中

の人が頭ひねってると思ってるんですか」

土方と新八二人に同時に突っ込まれたが、依然沖田と神楽は睨みあったままだった。

やれやれとため息をつきながらも土方は新八に向き直ると説明を始めた。

「これは攘夷志士が持っていたもんでな。天人が作ったからくりらしいんだが・・・一体何に使うものなのか皆目わからん。ただ、連中にとつての切り札だったようだから何か武器であることには間違いないんだが」

そう説明しながら、煙草に火をつけた。

「これが武器・・・ですか」

新八はそう呟きながらその、切り札、をみるが、やはり落書きまみれのスロットマシンにしか見えない。

「土方さん、いい加減ガセネタつかまされたって認めなせえ。

今なら切腹くらいで許しやすから」

「うるせえてめえは仕事したくないただだろ黙ってる！

てか切腹くらいでって何だ始末書レベルみたいに言うなてめっコノヤロー」

騒ぐ土方と沖田を無視して近藤が新八に向き直ると

「そついう訳で君たちにはこれが何なのかを調べてもらいたい」

と言い放った。

「ええっ！？真撰組でも分からないものを僕たちに！？

そんなの無理ですよ！パソコンだって口々に違いが分からないのに・

せめて源外さんとか、詳しい人に聞いてみるとか・・・」

そこまで言いかけて、新八はハッと気が付いた。

そう、江戸一番のからくり技師・平賀源外はいつぞやの祭りの一件で政府から追われる身である。

その彼に政府側の真撰組が仕事を依頼することはできない。

「・・・つまり、僕たちが、詳しい人に聞けばいいんですね」

新八がそう言うと近藤が笑顔を見せた。

「すまないな。つまりはそういうことなんだ。

本当に些細なことでも分かればいい。

例えば、どこの星の物かさえ分かれば、後はその星に直接聞けばいいだけの話だからな」

そこまで聞くと、新八はなんだか気が楽になったような気がした。

「そうですか。分かりました。なるべく詳しく調べてみますね。」

新八がそう言うと、沖田と取っ組み合っていた土方が突然声をあげ

た。

「あ。

そう言えば一つ分かっていたことがあったな。  
下っ端の志士が証言したんだが」

と言って、スロットマシンもどきのバーの横にある穴を指差しながら

「どうもこの穴に髪の毛のようなものを入れていたらしい。  
そのあとどうなったかは知らないらしいがな」

と言った。

「トシが訊いたから間違いなく知らないとみていいだろう」

と近藤が付け足したので、新八は想像して少し寒気がした。

髪の毛の話は沖田も初めて耳にしたようで

「髪の毛え？

オイ土方あお前ふざけるのもいい加減にしろい。

どこの星に髪の毛入れて動かす武器なんかあるんδει！

やっぱり切腹じゃ許さねえ俺がたたつ切つてやらあ」

そう言って刀を抜いたので近藤も新八も、今度は無視する訳にはい  
かなかった。

取っ組み合う二人を止める新八の視界の端に、洗面所へと向かう神  
楽の姿が入ったがさほど気にはしなかった。

このあと、この5人に起こることを知っていたら全力で止めていた  
であろう・・・

## 2. 人様のものをベタベタ触るのはやめなさい（後書き）

「おいチャイナ。何度言ったらわかるんない。

それには触るなって言ってるんだろーが。

お前の顔の両脇に付いてんのはただの餃子か？切り落とすぞ」

土方と取っ組み合っていた沖田がふと目をやると、神楽は何やらスロットマシンもどきをいじっていた。

「ナニ？！ワタシの顔に餃子ついてたアルか！？」

早く教えるアル、ワタシ腹ペコ餃子食べたいネ！」

「神楽ちゃんそのままの意味じゃないから！！

さらっと物騒なお願いしてるから！そんなの描写できないからやめて！！

てゆーか神楽ちゃん、お願いだからそれから離れて！！」

新八がそう叫ぶと神楽は渋々スロットマシンもどきから離れた。

いや、離れようとした。

「「「あ「「「

男たちが間拔けな声を出した。

「ん？」

神樂が袖に違和感を覚え振り返ると袖がスロットマシンもどきのバーに引つ掛かかり、動いていた。

！！！！！ピロピロピロピローン！！！！！！

突然大きな音と共にスロットマシンもどきの下の部分から煙が出てきた。

「何てことしてくれんだオメーはあ！！！！！！」「ええ嘘お！！！！？トシイ！！！！偽物だよねアレ何も起きないよねアレ！！！！」「知るかつ！！！！アンタ俺のこと信じてるのか信じてないのかどつちなんだ！！！！」「てめーチャイナア！！！！もし本物の武器だったら許さねーからなあああ！！！！」「うるさいアル！こんな煙でビビんなヨ！お前ら本当にキタマついてるアルか」「」「だまれこのガキイイ！！！！！！！！」「」「」

怒号が飛び交う中、万事屋を煙が覆っていった。

### 3。都会の人は田舎に対しとかく偏見を持ちすぎる（前書き）

焦る必要はないさと自分に言い聞かせることにしました

なのでこの小説、長丁場になりそうです

それでも一人でも多くの方がお付き合いしていただけたら嬉しいで  
す



### 3. 都会の人は田舎に対しとかく偏見を持ちすぎる

辺りを覆っていた煙は次第に薄れ、ぼんやりとだが互いの姿を確認できるほどになった。

ゲホゲホと咳き込みながらも近藤は回りを見渡す。

「新八くん！チャイナア！トシ！総悟お！皆無事か！？」

「大丈夫です、少しむせただけです」と新八が答えると次々に皆が返事をした。

「ゴリラうるさいアル！そんなにデカイ声出さなくとも聞こえるネ！」

「てめーは一般人を一番に気遣う近藤さんをゴリラとしか言えねーのか。せめてゴリラさんと呼べい」

「総悟おおそれフォローになってないからああああ！」

咳き込みながら土方も答える。

「近藤さん、みんな無事だ。」

煙が出てきただけで体には何も影響ねえようだ」

「そのようだな。よくわからんがまあよかった！」

そうしてる間にも強い風が吹き、5人が互いの顔をはっきりと見えるまでに煙が晴れた。

「・・・て・・・え！？」

なんで風が吹くの！？僕たち、万事屋にいたはずじゃ・・・」

新八がそう呟くと他の4人も異変に気付いた。

天井は消えており頭上には青空が広がっている。

辺りに目をやると、見渡す限り田んぼが広がっており自分たちは田んぼ道のど真ん中にいることに気がついた。

ええーっ!!!!!!!!!!?

「ここどこアルか!?いつの間にこんなとこに来たアル!?!」

「今時こんな田んぼしかねえほどの田舎があるなんて・・・電柱すらねーぞ」

「一瞬でこんな所に来ちゃうなんて・・・やっぱり天人の作るものってすごいな」

「お、近藤さん、アレを見なせえ。向こうから子供が歩いてきますぜ。」

「この辺りの子供だろうか。とりあえず聞いてみよう」

沖田が示した方向を見ると、田んぼ道に向こうから一人の少年が歩いてくるのが目に入った。

年のころは10くらいだろうか。

袴に羽織を身に付け、長い黒髪を高めに縛っている。勉強道具を片手に持ち、歩く姿は子供ながらも何とも頼もしい。

近づくにつれ、少年の顔が怪しいものを見るかのように険しくなっていた。

無理もない、そう思いながら近藤がいつもの人懐っこい笑顔でその少年に話し掛けた。

「少年、ちょっと教えてくれ。  
俺達は道に迷ってしまつてな。ここはどのあたりだろうか？」

賢明に見えるその少年は、警戒しながら近藤たちをじろじろと眺めたが、堂々と答えを返した。

「少年じゃない桂だ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

明らかにどこかで聞いたことのあるフレーズ。

・・・アレ？もしかしてこのフレーズ全国の桂さんの間で流行ってるのかな？そくだよねきつとそくだよね

必死になって思考を巡らしている新八の横にいた神楽が、間髪入れずに言葉を返した。

「なんだソレ。お前ヅラの真似してるアルか？

ダメだヨあんな頭の可哀想な大人の真似したら。お前まで可哀想な頭の大人になつてしまふアル」

「ヅラじゃない桂だっ！

何なんだ貴様らは一体。怪しい奴らめ。

この桂小太郎、たとえ大人相手でも容赦しないぞ！」

「「桂小太郎！！！！？」」」

当然真撰組の三人が反応する。

しかし、目の前の桂小太郎はどうみても少年であり、彼らの知る桂小太郎ではない。

「お前あんな電波バカと同じ名前アルか？可哀想アルな。  
よし、お姉ちゃんが新しい名前つけてあげるネ。小五郎はどうアル  
か」

「神楽ちゃああん！本者は駄目えええ！！！！！！」

自称桂小太郎の目がきつくなる。

「貴様らさつきから訳の分からんことを・・・

第一、貴様らの着ている服、それはなんだ？貴様らは一体どこから・

・・・」

桂小太郎は何かに気付いたようだった。口をきゅつと結ぶと腰を低くした。いざという時すぐに動けるようにである。

「貴様らが、最近江戸を、国を騒がせている天人という奴らか。」

「・・・最近？」

その言葉が気にかかった土方の頭に、ある考えが浮かんだ。  
この状況をすべて説明することができる、ひとつの答えが。  
そしてそれを確かめるのは簡単だった。

「オイ桂小太郎とやら。  
変なことばかり言って悪かった。俺達は怪しいもんじゃねえし、お前さんに危害を加える気もねえ。  
ただひとつだけ教えてほしいんだ。  
今、何年だ？」

なぜそんなことを土方が聞いたのか理解できなかったのだろう。桂小太郎は一瞬戸惑った。  
だが、戸惑ったのは桂小太郎だけではなかった。  
新八、神楽は当然ながら、長年共に過ごした近藤沖田すら、突然そんなことを聞き出す土方の意図が読めないでいた。

自分でも馬鹿げていると思う……だが、もしそうなら……すべて  
のことに辻褄が合う

皆が土方を見る中、土方は真剣な顔で桂小太郎を見つめ続けた。  
桂小太郎は警戒しながらも、はっきり答えた。

「今は安政6年だ」

その答えを聞くなり皆が一斉に桂小太郎を見た。

誰もが嘘だろうと言わんばかりに驚いていた。

ただ、予想していた土方と何のことかわからない神楽は平然としていた。

【改】4。若いときの日記ほど人に見られたくないものはない（前書き）

ちよこつと加筆修正しました



【改】4。若いときの日記ほど人に見られたくないものはない

「やはりそうか・・・すまなかったな桂。

お前はこれから寺子屋に向かうところか？邪魔して悪かったな」

土方はそう言うと桂小太郎を行くように促した。

桂小太郎は警戒しながら彼らの横を通りすぎると、何度か後ろを振り向きながらも足早に去っていった。

彼が向かった方向に寺子屋らしき建物が見える。その更に奥には集落が見えた。

「安政6年って何アル？」

話の口火を切ったのは、全く状況が理解できていない神楽である。

「安政てのは年号なんだ。

もし・・・本当に今が安政6年なら・・・

僕たちの時代から10年・・・いや20年近く昔ってことになるんだ・・・」

「はあ！？何ソレ！？」

ようやく皆と同じ衝撃を受けた神楽。

なんでアルかそんなの信じないアルと新八に食いかかる神楽から土方へと視線を移した沖田が口を開いた。

「しかし土方さん。なんでここが過去かもしれないねえってわかったんで？」

「つってもまだ信じきれていませんがね」

「そもそもあの突入の時から腑に落ちなかったんだ」

「あのからくりを押収した時だな？」

「ああ。最強の切り札と言われるくらいだから武器に違いがないと思いい込んでいた。

それに浪士どもが真撰組に追い込まれたとき最後の手段として使うんじゃないかと警戒していた。」

「最後、部屋に立て籠った時のことですかい」

さすがの沖田も今回は真面目に話を進めている。

騒いでいた神楽と新八もいつの間にか彼らの話を黙って聞いていた。うなづくと土方はまた続けた。

「だが一切使う素振りも見せず、結局最後まで浪士どもの獲物は刀のままだった。

つまり、あれは武器として使う代物じゃなかったってわけだ。

そして今のやりとり。攘夷志士どもが最強の切り札と豪語するからくり。

もし、連中が過去からすべて変えてやろうと考えたならすべて合点が行く」

「つまり・・・あれはタイムマシンだったって訳ですね」

「そういうことだ。」

すべてが説明され、あるべきところへ答えが納められても、空気は一向によくはならなかった。

今この身に起こっていることが受け入れられないのと、これから先どうすればいいのか全く見通しがないことが一層不安を募らせた。

「そういえば」

重い空気に耐えられなくなったのか、新八がふと思い出したことを神楽に尋ねてみた。

「ここに来る前、沖田さんと土方さんが取っ組み合つてるとき神楽ちゃん洗面所に行ったよね？あれ何してたの？」

「あ、あの時アルか。」

あれは洗面所のブラシについてた髪の毛取りに行つてたアル。白い毛3、4本。たぶん銀ちゃんの毛アル」

皆の表情が凍りついた。

「まさか神楽ちゃん・・・それマシンに入れたの・・・？」

「入れたに決まってるネ」

「てめーチャイナアア

やっぱりあの時ぶった切っておけばよかったんでいつ!」

「人のせいにすんなよ税金泥棒」

オマエがあん時声かけたから裾が引つ掛かったアル!」

取っ組み合う沖田と神楽を今回は誰も止めなかった。

「はーあ・・・もし髪の毛さえ入れてなきゃ動かなかったのかなあ・・・」

「過ぎた事を言っても仕方ない。今はこの世界からもとの世界へ戻る方法を考えよう」

「つと待った近藤さん。

何もすぐに戻る必要はねえんじゃないか。しばらくこの世界の桂小太郎を追ってみるってのはどうだ」

「それでどうするつもりだトシ?

まさか子供の桂を切るつもりか?」

「馬鹿言わないでくれ。そこまで非道じゃねえ。

そうじゃなくて、俺が知りたいのは万事屋の方さ」

そう言った土方の目が鈍く光ったのを新八は見逃さなかった。

「野郎、間違いなく桂と繋がりがあ

池田屋の事件も高杉派と桂派が衝突を起こしたときも奴は関わっていた。

でもいくら問いただしても誤魔化しやがる。だったらいっそ直接目にした方が早くていいだろ」

そんな、人の過去を勝手に覗き見るような真似はしたくない、と言いかけて新八はその言葉を飲み込んだ。

確かにそんなことはしたくない。いつも銀さんは昔の話を極度に避ける。銀さんが嫌がっているのに勝手に覗くわけにはいかない。

でも。

あの高杉という人。銀さんや桂さんごとこの江戸を壊しかねない、あの危険な人。

僕たちはあの人についてもっと知るべきではないだろうか？

でないと、いつの日か

銀さんと桂さんが僕たちに黙って、出ていってしまう日が来てしまうような気がしてならなかった。

あの人と決着をつけるために。

そんな不安が頭をよぎった。

そうだ。あの紅桜の時だって助かったけれど、相当怖い思いをした。けれど・・・今度また同じようなことがあつたら・・・その時は・・・

新八が答えを出せずにいると、しばらく考え込んでいた近藤が首を横に振った。

「トシ！お前、昔自分の日記見られたときすごいキレてただろう！それと同じことを今やろうとしているんだぞ」

「あの時日記見たのオメエだろ！なに他人事みてーに話してんだ！！それにこれは日記レベルの話じゃねーんだよっ」

そう言つと土方は己の剣に手をやった。

「もし攘夷活動に関係あるとわかれればたつ切らなきゃならねえ」

新八は息を飲んだ。

土方は間違っていない。それが彼らの仕事なのだから。

でも・・・

「トシ！

疑わしきは罰せず、だ。

どんなに怪しくても今はまだ一般市民。一般市民としての安全や権利を守らねばならん！」

「近藤さん・・・」

新八は近藤をみた。この男が、こんなに頼もしく見えたことが今まであっただろうか。

一方、土方は何も言わずに近藤を見つめていた。しかし、近藤の目を見て無理だと悟ったようだ。  
土方は剣から手を離れた。

「仕方ねえ。今回は大人しく帰るとするか」

その言葉を聞いて新八に笑みが戻った。

「戻るのはいいいけれど、一体どうやって戻るアル。よく考えたらここにあのタイムマシンないネ」

沖田に胸ぐらをつかまれながら神楽がぼそつと言いつつ放った。

皆互いに顔を見合わせた。

「誰か助けてええええ！！！！！！」



5。裸足じゃ田んぼ道なんか痛くて歩けたもんじゃない（前書き）

いつも読んでくださる方、お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます

これを励みに頑張りますので

これからもよろしく願います

## 5. 裸足じゃ田んぼ道なんか痛くて歩けたもんじゃない

5人は田んぼ道を歩いていた。

靴もなく、神楽は傘もない。とりあえず今は新八の持っていた手拭いを頭に被っているが、やはり傘は必要だろう。そろそろ昼飯時だろうか。腹も空いてきた。

「とりあえず桂さんが向かった方向に歩いてみませんか？何か手に入るかも知れません」

膠着状態のなか、新八がそう切り出すと反対するものもいなかったため、皆とぼとぼと歩き出したところであつた。

しかし、皆一様に口を結んだまま、誰も口を開こうとしない。そんな空気に嫌気が差した沖田が、いい加減にしなせいと口火を切った。

「なるようにしかならねえ。これ以上グダグダ言ったって始まりませんぜい。」

最悪、20年経ちやあ戻るんだ。気長に行きやしようや」

「何にも戻ってねえよ！むしろ元の時代が来たとき俺たちが進みすぎてんだよ！」

「嫌だアアア！！50歳近くでお妙さんに会うなんてっ！いくら優しいお妙さんでもそんなジーサン相手にしてくれるはずないじゃないかああ！！」

「いや今でも相手にされてないですからね！？一方的にアンタがストーカーしてるだけですからね！？」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ男たちの横で神楽はダルそうにそのやり取りを聞いていた。

「あーこの日差し・・・さすがにきついアル。お腹もペコペコ・・・ヤバい死ねるネ・・・」

・・・ん？誰かこっちに来るアル。」

神楽が立ち止まると騒いでいた新八たちも気が付いた。

確かに、道の先からこちらに向かって歩いてくる人影が見えた。

長い髪を下ろしていたため最初は女かと思われたが、近づくにつれ男だということがわかった。

その男は恐れる様子も急ぐ様子もない。帯刀しているが、それに頼る様子もなく落ち着いた足取りでしっかりとこちらへ向かってくる。

次第に顔がはつきりと見えるほどの距離にまで間が縮まった。

その男は着流しに羽織の姿で、髪の色はやや薄い茶。年は30前後といったところか。

口元には穏やかな笑みを浮かべている。

この男は一体何者だろうか。

新八たちが互いに顔を見合わせた。

とりあえず危険は感じない。

声はつきりと聞こえるくらいの距離になると、男は足を止めた。

「こんにちは」

物腰同様、とても穏やかで優しい声である。

「先ほどはうちの小太郎がお世話になったそうで。本人から無礼な態度をとったと聞きました。すみません。悪気はなかったのです。どうか許してやってください」

その男の口から意外な言葉が聞かれたため、皆はあっけにとられた。

「・・・いや、許す許さないなんてとんでもない・・・。

こちらこそ、小太郎くんに不快な思いをさせてしまったようで申し訳ない」

驚きながらも近藤が答えると、男が安心したように微笑んだ。

「ご覧の通りのどかな田舎ですから。よそから来た人をあまりみた事がないのです。驚いたんでしょう」

そう言って、改めて近藤を眺めた。

「珍しい服装ですね。皆さん異国からいらしたんですか？」

「え・・・あ、ええまあ・・・そんなところです」

近藤が苦しそうに答えると土方が助け船を出した。

「籠で旅をしていたんだが、手違いで見知らぬ土地に下ろされてしまったな。困っていたところに桂君が通ったんだ」  
「そうだったんですか。それは大変でしたね。」

そう言うと、男は寺子屋の方を手で示し、言った。

「何も大したことは出来ませんがよかったです家に戻ってしまいませんか？」  
「ちょうど昼食を用意したところです」

「ホントアルか！？ワタシお腹ペコペコ、行くアル！」  
「ちょ、ちよつと神楽ちゃん！」

子供らしく遠慮をしない神楽をみて、嬉しそうに男は目を細めた。

「どうぞいらっしやい。」  
皆さんも遠慮なさらず是非。異国のお話も聞きたいことですし」

そう言って笑顔を見せた。

それを見て近藤たちは互いに顔を見合わせた。

「この際だ、お言葉に甘えんとするか」

「そうだな」「そうですね」「そうしやしょう」

その男に向き直ると、近藤がすまない世話になると頭を下げた。

「とんでもありません。困った時はお互い様ですよ。どこの国の方であつてもね」

そう言って体を寺子屋の方に向けようとして、男は何かに気付いた。

「失礼いたしました。私としたことが・・・  
自己紹介がまだでしたね」

そう言うともう一度、皆に顔を向けた。

「私は吉田松陽。あそこで小さな村塾を開いています。よろしくお  
願いしますね」



## 6. 過去を変えるのはタブーって言うけれど、タイムマシンで過去に行ってる時

新八たちの前に、先程の少年、桂小太郎が嫌そうな顔をしながら突っ立っていた。

ここは村塾と繋がっている、吉田松陽の住まいのとある一室。

一通り自己紹介が終わったところに、おずおずと小太郎が茶を持って入ってきたのである。

茶を配り終わっても部屋を出ず、何かを躊躇っている様子の小太郎に松陽は声をかけた。

「どうしたのです、小太郎。お客様に何か言いたいことがあるのでしょうか?」

そう言われると、納得いかないとでもいう風に松陽を見た。

「でも先生っ、やつらが・・・」

「お客様に向かってやつらはしないでしよう、小太郎。いい加減聞き分けがないと2週間厠当番させますよ。」

笑顔ではあるものの、きつ、と小太郎を見据えると小太郎はもう何も言えなくなってしまうた。  
そして新八たちに向き直り、

「……無礼な事を言つて……すまなかつた……」

と不本意そうに言った。

小太郎を混乱させるようなことを十分にしている手前、  
謝られるのはおかしい話なのだが、これ以上話をややこしくさせるのも面倒である。  
新八たちは苦笑いで答えた。

「いや、こちらこそすまなかつた、桂……くん」

と気まずく近藤が返すと、  
ほら、悪いのは向こうでしようと言わんばかりに小太郎は松陽を見た。

松陽はそれに笑顔で返した。

「よくできましたね」

そう言うとき小太郎の頭を撫でながら

「厠当番は一週間に負けてあげましょう」

と付け足した。

「ええ！？先生ひどいっ！謝ったじゃないですかっ！！」

「見知らぬ人たちに無礼な態度をとったのです。それくらいの罰は受けて当然ですよ」

そんな、と泣きつく小太郎に松陽は笑顔でぴしゃりと言った。

あれ、この先生意外と鬼だ・・・

その光景を見つつ、皆がそう思った。

「さあさあ小太郎、お喋りはここまでです。

食事の用意をするから二人を呼んできてください」

ふてくされていた小太郎だったが、話が急に変わったためか、その表情もどこかへ消えていた。

「食事、ですか？」

「そうです。お客様の分もね。

小太郎はお腹、空いていませんか？」

「私は食べてきたので・・・おそらく、あいつも」

小太郎は新八たちを見るとしばらく考え、

「お客様の人数も多いですし、店屋物を頼んではどうでしょうっ。」

と提案した。

新八たちがぼうつと、そのやりとりを見ていると廊下から軽い足音が一つ近づいてきた。

そして、部屋の前で止まったかと思うと突然戸が開かれた。

そこには、小太郎よりもやや背丈は小さく、髪の毛も短く整えられた、目付きの悪い少年が一人立っていた。

先刻まで稽古をしていたのだろうか、胴着姿である。

「晋助！お行儀が悪すぎますよ！！」晋助と呼ばれた少年はその言葉には答えず、威勢よく口を開いた。

「先生っ！ただでさえ先生は幕府の連中に目えつけられてるんだ！こんな、どつからどうみても怪しげな連中を家に上げたら、何言われるか分かったもんじゃない！！」

そう言つて新八たちを睨んだ。

揃いも揃つてあなたたちは、とその少年を諭す松陽を見ながら

近藤、土方、沖田の三人が落ち着かない様子で顔を見合わせていた。

（今・・・晋助と呼んだか？）

（確かにそう聞こえやしたぜ、近藤さん）  
（晋助といやあ・・・）

低い声で何かを話す三人を見て、新八も神楽も何かがおかしいことに気が付いた。

（ワタシ・・・あの顔どこかで見たことある気がするネ・・・）

神楽がボソツと新八にそう言うのと、新八も何がおかしいのか気付いた。

そう、どこかで見覚えのある顔なのだ。  
しかし、どこで見た顔だったか・・・

場の空気が「この少年は・・・」となっているのに気が付いた松陽はふてくされている少年の後ろに回り、肩に両手を置いて無理矢理新八たちに体を向かせると

「すみません、紹介がまだでしたね

うちの村塾に通う、高杉晋助です」

と言った。

やはり、と神妙な面持ちになる真撰組の三人とあんぐりと口を開ける子供たち。

「そうアル！両目があるから分からなかったけど・・・あの時のあいつネ！」

「か、神楽ちゃん、あまり大きな声で言わないで」

新八が慌てて神楽を制した。

（僕たちが未来から来たなんて言ったら、余計面倒なことになったやうよ！）

そうだったアル、ゴメンと大人しく謝ると晋助に視線を戻した。

自分の名前を聞いてざわつく新八たちをみて、  
一度落ち着きかけた晋助の頭にまた血が上ったようだ。

「なんだてめえらっ！人の名前がそんなに珍しいのかっ！」

珍しくはねえがそのうち物騒に聞こえるようにならア、とつぶやく  
沖田の頭を土方がはたいた。  
近藤が全力で訂正する。

「すまん高杉・・・くん、聞いたことのある名前だったから驚いたんだ。」

・・・もちろん人違い、けどなアハハハ・・・」

そして、晋助の切った啖呵に呆れ顔の松陽にも謝る。

「先生、あんまり子供たちを叱らないでやってください。  
私たちが招かれざる客なのは本当のことだし、  
我々もここにきてから驚くことばかりで・・・無礼を働いてばかり



なのですから」

そうは言っても、と申し訳なさそうな顔をする松陽に、それに、と近藤が続ける。

「こいつらもそうでしたが、一芸に秀でる人間てのはガキの頃はやんちゃで手がつけられないもんです。それくらいがちょうどいいんでしょう」

近藤がそう言うと、沖田がうなずきながらケロリと言った。

「確かにねえ。土方さんはいつまで経ってもやんちゃで困りやすぜい」  
「どの口が言っただてめえ、ああ?？」

松陽たちを尻目にぎゃあぎゃあ騒ぎ始める土方たちをみて、松陽もくすりと笑って晋助の頭を撫でた。

「晋助。」

あなたが私を心配してくれているのはよく知っていますし、とても嬉しいです。」

晋助は体をひねって松陽を仰ぎ見た。

「でも、よく知りもしない相手を拒絶してはいけませんよ。まずは相手を知る努力をせねば」

そう言って、穏やかな笑顔を晋助に向ける。

「あなたにはそれができるはずですよ。そうでしょう？」

そう言われた晋助は、照れを隠すようにうつ向いた。

「まあ・・・できないはないけど・・・」

この二人のやりとりを見て、新八は思わず優しい笑みが溢れた。それと同時に複雑な想いも寄せてくる。

この先生想いの少年が、どうして過激攘夷派と成り果てたのか・・・

そんな想いが頭をよぎった。

桂さんだつて今でこそ穏健派だけれども、昔は過激派だった。

この二人に、一体なにが起きたのだろう・・・

そんな想いにとらわれながら、小太郎と晋助を眺めるうちにふと一つの疑問が浮かんだ。

・・・アレ？

桂さんにあの人に・・・次第に役者が集まりつつあるけど・・・

その時、トタ、トタと間の抜けた足音が廊下から聞こえてきた。それに気付いた小太郎が部屋から顔を出して声をかける。

「やっと起きたか。今起こしに行こうと思っていたところだ」

「おめーら・・・今何時だと思ってんだ・・・」

うるさくて目え覚めちゃったじゃねーか」

「貴様こそ今何時だと思っている！まったくいつまで寝ているつもりだ。だらしないぞ」

「うるせーッラ。日曜日は昼まで寝ていいって決まってるだよ」

「ッラじゃない桂だっ！」

そんな怠惰な決まりがあるものかこの馬鹿モン」

誰かが来たようだと皆が戸口に注目する。

しかし、誰もが嫌な予感に襲われていた。

・・・この、グダグダなやりとり・・・

次の瞬間、戸口に現れたのは一人の少年。

背は晋助と同じかそれより低いくらい。

寝起きのせいか着流しはだらしく崩れている。

その少年は死んだ魚のような目でその場の全員を見回した。

「ん？ナニコレ？」

銀髪の頭をかきながら。

「銀さん！！！！？」 「銀ちゃん！！！！？」 「万事屋！！！！？」  
「旦那！！！！？」

皆が叫んだ。

7。いつまでも変わらないものがあるって嬉しい（前書き）

文章の雰囲気がコロコロ変わってますね・・・

読んでて落ち着かなかったらすみません

あとがきはオマケです。流してください

どうも私の想像する松陽先生はハチャメチャで、笑顔で毒を吐くタイプなんですよね・・・

## 7. いつまでも変わらないものがあるって嬉しい

寝起きに初対面の人からいきなり叫ばれた銀時は、わけが分からず松陽をみた。

「おはよう銀時。

異国から見えられた方たちですよ。ご挨拶なさい」

「いこく・・・？へえ・・・」

「銀時、無礼な態度はとるなよ」

「オメーが言っなよヅラ」

「お前もだろ高杉。というかなんでお前は廁当番を言いつけられんのだ」

「廁当番？何、お前そんなの言いつけられたの。まあヅラにゃ、お似合いだな」

「なんだと貴様、どういう意味だっ」

「えーと、坂田銀時でえす。よろしく」

小太郎と晋助の口喧嘩をBGMに、銀時がやる気のない調子で自己紹介をした。

こいつは本当に変わらねえなあと思いながらも、  
この三人が幼馴染みであつたことに誰もが驚きを隠せないでいた。

その様子を見て、疑問を感じていた松陽が口を開いた。

「もしかして・・・皆さん、銀時のことを何か知っているのですか？  
どうも見ていると、銀時の容姿に驚いているようではないですね？  
何か違うことに対して驚いてらっしゃる。違いますか？  
よかったです何か、教えてくれませんか」

そう言われ、たじたじになる一同。

「ああ・・・いや、その・・・知り合いに似ていたもので・・・特



に何を知ってるわけでもなく・・・」

しどろもどろに近藤が答えた。

そうですか、と寂しそうに松陽は言つと銀時に目をやった。

「・・・実は、銀時は拾い子なのです。

身寄りもなく一人で、

戦場で身剥ぎをしては食いつないでいたのを私が連れてきたのです。

」

一瞬、皆の息が止まった。

「親の事も自分の事も何一つ分からず・・・

なので・・・

もし、銀時のことを少しでもご存知なら・・・何でもいい、とにかく話を聞かせてもらおうと思って・・・」

誰も何も言えなかった。

僕らは何も知らない。

銀さんがどんな風に過ごしてきたのかを。

本当に・・・何も

「・・・そういうことでしたか・・・

しかし、我々も本当に何もわからない・・・申し訳ないが・・・」

やっとのことで近藤がそう言った。

「いえ、こちらこそすみませんでした・・・」

驚いた様子の小太郎と晋助が松陽を見ていた。

何でも知っている松陽が、執拗に人に尋ねている姿は珍しい。

それだけに、重要だということが分かる。

「この子は・・・普段、そんな事を気にするような素振りを一切見せませんが・・・」

やはり、少しでも分かることがあれば知らせてやりたいですから・・・」

何とも言えない空気が流れた。

物心ついたときから戦場で身剥ぎをして生きてきたってのか・・・

なんて野郎だ・・・

土方が真剣な表情で銀時を見つめる。

銀時もそれに気付くと、何かを思い付いたかのように土方を指差した。

「アンタ・・・もしかして多串くんのお兄さん？」

「また多串かよ！一体誰なんだよ、それはよ！！」

思わずいつものように反射する土方。

「あゝ確かに・・・誰かに似てると思ったが・・・多串に似てるな」

と晋助も口を挟む。

「多串って・・・前、村塾にいたあの多串か？  
縁日で15匹も金魚すくった、あの多串？」

「15匹!？」

こいつの話だとでかくなり続けてるって話だったんだけど!15匹  
もでかくなり続けてんのかよ!？」

「そいつぁ大変ですねい、多串くん」

「誰が多串だっ!」

「もうお前は面倒だから多串でいいアル」

湿った空気が、たちどころに消え去った。

子供たちと土方たちが楽しそうに言葉を交わす姿を見て  
松陽の顔には笑顔が戻っていた。

7。いつまでも変わらないものがあるって嬉しい（後書き）

小太郎「先生！晋助もお客様に失礼なことをしたのに、俺だけ廁当番は納得できません！」

松陽「そうですね・・・じゃあ罰として、一週間自宅で自習、とかはどうですか？」

晋助「ええっ！？自宅で自習？？」

小太郎「無理だな」

銀時「鬼だ」

松陽「あはは、嘘ですよ。晋助、あなたも廁当番やりなさい」

晋助「やる！来れないくらいなら廁でも何でも掃除する！！」

小太郎「あれ本気だったな」

銀時「ああ、マジだった」



## 8. 伏線を張るのって難しい(前書き)

これから投稿するペースが遅くなると思います。

それでも最後まできちんと完結させたいと思います。

m 時間は長くかかってしまいましたがよろしく願いますm (――)

## 8。伏線を張るのって難しい

昼食が用意できるまで、村塾をご覧になつてはどうですか？  
と松陽に提案され、一行は小太郎と晋助に案内をされていた。

銀時は松陽と共に食事の支度をしている。

「なぜ俺がこんなことをしなきゃなんのだ」

「なら高杉、お前が先生と支度をすればよかるう」

そう言われて反論するかと思われた晋助だったが、黙って小太郎を睨んだままだった。

「できまい。」

ならば黙って案内役をやっているだけでいいのだ」

「……うるせえッラ」

「ッラじゃない桂だっ！」

何の話をしているのかさっぱり分からない、という目で新八は二人を眺めていた。

一方で、真撰組の三人は違う目で二人を眺めていた。

（まさか三人全員が揃っちゃうとはな・・・）

（旦那と奴らが幼馴染みだったア思いもしませんでしたねい）

（しかし・・・）

桂も今でこそ穏健派だが昔はバリバリの過激派だった。

教え子二人がそんなってことは・・・

あの松陽って野郎、虫一匹も殺さなそうな顔しときながら一体なんてえ思想教えてやがるんだ？）

（しかも幕府から危険人物扱いされてるらしいじゃねーですかいますます怪しいや）

黙って聞いていた近藤が口を開いた。

（俺には生徒想いの優しい先生にしか見えんがな）

それを聞いた土方がため息をつく。

（アンタはすぐそれだ。人の良いところしか見ねえ）

（トシ。憶測で物事を決めつけてはならんぞ。先生も言っていたろう。まずはその人を知る努力をせねばならん、と）

そう言うてにかつと笑う近藤を見て、二人は何も言えなくなった。

まったく、この人は・・・

呆れたように、それでいてどこか嬉しそうに苦笑した。

しかし、と言って近藤は小太郎と晋助を見直し

（子供の頃はこんなに仲の良かった者たちが、どうして今は対立するようになったのか・・・）

とつぶやいた。

（いや、今も仲良さそうには見えねーんだけど・・・）

もはや、小太郎と晋助は案内そっちのけで互いに睨み合っている。

「そもそも俺は、こんな連中が先生と会うことだって我慢ならねーのに……」

「……ますます先生の評判が悪くならア……」

「だから俺は、先生に出前をとっては、と提案していたのだ。それをお前が割り込んできたからいかんだ！」

噛み合っているんだか噛み合っていないんだか、全く分からない会話。

とりあえず、歓迎されていないことだけはよく分かる。  
聞いていて、新八の居心地の悪さはピークに達しようとしていた。

その時、どこからかいい匂いが漂ってきた。

「ん！なんか美味しそうな匂いしてきたアル！！」

空腹が限界に来ていた神樂がすぐに気付いた。

小太郎たちもそれに気付く。

「・・・どうやら、支度ができたようだな」

小太郎と晋助が顔を見合わせる。

「戻るとするか」

「・・・そうしよう」

そう言って、一行は最初の部屋へと戻っていった。

## 9。空腹は最高の調味料（前書き）

松陽キャラ崩壊警報発令中！

え？今さら？もう遅い？

それは失礼しましたm（——）m

注意！あとがきまで本編が続きます。

## 9。空腹は最高の調味料

部屋に戻ると、立派とは言えないが男性が作ったとは思えないほど小綺麗な昼食がテーブルの上に並んでいた。

肉じゃがにカボチャの煮物

人数分なかったようで二人に一皿、焼き魚が置かれている。ネギと豆腐の入った味噌汁からは温かい湯気が上がっていた。

「わあっすごいアル！」

「美味しそうですね！先生一人でこんなに作ったんですか？」

「ええ。独り身なものですから。」

「言ってもほとんどが夕食の残り物で申し訳ないのですが」

とんでもない、ごちそうですと近藤が言いながら席についた。

銀時は松陽の横に腰を下ろした。

全員が席についた様子を見て、小太郎と晋助は

「では自分達は道場にいます」



と言って部屋を出た。

しばらく食卓を見回してから

「あの、マヨネーズありませんか」

と聞いた土方に近藤が肘鉄を食らわせた。

（トシイイイ！いつだと思ってんの！？そんなもんあるわけないでしょーが！）

（いや、スマン・・・つい・・・）

「マヨ・・・すみません、何ですか？」

「いや、なんでもないです」

必死な近藤を松陽は不思議な様子で見たが「そうですか？」と笑った。

「では、お待たせしました。  
いただきますようか」

そう言って手を揃えた。

「いただきます」

皆がそう言つと、銀時はすぐに箸をつかみ、ガツガツとご飯やおかずを口に入れた。  
よほど腹が空いていたのだろう。

神楽も負けじと肉じゃがを口に頬張る。

「神楽ちゃん、お行儀悪いってば」

隣の新八がすみませんと苦笑しながら松陽に向くと

「いえいえ。お気になさらず。

お口にあったように嬉しいですよ」

と許してくれた。

では僕も、と皆が思い思いにおかずに箸を伸ばし、口に運んだ。

皆の動きが一斉に止まった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
づ  
・  
・  
・  
つ

不味くはない・・・

不味くはないが・・・

何故こんなに甘いんだ!?

肉じゃがを口に入れた近藤が、気付かれぬようにこっそりと松陽を見る。

松陽は笑いながら銀時の口元についた米粒をとってあげていた。

・・・いや、これは煮物・・・甘口に作ってしまったただけなのかもしれない・・・！

そう思った新八はすぐに味噌汁を口に運んだ。

なんでエエエエ!!？

なんで味噌汁をこんなに甘く作れるのオオオオ!!？

新八は口から吐き出しそうになった。

それを見た沖田はならば、と目を光らせた。

はっ！と土方は気付くが、もう遅い。

ばしっ

と土方の前に置かれていた焼き魚を素早く箸でかつさらった。

焼き魚なら、甘くなりやしねえだろう  
ざまーみろい土方ア

しまったアアアアア！と悔しがる土方の前で勝ち誇ったかのように、  
焼き魚を一口で口に放る沖田。

が、その表情も一瞬であった。



・・・なぜ・・・！？

焼き魚までもが、甘い。

その様子を見て土方は危なかった、と胸を撫で下ろす。

まともなのは白米だけだ。

そう思いながらもチラと銀時を見る。

相変わらずこぼしながらも、変わらぬペースで食事を口に運んでいく。

特に嫌な表情も、無理に食べている様子も見られない。

・・・あの野郎、味覚がおかしいのもうなずける。

ガキの頃からこんな甘いモンを食っていたなら、味覚破壊されていても無理はねえ！！

皆が、似たようなことを思いながら銀時をぼーっと見ていると何のことかさっぱり分からない、という調子で神楽が声をかけた。

「オイ新八。

食べないならその魚食べてもいいアルか」

「・・・・・・・・・・どつぞ」

## 9。空腹は最高の調味料（後書き）

・・・今なら小太郎と晋助のやり取りも意味が分かる。

そう思いながら新八は松陽に気を遣い、たまにおかずにも箸を伸ばしていた。

・ 姉上の食事に比べればこんなもの、食べられる食べられる・・・

そう自分に暗示をかけながら。

近藤たちは白米だけに箸を進めていたが、さすがにそれでは場が持たない。

近藤は苦く笑いながら話題を振った。

「・・・そう言えば桂・・・くんと高杉くんしか見ませんが。」

他に生徒はいないのですか？」

そう聞かれると、松陽は箸を止めた。

「今日は日曜日なので本来なら村塾は休みなんです。それでもあの子達は熱心に学びに来ているんです」

そう言っ て笑顔で続けた。

「彼らがどんな侍に成長するのか、今から楽しみで仕方ないですよ」

それを聞いた真撰組の三人と新八は、何も言えなくなってしまうた。

「そう・・・ですな」

近藤がどこか寂しそうにつぶやいたのに、松陽は気が付かなかった

ようだった。

10。一回遊んだだけですぐに仲良くなれるのも小学校3年生くらいまで（前書

短いです。

10。一回遊んだだけですぐに仲良くなれるのも小学校3年生くらいまで

食後、松陽に誘われて道場に行った。

最初は見学をするだけであつたが、次第に近藤たちがうずうずし始めた。

それと言うのも、小太郎たちが皆、その年にしては随分とすばらしい剣さばきをしていたためである。

結局、神樂を残し、男たちは皆竹刀を借りて稽古に参加した。

小太郎は型をしつかり守つた剣、

晋助はやたらと攻める剣、

銀時は型にはまらぬ滅茶苦茶な剣、と彼らの個性がよくうかがえた。

さすがに近藤たちが打ち負かされることはなかったが、それでも時にはとさせられることがあつた。

・・・なるほど、このおかげで今の万事屋<sup>あいつ</sup>があるわけか。



銀時の太刀を受けながら土方は感心していた。

しかし、同時に桂や高杉も同じほどの使い手だと言うことだ。  
さすがに攘夷戦争の生き残りは伊達じゃあねえ。

こいつはやつかいだ、と土方は思った。

奴らとの接近戦は避けた方がいいのかもしれない・・・

そして、ちらと松陽を見る。

やっぱりこの先生、ただもんじゃねえ。

松陽が土方の視線に気付く。

「あ」

「え？」

ボスッ・・・・・・・・

銀時の竹刀が土方の股間にめり込んだ。

「あー・・・ごめんごめん」

「・・・てんめ・・・」

わざと・・・やりやがったな・・・」

汗だけで前屈みになる土方。

「アンタがよそ見してるから悪いんだよ」

「そうであ。

よそ見してる間に急所やられても文句言えるわけねーだろが馬鹿が土方」

「・・・つてめーら・・・あとで覚えてろよ・・・」

申し訳ないと分かりつつも可笑しくて笑う松陽の横で近藤が豪快に笑った。

神楽も新八も、小太郎も晋助も皆が笑った。

剣を交えているうちにいつの間にか、小太郎たちと新八たちとの溝はなくなっていた。

## 11。何事にも終わりと始まりがある（前書き）

新たに登録して下さった方たち、

いつも読んでくださる方たち、

本当にありがとうございます。とても励みになります。

これからひとつの山を迎えますが、共に乗り越えていけたらこんなに嬉しいことはないです。

これからもよろしくお願いします

注意：あとがきまで本編が続きます。

## 11。何事にも終わりと始まりがある

稽古も終わり、汗を流した頃、何かを思い出した松陽は近藤たちに提案をした。

「実は今日、神社で秋のお祭りがあるんです。初めて見るものばかりで面白いと思いますよ。行ってみませんか？」

おそらく近藤たちが知っている祭りと大差はないだろう。しかし彼らは異国から来たという話になっている。

「ほう・・・祭り、ですか・・・  
しかし、我々の格好は目立ちすぎませんか」

「大丈夫ですよ。  
後からになるかもしれませんが、私も一緒に行きます。  
きちんとご紹介すれば問題ありません」

「後から？」  
「ええ、お誘いしておきながら申し訳ないのですが  
今日出さなければならぬ手紙がまだ、書き終わってないのです。  
すぐに終わると思います、待たせてしまうので」

そう言いながら松陽は銀時の肩に手を置いた。

「先に銀時と一緒に行っていてください。」

銀時がぼんやりと松陽を見上げる。

松陽がにこりと微笑んだ。

「私もすぐに後から行くから」

銀時は、まあ別にいいけど、と近藤たちを見た。

しかし、近藤が気にした。

「どうも・・・お忙しい所にすっかりお邪魔してしまって・・・申し訳ない」

「いえいえ、全然そういうことではないんです。やらねばならぬ事を後回しにしていたので。」

せっかくのお祭りです。ぜひご覧になってください」言い出しておきながら申し訳ないと松陽は恥ずかしそうに笑った。

「そうですね・・・ならば、是非」

そう近藤が言うと神楽が喜んだ。

「やったあ、お祭りアル！屋台とか出てるアルか！？」

「ああ、いくつかあるぞ。

金魚すくいとか、飴細工とか、輪投げとか」

小太郎が手拭いで額の汗をふきながら答えた。

「わあっ、楽しみアル！」

その神楽の横でガキだねい、とつぶやいた沖田と神楽が睨み合いになっっていたが、

松陽は気にせず小太郎と晋助に尋ねた。

「小太郎と晋助も祭りに行きますか？」

「はい。この後行くつもりでした」

「そうでしたか。それはちょうどいい。

銀時と近藤さんたちと一緒に祭りに行ってくれませんか？」

はい、と元気よく答える小太郎と少し面倒くさそうな顔をした晋助の頭を撫でた。

「お願いしますね」

そういうわけで、着替えた小太郎たちと新八たちは田んぼ道を歩いていた。

裸足で行くわけにはいかなかったので松陽に草履を借りた。

夏が過ぎ、日は短くなったとは言え、今はまだ3時か4時頃だろうか。

日差しがあつたため神楽は銀時の傘を借りた。

その傘の柄を見ると、きれいな字で「坂田銀時」と書かれていた。

「これ、銀ちゃんが書いたアルか？」

銀ちゃんと呼ばれた少年は、最初誰の事を言っているのか全く分からなかったが、

お前だお前、と神楽に言われてようやく気付いた。



「・・・あ？」

あー・・・そりゃあ先生が書いてくれたんだ」

「へえ、きれいな字ですね」

と新八も傘を見た。

そつだろつ、と小太郎が得意気に話に入ってきた。

「先生はすばらしい先生だ。教えも、剣術も。

博識でありながら、絶えず探究心を持ち、物事を柔軟にとらえる。武士たるもの、あああるべきだ。」

「小太郎くんは随分と先生を尊敬しているんだな」

「でも、あの料理が・・・」

にかつと笑う近藤の横で新八がぼそりと漏らしたのを晋助は聞き逃さなかった。

「うわっ」

「てめー！よそ者のくせに先生の悪口を言っんじゃねえっ！」

「ああすみませんっ！」

自分より幾分も小さい晋助に胸ぐらをつかまれ、新八は焦った。

「いいか、そんな事・・・先生の信頼をおとしめるようなこと人に言っんじゃねーぞ！」

恐ろしい目付きで新八を睨んだ。

「やめんか高杉」

小太郎が割って入った。

「どんなに先生が好きなお前とて、先生の手料理だけは食べられんだろう！味見ができないから一緒に食事支度もできんと言っていたではないか」

「うるせえッラっ！」

先生はな・・・先生はなあ、砂糖と塩を間違えちまっただけなんだ！砂糖の量を間違えちまっただけなんだ！！」

「ッラじゃない桂だっ！」

新八を離れた晋助と小太郎で、髪の毛を掴んだりの取っ組み合いが始まった。

「やめんかお前らっ」

近藤が止めに入るが二人が聞くはずもない。  
結局近藤も巻き込まれていた。

それをいつものこと、と言わんばかりに流していた銀時だったが、ふと神楽を眺めた。

「？」

どうしたアル？なんかワタシの顔に付いてるアルか？」

「異国つてえのは・・・そんな色の髪の毛と目をした奴がたくさんいるのか？」

傘を差している今、頭に被っていた手拭いを外したため、神楽の橙色の髪はあらわになっている。

確かにこの時代、黒でない髪の色、目の色の人間は珍しい。

自分と同じように黒でない人間を見るのは銀時は初めてだったのだ。

しかし、神楽は天人である。

なんと答えるべきか迷っていると土方が助け船を出した。

「まあたくさんはいねえが珍しくもねえな。よくあることだ」

そう言った土方をだるそうな目で見ると、銀時は前を向き「そっか」とつぶやいた。

「そんな髪と目の色の人間もいるのか・・・」

どんな思いで銀時がそう言ったのか、この時の神楽たちは知るよしもなかった。

神社が近づいてきたのだろう。  
次第に人が増えてきた。

人が増えてくると、当然見慣れぬ服を着た近藤たちに注目が集まる。

何人かが自分たちを見ながらコソコソと話しているのを見ると、さすがに居心地が悪い。

「なんでいジロジロ見るとたたっ斬るぞ」

喧嘩を売る沖田を近藤が抑える。

「やめんか総悟！先生に迷惑がかかる」

「見て見て新八！皆ワタシの髪指差してるアル！  
そんなにきれいアルか、可愛いアルか」

「どうすりゃそういう風にとらえられるんだよっ！  
おめーはのんきでいいなあ本当によう！」

皆の注目を浴びてご機嫌な神楽とそれに突っ込む新八。

それを見て、銀時は何か安心したようだった。

ポリポリと頭を掻きながら手を懷にやると、あることに気付いた。

「・・・あ、いけね・・・」

「どうした銀時」

晋助との取っ組み合いで顔に引っ掻き傷を作った小太郎が銀時に尋ねた。

「小銭入れ忘れちゃった。ちょっと取りに行ってくる」

「なんだあ？金なら貸すぞ」

同じく顔に引っ掻き傷のある晋助が答えた。

「マジか？」

あーでもいいや、先生遅いし、様子見に行くついでに」

「そうか」

日が暮れるまでには戻る、と言って銀時は駆けていった。

新八たちはそれを見送った。

太陽が少し低くなっている。

日が沈むまで、あと一時間くらいだろう。

11。何事にも終わりと始まりがある（後書き）

まだ、松陽は書齋にいた。

ちやうど手紙を書き終えたところで、封をしていた。

すると、どこからか

カタ、

と小さな物音がした。

「おや。誰か戻ったのですか？」

しかし、その様子はない。

「違いますね」

松陽の目付きが変わった。





両目でしかとその影をとらえた。

ガキイイイン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

刀と刀がぶつかり合い、大きな火花が散った。

【改】 12。夕陽がきれいなら次の日は晴れ（前書き）

【前書き追加＋本編一部加筆修正】

「白夜叉降誕」をベースに展開しています。

ではどうぞ

【改】 12。夕陽がきれいなら次の日は晴れ

「・・・はぁ・・・はぁ・・・っ」

松陽の口から、乱れた息づかいが聞こえてくる。

右肩を深く斬られたのか。

右腕がだらんと力なく体からぶら下がっている。

足からも血が流れ、ぽたぽたと血が畳の上に落ちる。

松陽は左手に刀を持ち、相手に刃を向けていた。

突然の襲撃者は書斎の縁側の方に立ち、その反対の廊下側に松陽が立っていた。

二人が斬り合うにはその書斎は狭すぎる。

今はなんとか距離を保ってはいるものの、書斎から飛び出して逃げるほどの隙はない。

もしそんな素振りを見せれば、すぐに間合いをつめられて斬られるであろう。

対峙するしか松陽に道は残されていなかった。

松陽の対峙するそれ。

それは、大きな笠を深く被り、マントを羽織っている。  
背丈は2メートル近くあり、大柄だ。

天人なのか地球人なのか。

それすらもわからぬ状態であった。

まあ、それはどちらでもよいこと。

松陽は呼吸を整えている。

問題はどうかってこの局面を乗りきるか、ですね。

しかし、松陽は冷静に状況を判断していた。

相手は松陽の戦闘力を上手く削いでいる。

だが、松陽が相手に与えたダメージはほとんど言っていないほどない。

・・・いずれにせよ、次の一撃が最後・・・でしょうね。

松陽はうつすらと笑みを浮かべた。

それを見た黒い影はにたっ、といやらしく笑った。

次の瞬間、その黒い影は足に力を入れて踏み切った。

一気に間合いがつまる。

「！！」

・・・・・・・・ぎゅ・・・・・・・・  
「・・・・・・・・」

自分に迫り来る、黒い影。

その影の後ろにもうひとつ、小さな影が見えた。

「っらあああああああああ！！！！」

「やめなさいっ銀時っ！！！」

銀時と呼ばれた小さな影は、身の丈に合わぬ長い刀を思い切り降り下ろした。



殺<sup>と</sup>つた

そう思った。

確かに目の前に黒い影をとらえていた。

どんな人間でも避けきれまい。

しかし、降り下ろした刀は鈍い音を立てた。

その切っ先は深く畳に沈んでいる。

「!？」

「銀時、左っ!!」

その声に従い左を向くと、そこには剣をふりかぶる黒い影。

反射的に刀を畳から引き抜き、構え受け止めようとする銀時に

「駄目です、逃げてっ!!」

と松陽が叫んだが遅かった。

ガッン、と銀時は頭の上で剣を受け止めた。  
重かったが、確かに受け止めた。

受け止めたはずだった。

ブシュッ!!!!!!

銀時の左肩から右の脇腹へと斜めに血が噴く。  
受け止めたはずなのに、剣は銀時の体を傷つけた。

「な!？」

斬られた小さな体がよろつ、と崩れる。  
それに止めをさすように、黒い影は剣をひき、新たな一撃をくり出  
そうとした。

しかしこの一瞬の隙を松陽が逃すはずがない。

影が銀時に剣をふりかぶった瞬間、最初の一撃目の時に  
すでに松陽は一步、力強く踏み出していたのだ。

一太刀浴びせるには十分な間合いに入っていた。  
松陽は相手の顔めがけて、横一文字に刀を振った。

「あがあああああ！！！！」

おびたらしい血が顔から流れ出た。

両目か、片目か。

いずれにせよ一時的に目を潰すことに成功したようだ。

がつ、と松陽は銀時を脇に抱えると書斎を飛び出した。

「下ろせよ先生っ！

自分で走る！」

「喋らないで銀時！」

そのまま、ふたつ隣りの寝室へ入ると押し入れを開けて銀時をそこに入れた。

「な・・・なにしてんだよ！

逃げろよ俺なんか置いて逃げろよ！！」

「そんな事できるはずないじゃないですか。

それにね、足を深く切られてるんですよ。そう遠くまで逃げられま

せん」

松陽は戸棚を開けた。何かを探している。

「なら俺も戦う！」

押し入れから出ようとした銀時を力強くぐいと押し返した。  
そして手にしていた三冊の本を銀時に渡した。

「銀時には頼みがあります」

そう言うとは柄の尻で押し入れの天井をどんと突いた。  
突くと、押し入れの天井にはまっていた板は外れた。

「そこから屋根裏をつたって外に出なさい。

そしてこの本を小太郎と晋助に渡してください。

新しい教科書です。きっと喜ぶでしょう」

「な・・・

わけ分かんねえよ！自分で渡せばいいだろっ！！」

そう言った銀時を松陽は黙ってみた。

ゆっくりと左手を伸ばし、優しく銀時の頬に付いていた血をぬぐうと銀色の髪の毛を撫でた。

いつもと同じように、優しく頭を撫でた。

銀時ははっとした。

いつもと何も変わらぬ、穏やかな笑顔がそこにはあった。

銀時の大好きな、優しくて温かい、穏やかな笑顔が。

「すまない銀時

お前たちが大人になるまで見守りたかった」

．．．．．一体．．．何を．．．．．

何を言っているのか．．．わからない．．．

松陽はそんな顔の銀時を残して、ぱたんと押し入れを閉めた。  
閉めると開かないように、鞘でつつかえ棒をした。

真っ暗になり、銀時が我に帰る。戸を両手でどんと叩いた。

「先生！先生！先生！」

嫌だ！一緒に逃げよう！

先生っ！松陽先生えっ！！！！！！」

銀時の悲痛な叫び声が響く。

松陽はうつむいたまま、押し入れの前から動くことができなかった。

しかし、いつまでもそうしてられなかった。

鋭い目付きを外に向ける。

左手に刀を持ち、足を引きずりながら縁側へと出た。

縁側に出ると、そこには角の生えた、鬼のような顔を血で赤く染めた男がこちらを睨んでいた。

その鬼のような男にさっきの余裕は見られない。完全に怒らせたようである。



ぴりぴりとした空気が松陽の傷口に響く。

しかし、柳が風をさらりと流すように、松陽は一切動じていなかった。

そのおかげだろう。

殺気をあらわにする鬼の背中ごしに、夕陽が沈むのを松陽は見た。

オレンジ色に輝く太陽が山の間に沈んでいく。

それは、空を見事に赤く染めていた。

真っ赤に燃え上がる、なんとも美しい夕焼けだった。

この縁側に銀時と座り、何度この光景を見たことであろうか。

やはり、何度見ても美しい。

この夕陽は

この大地は

この世界は

この世界で生きていくということとは

「よかった」

松陽はふふと笑った。

その顔は夕焼けの光を浴びてオレンジ色に染まっている。

「明日もよい天気になりそうですね」

たとえ自分がいなくなっても。



### 13。それはひとつの世界が終わる音（前書き）

ほとんど回想です。

あとがきまで本編続きます。

### 13。それはひとつの世界が終わる音

「屍を食らう鬼が出るときいて来てみれば

・・・君がそう？」

あれはいつの頃だったか。

まだ、少年が一人だった頃。

人の温かさなど知りもしなかった頃。

ふいにぽんと頭に置かれた手。

自分への殺意も憎しみも感じぬ、やさしい手。



「またずいぶんとカワイイ鬼がいたものですね」

その手をぱんと振り払い、鬼と呼ばれた少年はその男と向き合う。  
警戒しながら血で錆びた刀を抜いた。

「刀<sup>それ</sup>も屍からはぎとったんですか」

ふふ、と男は笑う。

「童一人で屍の身ぐるみをはぎ  
そうして自分の身を守ってきたんですか。  
大したもんじゃないですか。」

「けどそんな剣、もういりませんよ」

そう言う男は自分の脇に差してある刀に手をやった。

「他<sup>ひと</sup>人におびえ

自分を守るためだけにふるう剣なんてもう捨てちゃいなさい」

ひょいと男は自分の刀を少年に投げた。  
思いもよらぬ行動に少年はたじろぐ。

「くれてあげますよ、私の剣。

剣そいつの本当の使い方を知りたければ付いてくるといい」

男はくるりと少年に背を向けた。

「これからは剣そいつをふるいなさい」

少年は、投げられた男の刀をぎゅっとつかんだ。

「敵を斬るためではない、

弱き己を斬るために。

己を守るためではない・・・」

いつもの戦場。

死体と死体をつつく鳥と自分しかない、いつもの戦場。

そこに、新たな光が差し込んでいく。

温かく、やさしく、すべてを護るかのように包み込む光が。

「己の

魂を護るために」

その言葉が少年に光を、世界を与えた。

それがすべての始まりだった。





【13。それはひとつの世界が終わる音】

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

なんでこんな時に昔のことなんか思い出すんだ

暗闇の中で、銀時の頭の後ろに

松陽とともに見た景色や松陽の言葉、姿が浮かんでは消えていく。

それを振り払うために、

ここから抜け出すために、

松陽の元へ行くために、

銀時は必死に押し入れのふすまをかきむしった。

しかし、ふすまの裏はつるつるとしていて、とっかかりがない。

破れるどころか、銀時の爪が折れて血がにじむだけであつた。

急に、寸前まで自分が刀を持っていたことを思い出した。

暗闇のなか、慌てて手探りで刀を探す。と、手に冷たいものが触れた。

がつ、と銀時は何の躊躇もせずそれをつかんだ。

刃の部分に小さな手のひらが食い込み、血が流れる。

しかし、銀時はそれに気付かない。

「あああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

がむしゃらに、ただひたすらに目の前の壁をめった刺しにした。







「あれは・・・なに？」

松陽が銀髪の少年を背負いながら、田んぼ道を歩いている。

田んぼに水は引かれていないが、雨上がりのため土は濡れて水溜まりができている。

少年は松陽の背から、畦道で何かをつついている一羽の鳥を指差して尋ねた。

それはくちばしから尾まで真っ黒な鳥であった。

「あれはカラスというんですよ」

松陽は穏やかに答えた。

その背中で少年はカラス、という言葉を小さく繰り返した。

「カラスが好きなんですか？」

じゃあひとつ、カラスの唄を歌ってみましょう」

と、勝手に歌い出す松陽を相手にせず少年はぽつりとつぶやいた。

「カラス……」

……なんで……目も体も真っ黒なのに嫌われるんだろ……」

少年は何度か、村の人が汚い言葉を吐きながらカラスに石を投げるのを見たことがあったのだ。

それはいつも自分がされているのと全く同じ光景であった。

その少年の独り言が聞こえたのか聞こえていないのか、松陽は一人

のんきに歌い続けている。

「かゝわあいゝいゝなあなあつの子がゝ  
．．．．．あ、あるうあああつ！」

「んあつ!？」

何かにつまづいたのか、突然少年を背負ったまま松陽は前のめりに  
転んだ。

そして、ごろごろと田んぼへと転がり落ちていった。

「あいたたたた．．．

すみません！

大丈夫ですか!？」

田んぼに落ち、泥まみれになった松陽が背の少年を振り返る。

いでで、と頭をなでる少年を見て松陽はくすりと笑った。

「ふふ。水溜まりを覗いてごらんなさい」

「．．．．?」

何のことか分からないまま少年は近くの水溜まりを覗いた。  
するとそこには、髪も顔も泥まみれで黒く染まった自分が映っていた。

それを隣で一緒に松陽も覗き込んでいた。

「どうです?」

「どうって……気持ち悪いけど……」

「そうでしょう。」

それはいつもの自分ではないからです。  
本当の自分の色ではないからです。

いつもと違うと気持ち悪いでしょう?  
落ち着かないでしょう?」

「ちげーよ!泥がついて気持ち悪いんだよ!」

「同じことです。」

何かで自分を覆い隠して取り繕って……

それで他人は欺けても、自分自身は欺けません。  
だから本当の姿でない自分自身を気持ち悪く感じるものなんです」

「……は?」

少年には何を言っているのかよく理解できなかった。

屁理屈を言っているようにも聞こえる。

「つまり、私が言いたいのはね」

松陽は懷から手拭いを出し、少年の顔についた泥を拭こうと手を伸ばした。

「人は、それぞれ生まれ持った髪の色や姿が一番美しいのです」

松陽は優しく微笑んだ。

しかし、少年の表情は固いままだ。  
ぷいとそっぽを向き、泥を拭こうとする松陽の手を拒んだ。

「美しい・・・？」

でも俺は・・・

・・・みんなから嫌われてる」

無表情のまま、少年はそう言い放った。  
松陽は寂しい顔をした。

「違います。

皆は恐ろしいですよ。

今まで自分たちが見たことがないから、あなたを恐れているのです」

松陽は今度は少年の髪に触れた。

びくつ、と驚き少年が松陽を見る。

「今度、いろんな人をじっくり見てもらいなさい。

同じ髪の色、同じ目の色、同じ背格好の人など一人もいないと気付くでしょう。

だから、あなたが人と違っててもそれはおかしい事ではないのですよ」

穏やかな笑顔を向けながら松陽が少年の髪についた泥を優しく払う。

「ただ残念なことに、人によつては自分たちと違うことを極度に恐れる人もいます。

そして恐れるあまりに、自分を守ろうと相手を傷つけてしまうのですよ。

だけどそれではいけません。

さっきも言いましたね？

己を守るためだけの弱い人間には、なつてはいけません。

己の魂を護り通す、強い人間になりなさい」

松陽が、少年の顔についた泥を拭く。

少年は今度は拒まなかった。

松陽の顔を真っ直ぐに見つめている。

「大丈夫。

あなたは強い人間になれます。

己を守るだけの弱い人間がどれだけ他人を傷つけるか。  
それをあなたはよく知っているから」

松陽の伝えようとしていることを全て理解するには、少年は幼すぎた。

でも何となく、自分を認めてくれている、ということだけは分かる。

少年は、体のなかが温かくなるのを感じた。  
こんな経験は初めてだった。

その表情を見て、松陽はにっこりと笑った。



「今日の講義は以上で終了です。  
難しい話はまた今度にしましょう」

松陽は少年の頭を優しく撫でた。

すると、松陽は何かを思いついたようである。  
「そうだ、と言って無邪気な笑顔を少年に見せた。」

「『はどうでしょう』」

「・・・え？何が？」

「あなたの名前ですよ。いつまでも名無しの権兵衛じゃ困るでしょう」

「・・・俺の・・・名前・・・」

「そうです。」

あなたの名前です。

美しい銀髪を持つあなたに、ぴったりですよ」



銀時

名を、呼ばれた気がした。

目の前を見れば一筋の光が差し込んでいる。

銀時は刀を離し、その光の差し込む小さな隙間をかきむしった。  
かきむしって穴を広げた。  
その穴から、信じられない光景を見た。

大きな剣が  
松陽の胸を貫いていた。

「先生えええええつ！！！」

鬼がその大きな剣を引き抜く。  
今まで見たことがないほど大量の血が松陽の胸から溢れ出た。

松陽が膝をついた。  
口からも鼻からも血が流れ出ている。

それを鬼は見下ろした。なんと醜い笑みを浮かべながら。なんとも嬉しそうに。

ゆっくりと、鬼は血のついた剣をふりかぶった。

「やめろおおおおおおお………!!」

今まで聞いたことのない

鈍い音が

聞こえた

13。それはひとつの世界が終わる音（後書き）

「なんだア、チャイナ？」

大口叩いて結局あんなのもとれねーのかイ情けねえ」

「うるさいアル、サド！！」

別に欲しいもんがないから狙わなかっただけアル！！」

「ほオ。じゃああの一番奥の藁人形と五寸釘、俺が使うから取ってみな」

「お安いご用アル！見てろよこのサドが」

「つてめ、その藁人形何に使うつもりだよっ！！」

「決まったらア、上司が一人いなくなるようにです」



「総悟つ、てめえの上司は二人しかいねえだろうが!!」

「あれえそうでしたかイ？全然知りやせんでした」

神社の露店、輪投げの前で奇妙な服装の男たちと少女が騒いでいた。その様子を、周りの人間は怪しんで見ていたが当の本人たちは全く気にしていなかった。

「まったく・・・少しは気にしてもらいたいもんだよ・・・」

新八がため息をつきながら振り返った。

「全くどっちが子供か分からないですね。  
そう思いませんか？桂さん、高杉さん？」

そう言っ子子供たちを見るが、子供たちの耳には全く入っていないようである。

二人とも、神社とは逆の、村塾のある方を見ていた。

「そろそろ陽が沈むころだな。直にあの二人も来るだろう」

近藤も声をかけたが子供たちには届かない。

「いま・・・」

晋助が口を開く。

「・・・声が聞こえなかったか」

貴様もか、と小太郎が答えた。

「先生に・・・呼ばれた気がした・・・」

晋助と小太郎は、胸がざわつくのを感じながら陽が沈むを見た。  
太陽が真っ赤に燃え尽きて、地平線へと沈んでいく。

二人の背後には、夜が訪れていた。

#### 14。何にだってつなぎつてもんが必要なんだ

すっかり日も暮れ、あたりが暗くなった神社。

境内に吊るされた紅白のちょうちんが辺りを明るく照らし、祭りの夜を盛り上げていた。

そんな中、焼き鳥屋の屋台で立ち飲みをしている、周囲から明らかに浮いている二人の男がいた。

近藤と土方である。

周りが皆着物姿のなか、彼らが着ている洋装は珍しい。周りが注目するのも当然であった。

しかし、当の本人たちはまったく気にせず、焼き鳥をつまみに軽く飲んでいた。

「もし元の世界に戻ったら、絶対にあの野郎ぶった斬ってやる」

酒が入り、やや顔を赤らめた土方が、おもしろくなさそうにそう吐き捨てた。

それをトシ、と近藤がたしなめる。

「誰にだって、言いたくないことの一つや二つあるだろう」

「そりゃ攘夷志士です、なんて言えるかよ!」

「早計すぎるぞトシ。」

今分かったのは万事屋が桂や高杉と幼馴染みだったということくらいだろうが」

串をくわえながら近藤がのんきにそう言うと、土方は呆れた顔をした。

「アンタは甘すぎらア。野郎は池田屋の事件も桂、高杉派が衝突した事件にも絡んでるんだぜ。」

絶対に何か繋がりがあるに決まってる」

そう言い切って、皿の上の食べ終わった串を見つめる土方に、近藤がため息をつく。

「トシ。お前飲みすぎじゃないのか」

「近藤さん。俺ア別に酔って支離滅裂なことを言ってるつもりはないんだが」

「支離滅裂だとも。」

いつものお前ならもっと慎重にいくだろう。

それがなんだ。

今は桂たちと幼馴染みだったというだけで万事屋を攘夷志士だと完全に決めつけているじゃないか」

「決めつけてなんかない。疑っているだけだ」

そう言うのと、土方はぐいと酒を飲み干した。

それをみて、やれやれ仕方のない奴だ、と近藤が笑う。

「トシ。お前が一番万事屋を信じたいんだろう」

そう言われて、目を丸くする土方。

皿から視線をあげ、ますます呆れた顔で近藤を見た。

「アンタ何言ってるんだ？」

そんなわけねーだろうが！

大義名分のもと、堂々とあの野郎を斬れるんなら、俺は代わりにタバコ止めたっていいくらいだね」

ケツ、と毒づく土方をみて近藤がははは、と豪快に笑った。

すると、突然後ろから声を掛けられた。

「おうおうなんでイ。

いねーと思ったらこんなところでお三方楽しそうですねイ」

振り返ると、沖田と新八、神楽、小太郎とふてくされた顔の晋助が立っていた。

それを見てどうした、と近藤が声をかける。

「なアに、ちび共が先生が遅くて心配だって言うから今から塾の方に帰ろうと思いやしてね。

近藤さんたちはどうしやすか？」

「そうか。じゃあ俺たちも帰るとしよう」

そう言って店の親父に声をかけ、勘定を払うと、どこからか人混みがざわつき始めた。

なんだろう、と不思議に思う新八たち。

と、突然近くの人の会話が鮮明に新八たちの耳に入ってきた。

「おい！火事らしいぜ」

「なに？どこが燃えてるんだ？」

「ハッキリとはわかんねえが、どうも村塾の近くらしい」

「ナニ？先生のところか？」



みな顔が、凍りつく。

晋助と小太郎は目を大きく開けて驚いていた。

と思ったのも一瞬で。

「ま、待てっ！危ないから行くんじゃない！！」

近藤の制止も空しく、二人は、すごい勢いで走り始めていた。

「総悟っ、お前は子供たちを！俺とトシは先に現場に向かう！」

「あいよっ！」

近藤がそう叫ぶと、皆が走り出した。

夜空のなか、村塾の方角の空だけが明るく光っている。

何かの間違いであってほしい

晋助と小太郎は頭から不安をぬぐえずに、ただただひたすら走り続けた。

## 15。人生の分かれ道は突然に（前書き）

あとがきまで本編続きます。

5 / 16 少しだけ加筆修正

## 15. 人生の分かれ道は突然に

ここはかぶき町にある、「万事屋銀ちゃん」

日が落ち、暗くなった部屋の中で、大きな白い毛玉がごそごそと動いていた。

それは定春だった。

神楽がどこにもいない。

それだけでもおかしい事なのに、未だに戻る気配がないのもやはり変である。

さすがの定春も心配になり始めた。

その神楽を探そうと、定春は懸命に神楽の匂いをたどった。

しかし、彼女は部屋から出てどこかへ行ったわけではないのだ。

結局部屋の中をぐるぐる回ってしまうだけで、神楽を見つけることはできないでいた。

なぜだろう、と彼なりに考えた。

いつもこの変な置物の前で匂いが途切れてしまう。

定春は部屋に置かれた、見慣れぬマシンの前に座り込んだ。  
マシンに鼻を近づけ、くんくんと匂いをかいだ。  
わずかに、神楽の匂いが残っている。

あの子はこの中にいるのだろうか。

定春がそう思ったかどうかは分からない。マシン全体をフンフンとかぎ始めた。

そして、ふと前足をマシンにかけた。

と、その時。

！！！！！！ジャジャジャジャーん！！！！！！

偶然、定春の前足がレバーをひいてしまった。

けたたましい音になり、マシンの下から煙が流れ出てくる。

「わうっ！！」

定春はその音と煙に驚き、慌てて万事屋を飛び出していった。

【15。 人生の分かれ道は突然に】

最初に走り出した子供たちを追い抜き、先に火事の現場に到着した近藤と土方はくそっ、と叫んだ。

松陽の村塾が凄まじい勢いの炎を上げながら、燃えている。

それを取り囲むように、20人くらいの大人たちがただぼうつと見ていたり火を消そうと走り回っていたりした。

「誰か！先生と銀髪の少年を見たものはいないか！？」

近藤が大きな声で辺りの野次馬どもに向かって叫ぶ。  
しかし、返事をするものはいなかった。

「おいアンタら！中に人はいるのか！？」

土方が必死に消火活動をしている男たちに尋ねた。  
聞かれた男は土方の服装を見て怪しく疑うような顔をしたが、状況である。

「さっぱり分からねえんだ！  
だが、先生の姿を見たモンもいねえ！もしかするとまだ・・・」

その男が、叫びにも近い声でそう答えた。  
ちくしょう、と言うとすぐに作業に戻っていった。

ちっ、と土方が舌打ちし、土方が炎に向かって走り出そうとした。  
それを待て、と近藤が制する。

「なんだよ近藤さん！！ここまで来て黙ってみていろってのか・・・」

「

いきり立った土方が近藤を振り返る。  
するとそこには、いつの間にか水の入った桶を2つ持った近藤が立っていた。その1つを土方に差し出した。

「ないよりはマシだと思うぞ」

そう言つて、頭からばしゃと水を被る。  
それを見て、ふんと土方が笑った。

土方も同じように水を被ると近藤を見てうなずいた。  
近藤も黙ってうなずく。

二人とも言葉を交わさず、同時に燃え盛る塾の方へと駆け出した。



それを見て、火を消していた男たちが大声で止めようとした。

「おいっ！あんたらやめなあっ！死んじまうっ！」

当然そんなことで彼らが立ち止まるわけがなかった。

「くだらねえ、火が怖くて煙草なんか吸ってられつかよ！」

そのまま、二人は炎の中へと姿を消していった。

燃え上がる村塾の中で、近藤と土方の二人は大声で松陽と銀時の名を呼んだ。  
しかし返事はなく、ごうごうと燃え上がる炎の音ばかりが辺りを包んでいた。

「先生は手紙を書くと言っていた。書斎の方を見てみよう」

近藤がそう叫んだ。土方はそれに賛成し、書斎の方へと走り出した。

学舎まなびやを抜け、松陽の住まいへと繋がる渡り廊下を走っていたとき、ふと土方が前方に倒れ込んでいる影を見つけた。

「近藤さん……あれ……」

そう言うと二人とも急いでそこへ駆けていき、倒れ込んでいるものに声をかけようとした。

かけようとして、思いもよらぬ光景に二人は息を飲んだ。

「これは・・・一体・・・どういう事だ・・・」

土方も近藤も、目の前の光景を信じることができず呆然と立ち尽くしていた。

くっ、と近藤が拳に力を入れ床を叩いた。その近藤の目には涙が浮かんでいた。

「なぜ・・・なぜ・・・先生がこんな目に・・・・・・・・っ」

二人が赤く立ち上る炎の中で見たもの。

それは、真っ赤な血溜まりに横たわる、ひとつの体。

しかし、あるべきところにあるはずの頭、  
それがない、変わり果てた姿。

それを誰と決めつけるのは、難しい。

だが、服装が。姿かたちが。そして所々に切られて落ちている髪の毛が。

それを松陽と指し示しているように見えてならなかった。

どれほど時間がたったのかは分からない。  
二人とも、互いに言葉を交わさず、ただ黙ってその動かぬ体を見ていた。

と、その時。  
がた、とどこからか物音が聞こえた。  
そこで、二人ともはっと我に帰った。

「……そうだ………万事屋の野郎は……」

土方が、物音のした方に目をやる。

横を見れば、開け放たれた障子と、部屋の奥の押し入れとの間を往復したかのような血の跡が見える。

「あれは・・・」

土方が、その血の道筋を追い、押し入れの前に立った。

その押し入れには、刀の鞘でつつかえ棒がしてあり、開かぬようになつていた。

まさか、と土方は思った。

その押し入れのふすまには、わずかに穴が空いていた。

間違いであつてほしい。

つつかえ棒を外した土方は、ふすまを開けようとして手をかけた。その手がどこか震えているのを感じずにはいらなかった。

息を吸って、静かにふすまを開けた。

そこには、目を赤く泣き腫らした銀時が呆然と座り込んでいた。

・・・ちくしょう・・・

土方は、銀時を見てそう心のなかでつぶやいた。

小さな銀時の胸に刻まれた大きな刀傷。

そこから流れ出る真っ赤な血。

何枚か手の爪は剥がれ、赤く染まってる小さな手のひら。

ふすまを開け放った土方を見ても、何の反応も示さぬ紅い瞳。

何が起こったのか、すべてを物語っていた。

そして、この小さな子供が一部始終漏らさず、目にしてしまったということも。

くそ、と心のなかで土方はつぶやいた。

なんで・・・こんな子供だつてえのに・・・こんな目に・・・

土方は必死に歯を食い縛った。

そうしないと、この憐れな子供の姿を見ることができなかった。

燃え盛る村塾の前で、炎の中に飛び込もうとする一人の子供を新八と沖田が掴まえて押し止めていた。

「駄目だつてば！君も火にのまれちゃうよ！！」

「うるせえ離せよこのメガネっ！！」

もし先生が中にいたら・・・てめえ一生許さねえからなっ！！」

新八と沖田に羽交い締めになれながらも、晋助はまだ諦めない。

「アホかデメーは！」



テーマみたいなガキが行ったところで何になる？ここで黙って待ってるって言ってるのが分からねーのかイ！」

その横で、高杉！と小太郎が叫ぶ。

晋助のように炎の中に向かいはいしないものの、小さな拳をぐつと握りしめ、悔しそうな表情をしている。

「そいつらの言う通りだ。貴様に何ができる！？

悔しいが・・・今は先生を信じて火が消えるのを待つしかない！」

「んだとヅラア！！よくもそんな悠長なこと言ってられるな！」

ぎゃあぎゃああと怒鳴り合う横で、神楽も心配そうな目で炎を見ていた。

「・・・銀ちゃん・・・」

「！-！」

その時、皆、炎の中から二人の人影が出てくるのを見た。

「「<sup>ぎんちゃん</sup>銀時！」」

「「近藤さん！土方さん！」」

それは、傷ついた銀時を抱いた土方と近藤だった。

二人が炎から離れ、子供たちの元へと駆け寄る。

その様子を、火消しをしていた大人たちも手を止めてじっと見た。

銀時の姿に、皆ほつと胸を撫で下ろすが

その傷ついた姿と魂の抜けたような姿に、ひとつの不安を感じた。

「銀時！何があった！？先生は！？その持つてる教科書はなんだ！？」

その不安を押さえきれずに、晋助が次から次へと質問を浴びせる。

だが、銀時は全く口を開かない。焦点も合わさずに、ただぼつと宙を見ている。

「馬鹿が高杉！貴様は少し待てんのか」

そう言つて小太郎は銀時の傷を見た。  
とても深い。

しかし、それと口が開けぬのはどうも違うようだ。  
小太郎が辛そうな表情で、土方たちを見上げた。

「・・・・・・・・先生・・・・は・・・・？」

近藤がゆっくりと、首を横に振つた。

「！

・・・・・・・・てめえそれは一体どういう事だ！？  
先生は中にはいなかったのか！？  
それとも・・・・・・・・」

晋助には、その後の言葉を続けることができなかった。  
小太郎が、大きな黒目を近藤たちに向ける。  
嘘だ、と言わんばかりにその瞳は彼らを責め立てていた。

近藤がその視線から逃げずに、ゆつくりと子供たちに伝えた。

「先生は・・・俺たちが見つけた時には・・・すでに・・・息絶えていた・・・」

回りにいた大人たちもその言葉を聞き、ざわめき始める。

その言葉を聞き、銀時の姿を見れば、いくら子供たちでも松陽に何があったのかは容易に想像がついた。  
晋助が目には涙を浮かべながら叫んだ。

「嘘つくんじゃない！先生は強えんだ！先生が負けるわけねえ・・・  
！」  
先生の亡骸なきがらを見るまでは・・・俺は・・・俺は・・・っ！！」

しかし、近藤たちは何も言わずに首を振った。

子供たちに、尊敬する恩師のあんなに無惨な姿を見せることはできない。

そう感じた近藤たちは、村塾を出る前に、松陽の亡骸を布にくるみ一度裏口から出た。そして燃えてしまわぬように安全なところに置いてきたのだ。

後で村の人たちに、きちんと弔ってもらおうよう頼まねばならない。

黙って首を振った近藤を見て、晋助が、ああと泣き崩れた。その横で、小太郎がうつむいて拳を握りしめていた。

「先生は・・・先生は・・・っ！」

確かに攘夷思想だったかもしれない・・・だがそれは、皆が笑って過ごせる国を作りたかったから・・・！

国に齒向かうためなんかじゃ・・・決してなかった・・・  
・・・なのに・・・なのに・・・！！！」

小太郎も、涙をこらえることはできなかった。

ぽろぽろと、大きな涙が瞳からこぼれ出す。

「桂さん・・・」

新八も沖田も、近藤も土方も、かける言葉が見つからなかった。

悔しそうな、苦しそうな表情で黙って二人を見つめていた。

神楽も、目に涙を浮かべて彼らを見た。

「てめえらが・・・」

うずくまっていた晋助が、すさまじい形相で近藤たちを睨み上げた。

「てめえらがやったのか・・・？」

その憎しみのこもった声に、皆が、え、と驚く。

「てめえらが殺つたのかと聞いてるんだ！  
いくらなんでも時期がよすぎらア！！」

「そ、そんな・・・高杉さん、僕たちは・・・」

そう殺気立つ晋助を前に新八たちがたじろいてみると、土方の腕の中で銀時がごとと動いた。

「・・・万事屋・・・その傷だ。動かねえ方が・・・」

そう言う土方を遮るかのように、銀時は下りようとあがいた。そのため、土方は銀時を下ろすしかなかった。

下りた銀時はよろよろと小太郎と晋助に向かい、その抱き抱えていた三冊の教科書を二人に差し出した。

「・・・・・・銀時？」

晋助と小太郎の濡れた目が銀時にしつかりと向けられる。  
反対に、銀時のその目は乾いてしまっていた。

「・・・先生・・・笑ってた・・・」

「・・・何を・・・言っている・・・？」

銀時の言葉が飲み込めずに、晋助と小太郎は戸惑った。  
戸惑いながらも、二人は探るように銀時の顔を覗き込んだ。

「先生・・・最後の最後まで・・・笑ってた・・・」

先生・・・俺たちが大人になるまで・・・見ていたかったって・・・」

どこを見ているのか分からぬ瞳で、銀時はそうつぶやいた。

枯れ果てた涙が、感情までをも洗い流してしまったかのようなのである。  
感情のない声で、ただその事実だけを伝えた。

その銀時に、小太郎も晋助も何も言えなくなる。  
二人はうつむいて声を出すのをこらえた。  
懸命に泣くのをこらえた。

新八も神楽も、近藤も沖田も、土方でさえ目頭が熱くなるのを感じた。

彼らも、目から涙がこぼれそうになるのを感じた。

心が空っぽになった銀時の手から、ぱさ、と教科書が滑り落ちた。

銀時はそれを拾おうともしない。

「・・・・・・・・銀時・・・・・・・・？」

その言葉には答えず、銀時が体の向きを変える。よろよろと、その痛々しい体を引きずって歩き始めた。

「銀さん・・・・・・・・どこへ・・・・・・・・？」

銀時が歩き出すと、人垣を作っていた大人たちが道を開ける。しかし、その銀時を冷たい目で見ながら、何やら口々につぶやき始めた。

「・・・・・・・・鬼っ子だ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・だから俺は先生に言ったんだ・・・・・・・・こんなもん抱え込むと絶対に災いが起こるって・・・・・・・・」

「先生はこいつにだまされたんだ」



「この鬼っ子がア!!!」

突然、石が一つ銀時に投げられた。

当たりはしなかったが、投げられる石が一つ、二つと増えていく。

それを見て、新八たちが驚く。

確かに、銀時の髪と眼の色は珍しい。

だが、今まで銀時が受けてきたであろう仕打ちを  
実際に目の当たりにして、強いショックを受けた。

「やめないか!!!子供相手に何をする!!!」

近藤が叫んだが、誰も耳を貸さなかった。

「てめえらっ!!!何しやがる!!!」

突然、晋助が真っ赤に腫らした目で大人たちを睨んだ。

子供とは思えない形相で睨まれると、石を投げていた輩は黙り込んだ。  
だ。

銀時はそのやりとりが一切聞こえていなかったかのように、ふらふ

らと歩き続け

暗闇のなかに姿を消していった。

「……ッ 銀時！ 待て！！」

小太郎が地面に落ちていた教科書を拾うと、銀時の後を急いで追った。

そのまま小太郎の姿も見えなくなるのを、晋助は黙ってみていた。

ふと、晋助は燃え上がる村塾へと視線を移した。

その瞳には、赤くゆらゆらと動く炎が映っていた。

「高杉さん、危ないっ！！」

突然、炎に包まれた村塾ががらと激しい音を立て  
火の粉を巻き上げながら崩れ落ちていった。

周囲の大人が驚き何歩か後ずさりしたなか、晋助だけは微動だにしなかった。

燃え落ちる村塾の光景を、その小さな瞳にしっかりと焼き付けていた。

## 15. 人生の分かれ道は突然に（後書き）

一通り消火作業が終わり、ほとんどが燃え尽きたあとの村塾。村人は、皆一様に暗い表情でそれぞれ家路についた。

そうして誰もいなくなった焼け跡に、5人の人影があった。

それは新八たちであつた。

気付けば、晋助の姿はなかった。

まだ火が残っているのか、ぷすぷすとそこかしこから煙を上げている様子を皆、道端に座り込んで黙って見ていた。

「ワタシたちがここに来なければ・・・こんなことにはならなかったアルか・・・？」

神楽が、ぽつりとそうつぶやいた。

「・・・馬鹿ぬかすな・・・俺たちが来たのはつい半日前だ。そんな影響力あるはずがねえ」

そう返す土方も心ここに非<sup>あら</sup>ず、といった感じである。

「たぶん・・・以前から幕府には目をつけられていたのだろう・・・だが・・・」

そう言いかけて近藤が口をつぐんだ。

だとしても、あの殺し方は・・・ひどすぎる・・・

近藤は、松陽の亡骸を村のまとめ役に渡した時の、彼らの表情を思い出した。

「にしても・・・ここまでやる幕府ってえのも狂ってやがらあ」

沖田が悔しそうにそうつぶやいた。

新八は、黙ったままだった。  
いろんなことが一度に起き過ぎて、気持ちはどう整理していいのか分からなかった。

村人に鬼っ子と呼ばれ、石を投げられた銀時。  
その銀時を拾い、育てていた松陽。  
そして。

その松陽を奪い去っていった幕府。

銀さんがこんなものを抱えて生きてきたなんて。

何も知らなかった、と新八は悲しく思った。

銀さんは一体、何を思って、何を感じてこの世界を生きているんだろう。

ふと、新八は空を見上げた。

「・・・て・・・あれ？」

そこは真っ暗で、月はおろか星さえも見えなかった。

「あれ・・・？僕・・・疲れているのかな・・・」

そつ目をこすりながら立ち上がる。  
と、足元の感覚がない。

「ええええええええええ！！？」

「メガネどうした・・・ってんあ!？」

「なんでイこれは!？」

「わあああ落ちるアルっ!!」

「嘘おおお!!!!!!?」

真っ暗やみのなか、5人は下へ下へと落ちていった。

15・5。本筋に触れる内容の番外編ってそれもう本編だよね（前書き）

番外編。ヅラ視点。個人的にヅラはお母さんなイメージ。

今までを第一章とするなら次回から第二章でところす。

どうぞ

。



15・5。本筋に触れる内容の番外編ってそれもう本編だよな

夜。

焼け落ちた村塾。

焼け落ちた柱に、銀時はぽつんと座り込んでいた。

その傍らには小太郎が立っている。  
かたわ

銀時の目はうつろで、どこを見ているのかつかみきれない。  
その銀時に、小太郎がぼつりと話しかける。

「・・・ここにいたのか銀時」

嘘だ。本当はわかっていた。銀時が来るのはここしかない。

小太郎の家で静養していた銀時だったが、目を離すとすぐに消えてしまう。

そんな時、村塾の焼け跡に行けば必ずと言っていいほど銀時はそこにいた。

・・・ここには来たくなかった・・・

小太郎は奥歯を噛み締めた。

ここに来ると嫌でも先生のことを思い出してしまふ。

もちろん先生のことは忘れたくない。

だが、いくら想ってもどうにもならないことを想い続けるのも辛い。

・・・ここには・・・来たくない・・・

それでも、小太郎は何度でも銀時を迎えに来た。

そうしないと銀時は二度と戻らない気がした。

銀時までどこかに行ってしまうのではないか、そんな不安が頭から離れなかった。

だから小太郎は何度でもこの焼け跡に迎えに来た。

これ以上、大切な仲間<sup>もの</sup>を失わぬために・・・

「ここは冷える・・・戻ろう。  
体に障<sup>さわ</sup>るぞ。

お主、まだ傷もふさがってないのだろう」

そう言つて小太郎は銀時の手をひいた。

銀時は返事をしない。

それを小太郎はわかつていた。

松陽先生がこの世を去ってから二週間。

あの時以来、銀時は一度も言葉を発していない。

小太郎はもう一度手をひいた。  
銀時は動こうとしない。

その時、小太郎が何かに気付き、手を止めた。  
かすかだが、確かに銀時の口が動いたのだ。

「……………って……………いく……………  
……………」

「え？」

久々に聞いた銀時の声は細く、かすれていた。  
小太郎が思わず聞き返す。

「なんだ銀時……………？  
もう一度……………言ってくれ」

しばらく口ごもった後、銀時は再び言葉にした。

「・・・・・・・・人間って・・・・・・・・死んだら・・・・・・・・どこに行く・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・銀時・・・・・・・・」

久々に銀時の言葉を聞いた小太郎。

本来ならそれでも喜ぶべきことだったが、  
幼い、童のような銀時の言葉を聞いて  
小太郎はどう返事していいのかわからなかった。

「もう・・・先生がここにいないって事は・・・わかる・・・

・・・じゃあ一体・・・どこにいつちまったんだ・・・先生は・・・  
？」

銀時がこちらを向く。

「・・・俺が・・・

俺がここに来なけりゃ・・・

先生は・・・死ななかったのかな・・・

先生は今も・・・

生きて・・・笑って・・・いたかな・・・？」

銀時の目から、一筋の涙がこぼれた。

『鬼っ子だ』

『だから俺は先生に言ったんだ・・・こんなもん抱え込むと絶対に災いが起こるって』

『先生はこいつにだまされたんだ』

『この鬼っ子がア！！！！』



燃え落ちる村塾の前で、村人たちが口々に汚い言葉を  
銀時に浴びせかけた場面が思い出される。

小太郎は自分の目が熱くなるのを感じた。

銀時がここに来たばかりの頃、松陽先生から聞いたことがある。

彼はその容姿のせいで皆から怖れられ、忌み嫌われて一人で生きて  
いたと。

そのため、彼はまわりの人を上手く受け入れることが出来なければ  
まわりに自分が受け入れられることにも慣れていない。

しかし、だからと言って避けてはいけませんよ。

ゆっくりでいいから、少しずつ仲良くなっていきましょう、と。

その銀時がようやく皆に馴染んだという頃に。

やつらはすべてを奪い去っていった。

俺たちにとって尊敬すべき師というだけではない。

銀時にとっては初めて得た、唯一の家族。

銀時にとって、それが先生だった。

やつらはその先生を奪っていった。銀時の目の前で。

なぜ、銀時ばかりがこのような仕打ちを受けねばならん。

なぜ、銀時ばかりがこのような辛い思いをせねばならん。

銀時が悪いのか？

髪の色が人と違うから？

目の色が恐ろしいから？

誰が悪い。

何が悪い。

小太郎は拳を力一杯握りしめた。

そうしないと、涙がこぼれてしまう。

「銀時が悪いわけなからうっ！」

悪いのは幕府だ！

天人の言いなりになっている幕府の連中が悪いのだ！

お前は何も悪くないっ！

だから……

だから……どこにも行くな！

俺はこれ以上・・・  
大切な仲間を・・・っ！  
」

もうだめだ。こらえきれない。  
どうやっても、涙が止まらない。

小太郎は、気取られぬようにとうつむいた。

「・・・ツラ？」

高杉は、あれからほとんど姿を見ない。  
家に行っても全く顔を出さない。

あんなに先生のことを好きだった高杉だ。悲しくて、悔しくて憎くてたまらないに違いない。

しかし、あいつのことだ。そんな姿を俺たちに見せたくないのだから。

奴が俺たちの前に姿を見せてくれるのを待つしかない。

俺とて、悔しくて悲しくて・・・

なぜこんな想いをしてまでも生きねばなんのかと思う。

でも。

俺までいつまでもクヨクヨしては駄目だ。

誰かが支えねば。

誰かが前を向かねば。

小太郎はぐいと涙をぬぐった。  
顔を上げ、赤くなった目で銀時を真っ直ぐ見た。

「人は死ぬと……」

星になると聞いたことがある」

「………星に……？」

「……ああ……」

夜、空に輝いて俺たちを見守ってくれるんだ。

道に迷わぬように……

夜でも照らしてくれるんだ」

「道に迷わぬように……」

なら・・・先生は月、だな・・・  
夜を照らす、大きな大きな月だ」

銀時の暗闇に光をくれたのは松陽先生だ。

「そうだな。先生は月だ」

そう言って小太郎はしまった、と気付いた。

銀時は空を仰いだ。

黙ったままだった。

その晩は新月だった。



## 16. デジャブにご注意ください（前書き）

ここから第二章スタートです。

注意！

あらずじにも書かれておりますように、ここからが

十白夜又十さんの書かれている作品「心の闇の深さとは」に出てきた場面と同じような描写があります。

御本人様からご了承はいただけましたが、なかには不快な想いをする方もいるかもしれません。

予めご注意ください。

## 16. デジャブにご注意ください

どべちよっ！

鈍い音を立てて、新八は地面に叩きつけられた。

雨が降っている。

地面は泥と化していたが、そのおかげで新八は怪我をせずにすんだ。

「いてて・・・」

皆さん、大丈夫ですか・・・？」

手をつき、顔をさすりながら周りを見回すと、皆は上手く着地したようで

立って辺りを見回していた。

「てか、上手く着地できてないの僕だけじゃないですか・・・」

少し恥ずかしくなりながらも立ち上がり、ズレた眼鏡を直す。  
そこでようやく、皆の様子がおかしいことに気付いた。

「ここは・・・」

「さっきとは全く違う場所ですぜい」

「もしかしたら時代が変わったのかも知れねえ」

確かに、そこはさっきまでいた世界とは全く違っていた。

空は厚く重い雲に覆われ、今が何時頃なのかも分からぬほど暗い。  
小雨ではあるが降り続く雨が鬱陶しく体にまとわりついた。

そして

「・・・血生臭いアル・・・」

見渡す限り広い平地のあちこちに寝転ぶ、たくさんの塊。  
それが人の死骸だと分かるのにそう時間はかからなかった。

「ここは・・・・・・戦場・・・？」

新八がつぶやくと、近藤がうなずいた。

「・・・ああ。

人間と天人の死体が混ざっているのを見ると、おそらく攘夷戦争だろう」

地面は彼らの血なのか泥水なのか分からぬほどぬかるんでいた。

死んだばかりなのだろう。

死体の腐った、嫌な臭いはしない。

鉄臭だけが辺りを覆っている。

雨でも臭いを消せぬほどの血の臭い。

それは戦況のすさまじさを物語っていた。

「攘夷戦争・・・」

・・・確か、あの人も参加していたはずだ

新八と神楽は同じことを思い出していた。

こんな戦場を・・・こんな光景の中を、生き残ってきたのか・・・  
あの人は・・・

神楽は松陽からもらった傘を見つめた。  
そこには綺麗な字で『坂田銀時』と書かれている。

「銀ちゃん・・・先生が死んだ後・・・どうしたアルか・・・」

誰も何も言えなかった。

銀時にとって初めて得た、唯一の家族。  
それが一瞬にして、目の前で奪われた。

幕府を、国を、この世界を・・・憎まないはずがない。

「攘夷戦争に参加しても、なんら不思議はねえ」

遠くを見ながらぼつりと土方が言った。  
その言葉に子供たちは反応した。

「マヨラ、お前・・・」

だとしたら・・・もしそうだとしたら銀ちゃんをどうするつもりアル？

斬るつもりアルか！？

銀ちゃんがどんなに辛い想いで生きてきたか知ったのに・・・それでも斬るアルか！？」

「土方さん・・・っ！」

それが仕事なのはわかるけど・・・でも・・・その時は僕たち・・・その時は・・・っ」

土方に食いかかる子供たちを近藤がなだめた。

「落ち着け、新八くん、チャイナ。」

すべてトシの憶測に過ぎない。それにもし攘夷戦争に参加していたとしても、肝心なのは今も活動しているか、という事だ」

その横で土方は冷めた口調で言う。

「それでも危険分子であることには変わりねえ」

「トシ！いい加減にしないか！」

黙っていた沖田も口を開いた。

「土方さん。

もし・・・もしも、ですぜ。

もし、近藤さんが幕府に殺されたとしたら・・・俺も同じことをすると思いますぜイ」

何も言わずに、土方は足元に視線を落とした。

分かってらア・・・そんなことくらい・・・

・・・だが・・・

普段の銀時を知るからこそ、彼が恨みや憎しみなんかで戦争に参加するはずがない。

そう思うし、そう思いたい。

しかし、もし彼がそんな理由で戦争に参加していたら？

もし戦争が終わった今も世界を憎み続けていたら？

その時は斬らねばならぬ。

そして、それは自分の仕事だ。

どんなに皆から恨まれようと。

そうまでして護る国ではないとしても。

真撰組を、近藤を護るために。己の大切なものを護るために。

そのためにも、備えておかねばならない。

皆も。自分自身も

土方は前を向いた。

「だとしても。

もし敵ならば、斬るだけだ」

子供たちの、厳しい視線が土方に向けられている。  
沖田も黙って土方を見ている。  
近藤だけが、心配そうな目で土方を見ていた。

「マヨ・・・お前っ！」

神楽が怒鳴る。

しかし、途中まで怒鳴りかけて神楽が口を閉じた。

「・・・？」

神楽は何か違和感を感じた。  
ふと、ある方向を見つめる。

「・・・・・・？」



皆もつられてそちらに目をやる。  
すると、すぐに何を見ていたのか分かった。

人、である。  
先程まで誰もいなかったはずのところに、人が天を仰いで立っているのである。

はつきりとは見えない。  
その人影は白くぼやけて見えた。

皆、一様に背筋に嫌なものを感じた。

亡霊か、はたまた鬼か・・・

そうこうしている間に、件の亡霊<sup>くたん</sup>も、  
自分と同じように戦場に突っ立っている人影に気付いたようである。  
しばらくこちらを眺めていたが、一步こちらへと踏み出した。

「・・・ここに近づいてくる・・・！」

「あれは・・・戦場に棲むと言われる戦場囃子！」

古の妖怪で、戦場で喧嘩しているものを懲らしめるという伝説の・

「・

「近藤さん、ボケてる場合じゃないと思う。」

おい下手に動くなメガネ、チャイナ。

ゆつくりと俺たちの後ろに下がれ」

「特にチャイナ。てめーはその髪の毛隠してる。」

ここは攘夷戦争の最中だ。天人だとバレると面倒でい」

先程まで言い争っていた相手だが、子供たちは素直にしたがった。

白い亡霊はゆっくりとこちらへ向かってくる。  
土方たちは刀に手をやり、身構えた。

刹那、雲が切れ、光が差し込んだ。  
その光が、白い亡霊の姿を明らかにした。

おびただしい返り血を浴び、赤く染まっている白い装束。

そして赤い銀髪に紅い眼。

「・・・・・・・・銀さん・・・・・・・・？」

新八は目を見開いた。

いつだったか、桂が言ったセリフを思い出していた。

その男、銀色の髪に血を浴び

戦場を駆る姿はまさしく

「・・・しろ・・・やしゃ・・・」

雨音のなか、その言葉だけが宙にただよった。

17。嘘も方便（前書き）

いつも読んでくださる皆様、登録してくださった皆様に感謝です m  
（――） m

これからも頑張ります

。

## 17。嘘も方便

ふと我に帰ると、自分がうずくまっていることに気が付いた。

ああ・・・終わったんだ・・・

息を吐き、手にした刀を支えにしてゆっくり立ち上がると、天を仰いだ。

雨が体にまとわりつく。  
鬱陶しいが、それで己が生きていることを確認する。

と、突然奇妙な事に気が付いた。

自分以外にも人が立っているのである。

・・・とうとう、幻覚まで見え始めたか・・・？

しばらく考えた。

いや、違う。人だ。

そちらへ一歩踏み出した。  
その時、何かが頭をよぎった。



・・・こいつは面倒事かもしれない・・・

そう思いながら一歩ずつ前に進んだ。

【１７。嘘も方便】

その影が近づけば近づくほど、その姿は坂田銀時そのものであるとわかる。

しかし、彼のまとう空気が、気配が、坂田銀時ではなかった。

その眼はいつもの死んだ魚のような目ではない。

鈍く光りながらも、それでいて鋭い目つき。  
その眼を向けられると、喉元に刃を突き付けられているような恐怖に襲われた。

「銀・・・ちゃん・・・？」

それは、子供たちの知る銀時ではない。  
それだけは分かる。

・・・斬られる・・・

心臓が早く打つのを感じながら新八はゆっくりと唾を飲み込んだ。

・・・おかしい。

一方、銀時は霞がかかったような頭をフル回転させていた。

確かに自分は戦い出すと見境がなくなる。

辛うじて仲間を斬らない程度、と言っても過言ではない。

それ故に、敵からも味方からも「白夜叉」などと呼ばれ怖れられている。

その自分が、この5人に気付かずに斬り残すなどあり得るだろうか。

「……てめえら……いつからそこにいた？」

その声は、いくらか冷たく感じた。

誰も返事をしなかった。否、できなかった。

隙もなく、5人全員に神経を向けながら、  
ぎりぎり間合いの手前で銀時は歩みを止めた。

銀時は5人の服装を見て、ますます訳が分からなくなった。  
帯刀はしているものの、どうみても戦をする格好ではない。

司令塔クラスか？との考えも浮かんだが、  
そんなお偉いさんがこんな戦場の真ん中にいるわけがないし、第一  
子供を連れている。  
そんなはずはないだろう。

「てめえら……  
一体……何者だ？」

先程よりは穏やかな言い方だったが、逆にそれが緊張を高めた。  
状況は飲み込めぬが、銀時は平常心を保っている。

つまり、いつでも冷静に、確実に斬りかけることができるということだ。

「・・・俺たちは・・・」

近藤の声が迷っている。

このご時世、旅人だの異国から来ただのと言う嘘は通用すまい。  
この洋装に加え、一人は天人である。

スパイだと疑われ斬られるか、吐くまで拷問されるか。  
そのどちらかだろう。

ならば本当のことを話すか？

未来から来たと。

いや。そんな話、信じるとは到底思えない。

だが、ここで返答を間違えれば間違いなく殺られる。  
そのことを彼はよく分かっていた。

銀時は静かに答えを待っている。

近藤に脂汗が浮かぶ。

土方は近藤を見た。土方の額にも汗が浮かんでいた。

俺に任せてくれ。なんとかやってみる。

土方の眼がそう言っていた。  
その眼を見て近藤がうなづく。

土方は自分の鼓動を感じながら、銀時に向き直った。

「俺たちは・・・使者だ」

思いもよらない答えに銀時は気を緩めたが、それも一瞬だった。

「使者・・・だと？」

土方がゆっくりと、静かに息を吸った。

「そうだ。お前たちの敵の、な。  
お前たちに戦を止めるように・・・言いに来た」

「子供連れでか？」



「・・・ここに来る途中で・・・孤児を拾ったんだ」

よくもまあここまで嘘が口から出てくるもんだ。

背に流れる汗を感じながらも、沖田は心のなかで感心した。

土方の答えに納得したのかどうかはわからない。  
銀時は一人言のようにつぶやいた。

「・・・つまり、降伏を呼び掛けに来たってわけだ・・・」

銀時は近藤と土方を見比べながら言った。

「・・・文書か、何か・・・  
証明できるものはあるのか？」

土方だけでなく、皆が息を飲んだ。  
そんなもの、あるはずがない。

「・・・文書は・・・ない

俺たちは任務で来た訳じゃないんだ・・・」

銀時の表情に疑念が浮かぶ。

土方は、焦らずに続けた。

「・・・俺たちは、自分たちの考えでここに来た。

この戦は・・・・・・・・

・・・・・・・・敗けだ。

この国の・・・侍たちの・・・・・・・・」

苦しそうにそう言った。

この戦は間違いなく負ける。

江戸は、この国は、天人の言いなりになってしまう。

それは変わりようのない未来。 変えることのできない未来。

戦の真っ只中にいる彼に、それを伝えるのは酷なことだった。

この国を護れると信じ、彼らは刀を振るってきた。

そして、その為に大勢の仲間が死んでいった。

その死んでいった仲間の為に、彼らは勝たねばならない。

その彼に、そう言ったのだ。

逆鱗に触れてもおかしくない。

もしかしたら斬られるかもしれない。

正直墓穴を掘った、と土方は思った。

この世界の銀時をよく知らない。

それなのに、奴なら分かってくれるのでは、と過信していた。

とにかく銀時を納得させなければならぬ。

「俺たちは……」

未来を担う若者が、これ以上死に行くのを黙って見てられない。

戦力の違いは明らかだ……お前もわかってるだろ？

何か……別の方法もあるんじゃないか……？

だから……どうか……戦うのを止めてくれねえか……？」

土方はやっとの事でそう言った。

それを聞いた銀時は、と言うと怒るわけでも笑うわけでもなく、黙って5人を見ていた。

口を閉じたまま何も言わなかった。

銀時は、ただ黙ってゆっくりと皆を順番に見つめた。

その鈍く光る眼が何を考えているのか、分かるものは誰もいなかった。

ただ、ひたすら時間が長く感じられた。

その時。

土方たちの後ろで、一瞬、わずかに影が動いたのを銀時は見逃さなかった。

そして、はっとした。

自分は誰と共に闘っていたのか。

いないはずの5人に気をとられ、いるはずのあいつのことを忘れていた。

「・・・高杉っ!!」

そう叫ぶと、銀時はいきなり走り出した。

土方たちは一瞬身構えたが、すぐに銀時に殺気がないことに気付く。

「・・・っ！」

そこを動かすなっ！！」

そう言うと、新八たちの横を走り抜けていった。



18。お母さんは何でもお見通しなんだから無駄な嘘つかないの

「大丈夫か、高杉！」

多くの屍の中に、高杉は倒れ込んでいた。  
近寄って高杉の顔をのぞきこんだ銀時が、はっと息を呑んだ。

おびただしい血が顔の左側を赤く染めていた。  
それは、深くえぐられた左目から流れたものだった。

「高杉っ！」

大声で揺ると、高杉はうつすらと目を開けた。

よかった、生きている。

しかし、傷はあまりにも深い。急がねばならない。

銀時は自分の羽織りの、比較的きれいな部分を裂くと傷を押さえた。  
すると痛みに顔をしかめながらも、高杉がにいつと笑った。

「てめーが・・・そんなに・・・慌てる・・・ってこたあ・・・

ずいぶん・・・酷え・・・みたいだな・・・」

「んなこたあーねえよ？」

この程度の傷、ツバつけときゃ治らあ」

悟られまいといつものように軽口を叩く銀時。

しかし、高杉の返事はない。気を失ったようだ。

銀時はがばっ、と高杉を背負った。

こいつ、本当にチビでよかった。

そんなことを思いながらも

事態は急である。急がねばならない。

銀時は使者と名乗る連中を見た。

胡散臭い連中だが、少なくともスパイではなさそうだと銀時は思った。

もしスパイなら、あんなに苦し紛れな嘘は言わない。

もっと上手くて納得のいく嘘を、嘘だと分かりにくい嘘をつくはずだ。

それに偽造した文書も用意するだろう。

まあ、裏をかいてそこまで計算しつくしたスパイならお手上げだが、そんな感じはしねえ。

銀時は自分の勘に自信があった。

何か理由があって本当の事を言えない、そんな感じだ。

高杉を背負った銀時は新八たちのところまで小走りで戻った。

新八たちは戻ってくる銀時に先程の緊張感がないことに気付き、少し安心した。

それと同時に、何か大変なことがあったのだと気付く。

誰かを背負っている。

怪我人だ。

顔の左側が布で覆われ、ほとんど顔は見えない。

しかし、だからこそそれが誰なのかすぐに分かった。皆が見覚えのある顔だった。

（・・・高杉・・・！）

その顔は、皆がよく知る過激攘夷志士、高杉晋助そのものであった。物騒に見えて仕方がない、テロリスト高杉晋助の顔。

と同時に、胸の中に悲しい感情が生まれるのを誰もが感じた。それがなぜかは、誰も分からなかった。

高杉を見て驚く皆を、銀時は単純に高杉の怪我の深さに驚いたのだと解釈した。

「オイおめーら。  
とりあえず今は急いでいる。遅れないように着いてこい」

その言葉に、子供たちの顔がぱっと明るくなる。真撰組の三人はほっと息をついた。

その様子を見て、銀時は走り出した。



18。お母さんは何でもお見通しなんだから無駄な嘘つかないの（後書き）

少し時間が空くかもしれませんが次回は久々に二話投稿予定。

どうでもいいけど、本編以外であとがき書いたの初かもしれません  
（笑）

ではでは

## 19。しつこい男は嫌われる

新八たちは、ある朽ちかけた寺の講堂の中にいた。

その講堂はろうそくで灯されているだけであり、薄暗い。

それでも、目が慣れてくるにつれ、どんな様子か次第に分かり始めた。

そこには傷ついた兵士が皆、疲れた様子で腰を下ろしている。

そんな中、入ってきた異様な服装の一行に視線が集まったのも、当然なことであった。

静まり返った講堂のなかでは、ひそひそと自分達の事を話しているのがよく聞こえてくる。

（すごい気まずいんですけど・・・）

銀さんはどこに行っちゃったんだろう・・・？）

新八が周囲の視線に気まづくなりながら、苦笑いでつぶやいた。

銀時は新八たちを講堂に連れてくると、どこかへ行ってしまったのだ。

さあな、と周囲を見ながら土方がうわの空で答えた。

敵の真ん中に連れてこられたが、こいつらに襲われる心配はなさそうだ

そんなことを考えていた。

その時、ずっと一人の青年が講堂の中に入ってきて、新八たちの近



くへと寄ってきた。

「銀時が連れてきた使者というのは貴殿らのことか」

「「「!」」」

「てめーは・・・」

それは桂だった。  
胴こそ着けていないものの、戦装束で脇に刀を差し、長い髪を肩のあたりで縛っている姿は、彼らのよく知る、攘夷志士、桂小太郎そのものであった。

「ヅラ！」

お前もちよつと見ない間にでかくなつたアルな！」

神楽にヅラと呼ばれ、しかも親戚のおばちゃんのようなセリフを吐かれ、怪訝そうな顔をする桂。

その横で新八が慌てている。

「今何と言った？」

といふかなぜそのあだ名を・・・

・・・といふか貴殿は・・・」

神楽の顔を見た桂は何かに気付いたようだった。

しかし、それを言いかけた桂のもとへ一人の男が駆け寄って来たため、それは中断された。

耳打ちされ、桂が何かの報告を受けている。

「そうか・・・

・・・命があっただけ良かったと思わねば・・・」

ご苦労だった、と言うと桂はその男を返した。

そのまま、桂は腕を組むと少し黙り込んだ。

何かを考え込んでいる様子である。

その男が立ち去るのと入れ替えに、銀時がふらと講堂に入ってきた。

銀時は5つの茶碗を乗せた盆を持っていた。

先ほどの白装束ではなく、今は着流しを着ている。  
新八たちの近くに立つ桂を見て、銀時があ、という顔をする。

「ッラあ、ここにいたのか。探したじゃねーか」

「ッラじゃない桂だ！

ったく、それはこっちのセリフだ」

着替えたためか、戦場で感じた雰囲気は一切まどっていなかった。  
若いものの、今の銀時は新八たちのよく知る銀時と大して変わらなく見える。

でも、なにかが違う。

これは・・・この銀さんは・・・

新八は銀時の微妙な違いを感じていた。  
感じてはいたが、それ以上考えたくなかった。  
自分を誤魔化すために、意識をそらした。

「それ・・・なんですか？」

「ん？飯だよ。別に毒は入ってねーぞ」

そう言うと銀時は盆を下ろし、乗せていた茶碗を配り始めた。  
皆に配り終わると、銀時は着流しの前の合わせを直した。  
そこから、体に巻かれた白い包帯がちらと見える。

「悪いね、こんなもんしかないんだ。  
まあ口に入るだけありがたいと思ってくれ」

それは粟と芋しか入っていない雑炊であつた。  
銀時から渡された欠けた茶碗を手に、新八は躊躇っていた。

おそらく今は攘夷戦争の末期。  
物資も食糧も底を突こうとしている時であろう。

その貴重な食事を、突然現れた自分たちがもらってもよいのだろうか。

そう悩んでいると元気よく神楽が口を開いた。

「ありがとな。でもワタシお腹空いてないアル！」

そう言った神楽に驚く新八。しかし、にこと笑う神楽に新八も決心が固まる。

「僕もです。用意してくれたのにすみません・・・」

真撰組の3人も口を開く。

「気持ちだけで十分でさあ、旦那」

「気を遣ってもらってすまない。我々には構わず、皆で分けてくれ」

「・・・」

皆で遠慮する様子に銀時はキョトンとしたが、ふっと笑った。

「遠慮すんなよ。食えるときに食っとけ。」

確かに食糧も減ってきてるが、それ以上に食う人間も減ってるんだ。みんな死んじまってな。

皮肉な話だろ」

それを聞き、誰も何も言えなくなってしまった。

その場の空気に、さすがに不謹慎すぎたか、と銀時が気まずそうにポリポリと頭を掻いた。

「まあ、んなこたああんたらが一番よく知ってるんだな。その話をしに来たんだもんな」

そう言うのとよっこいせ、と言って銀時は立ち上がった。その横で桂が何かを考えながら銀時を見ていた。

しばらく口を閉じて考えたあと、ちらと新八たちを見ると、また銀時に視線を戻した。

「銀時。ちょっと来てくれ」

「んー」

だるそうに返事をした銀時を横目で見ると、桂は新八たちに向き直った。

「貴殿らは・・・しばらくここで待っていてくれ。  
あとで別の部屋に案内しよう」

桂が丁寧にそう言うと、あ、ああと近藤が答える。

銀時は、んじやと新八たちに言うと、桂と共に講堂を出ていった。

「・・・結局、あの後3人で共に戦争に参加することになったってわけか・・・」

講堂から二人が出て行ったのを見送ると、ヒビの入った茶碗を覗きながら近藤が寂しそうにつぶやいた。

「まあ・・・当然の成りゆきだろうな・・・」

そのうち二人は今でも戦い続けている、厄介な攘夷志士ってわけだ」

うつむいた土方がそう言った。

沖田が真面目な顔をして後を続けた。

「しかも一人は超過激なテロリストと来てらあ。

幼馴染と対立しちまうくらいの、な」

「ったく、子供の頃から変わらないのはあ的那天くらいアルな」

雑炊をすすりながら神楽がけろりと言った。  
皆が顔を見合わせた。

「確かにな」

近藤がにかつと笑った。

それにつられて、皆も顔をほころばせる。

だが、土方だけは表情を変えなかった。

「……何も変わってないだア？

とんでもねえ、あの野郎……」

そう言う土方は銀時が出て行った戸口を見た。

「血の臭いしかしねーじゃねえか」

そう言われて新八はびくつとした。

この世界の銀さんの何か違う感じ。

そう、それはにおいだった。

あのやる気無くさせる甘ったるいにおいではなく、

鉄が錆びたような血の臭い。死の臭い。

今の銀時はそれをまもっていた。

それを新八は分かっていた。しかし、なぜかそれを認めたくない自分がいた。



銀時が攘夷戦争に参加していたことはもちろん知っていた。そこで銀時が何と呼ばれていたかも知っていた。

『白夜叉』という呼び名が何を指すのか。それも分かっているつもりだった。

だが。

戦争とはいえ、銀さんが多く命を奪ってきたという事実。

戦争の経験もなく、現在の平和な生活しか知らない新八は、その事実を受け止めきれずにいたのだ。

新八が苦しそうな顔をする横で、土方は淡々と話を続けた。

「以前から馬鹿みてえに強い奴だとは思っていたが…まさか攘夷戦争の英雄だったとはな。

今まで気付かなかった方がどうかしてたぜ」

英雄、という言葉に近藤が引つかかる。

「トシ、一体何の話だ？」

「噂で耳にしたことはあったんだ。

攘夷戦争の末期、狂乱の貴公子・桂と鬼兵隊率いる高杉に並び、敵からも味方からも恐れられた武神『白夜叉』てのがいたって話だ」

「白夜叉？」

白夜叉、という言葉が土方の口から出てきたことで、新八の心拍数は跳ね上がった。

とうとう土方に、真撰組に、白夜叉の正体がばれてしまう。

「…確かに旦那は白髪頭だし、白装束でしたがねィ…  
いくらなんでもそれで決めつけるのは早すぎやしませんか」

面白くなさそうに沖田が反論した。

土方はもちろんだ、という風にうなずく。

「当然確かめなきゃならねえ。  
ただ、今は万事屋と攘夷志士である桂、高杉につながりがあることが分かっただけでも大収穫だ」

土方の目が鋭く光る。

子供たちの顔が暗くなった。

近藤も煮え切らない顔をしている。

「ホント土方さんは空気読めねー人だなア。  
どっだけ仕事してますアピールしたいんでイ」

「てめえが仕事しなさすぎなんだよっ！！」

沖田の頭をひっぱたいた後で土方は真剣な表情に戻る。

「そもそも万事屋での、攘夷活動をする上で都合がいい。仕事だと言ってあちこち嗅ぎまわれるわけだからな」

「なっ・・・銀さんがそんなことするわけじゃないじゃないですか!」

新八がそう噛みつくが土方は冷静なままである。

「そうは言うが、あの野郎は現にこうして攘夷戦争に参加してるんだ。

少しでも可能性があるなら、探るのは当然だ」

土方は、冷たくそう言つと真つ直ぐに近藤を見た。

「親しい奴だから斬れねえってんじゃあ真撰組おれたちの名折れだろうが。ええ?近藤さんよ」

そう言われた近藤は、腕を組んだまうつむいて何も答えなかった。気に食わなさそうに沖田は土方を見ていた。

新八も、すっきりしない顔をしていた。

土方さんの言っていることは間違っていない。

新八にもそれはわかる。

でも、やはり納得がいかない。

土方さんは、何か間違っている。

どうしても、新八はその気持ちをぬぐえないでいた。

「あの天パが攘夷とか国のためとか、そんな難しいこと考えるはずないアル」

新八の考えていることが伝わったのか、横に座っていた神楽が土方を見てはつきりとそう言った。

それを聞いた近藤が顔を上げ、口を開いた。

「こんなことを言うと、またトシには叱られるかもしれないが・・・俺もそんな気がしてならない」

そう言うと土方をまっすぐ見返した。

しばらく土方は黙って近藤を見ていたが、やれやれ、とつぶやくと片膝について立ち上がった。

「トシ、どこへ行く」

「…ちよつと風に当たつてくらア」

そう言つと懷から煙草を出し、口にくわえながら講堂を出て行つた。

それを見送つた新八がはあ、と小さくため息をついた。

「すまん、新八くん、チャイナ。

トシだつて万事屋を本気で斬ろうと思つてゐるわけじゃないんだ。  
むしろ信じたいからこそ、徹底的に洗おうとしているんだよ。  
だから・・・許してやってくれ」

近藤が子供たちにそう言つた。

大丈夫です、と新八も笑顔を作りながら答える。

「分かつてます。それが土方さんの…あなたたち真撰組の仕事ですもんね」

嫌味でもなく、場を明るくしようと彼なりに努めてそう言つたが、  
近藤も沖田も返事はできなかった。  
どうしても、変な空氣が流れてしまう。

いい加減、この重苦しい空氣が嫌になつてきた新八は、無理に明るい  
声で話題を変えた。

「そう言えば銀さんと桂さん、どこに行つたんでしょね。

あとで別の部屋に案内するって言ってたけど…僕たち怪しまれてないんですかね？」

最悪斬られちゃったりして、アハハと新八が無理矢理笑う。

その横で、近藤と沖田が互いにちらと目を合わせた。

## 20。立ち止まれば人は振り返りたくなるもの

とある和室で、桂と銀時、そして数名の若者が地図を囲み、なにやら話をしていた。

と言っても、銀時は柱に背を預けた姿勢でかろうじて寝ていないものの、  
懐手<sup>ふしゅで</sup>で、何ともだるそうな目を向けながらその話を聞いていた。

「おそらく、連中は今までの流れから、こちらを攻めようとしている」

「なら桂さん、我々はこう兵を配置すべきではないですか」

「馬鹿者。残った戦力を考えろ」

そんなやりとりを、桂と何人かの若者がしていた。

それを、隣の和室から覗き見る男が一人、あった。

・・・この若さで指揮官か・・・それだけ優秀なのか、はたまた、  
それだけ人不足なのか・・・

ふすまの隙間から見えるその光景を、そう冷静に分析しているのは  
土方であった。

いずれにせよ、この時から頭角を現し始めてたってわけだ。

そんなことを思っていた時だった。

(・・・!!)

ふと、土方は背後に気配を感じた。

見つかっただか！？

ばっ、と腰の刀に手をやり、土方が後ろを振り向こうとする。

すると、それよりも早く、首元に冷たいものが当たるのを感じた。

(!!)



耳元で、声がした。

（なるほど、こうやってこそそこそかぎ回るわけだな。  
さすがはゴキブリ並のしぶとさを持つ野郎だ）

（・・・・・・）

その聞き覚えのある声に、土方はゆっくりと振り返った。

（・・・・てんめ・・・・）

すると、そこにいたのは、土方の首元に刃をあて、してやったりと言わんばかりの顔をした沖田と近藤だった。

少し切れながらも、土方がほっと息をついた。  
それを見て、沖田が意地の悪い笑みを浮かべる。

（さすがは真撰組きつてのヘタレだ。期待を裏切らね お人だなア）

（こんな時に悪ふざけしてる場合じゃねーだろ！  
つかアンタもナニ一緒になってふざけてんだ！）

（トシ、どんな時もユーモアは必要だぞ）

（場をわきまえるオオオオ！！！）

（土方さん、騒ぐと本当に見つかりやすから静かにして下せえ）

（・・・ためーら後で覚えてろよ・・・）

（へいへい、分かりやしたから）

さんざん馬鹿にした沖田が土方の横に並ぶ。沖田も近藤も、隙間から向こうの部屋を覗き見た。

すると、作戦会議はもう終わったようで、皆部屋を出ていこうとしているところであつた。

皆と同じように、部屋を出ようと桂の横を通りすぎる銀時を、桂が呼び止める。

なんだよ、と面倒くさそうに振り返る銀時を、桂はきつく見返した。

「とぼけるな銀時。

なんの話か分かっているだろう」

「今の会議の話か？

なんだよ寝てなかつたろーが」

「馬鹿か。そんなことを言っているのではない」

そう言つと、桂は銀時を座るように促した。  
皆が去つた後の障子を閉めると、銀時は桂の前へと戻り、やれやれと腰を下ろした。

「何？飯当番の話？」

相変わらずとぼける銀時を無視し、桂はきつい口調で切り出した。

「貴様は一体何を考えている！？  
あんな身元も分からぬ怪しい連中をこんなところまで連れてきおつて！」

銀時は、やっぱりその話か、と言わんばかりにだるそうな顔で耳をほじくつた。

「もう連れてきちまつたもんは仕方ねーじゃん」

全く反省する様子のない態度に、桂はため息をついた。

「おまけに、天人なんぞ連れてきおつて」

「天人？」

ああ、あのゴリラっぽいの？あれやっぱり天人なんだ」

ふすまの向こうで近藤がヒドイ、とつぶやくが当然誰も相手にしない。

「違うわっ！お前は一体何を見てるんだ！

あの橙色の髪に青い瞳の少女がいただろう。

あれは、夜兎だ」

その桂のセリフに、近藤たちがびくつとする。

やはりバレていたか・・・

・・・こいつは面倒だ・・・

互いにそんなことを思っていると、後ろから突然声がした。

（やっぱりアルな。あのツラの人を見る目付き、嫌らしかったアル）

（（（！！？）））

三人が驚いて振り向くと、そこには神楽と新八がいた。

（おめーら、なんでここに！？）

（トイレを探しに来たらここにたどり着いたアル。お前らなんかシヨンベン臭いアル）

（神楽ちゃん！仮にもヒロインなんだからそういうこと・・・！）

（んだとてめー！今すぐぶった切って連中に差し出してやらァ！！）

喧嘩が始まりそうになるが、部屋の向こうから聞こえてくる会話のため、それは中断された。

「夜兎・・・だァ？」

「ああ。宇宙最凶最悪の戦闘傭兵部族、夜兎だ。そんなのを連れている連中が和平のための使者だなんて話、誰が信じられる」

（・・・）

その桂の発言は、もつともであった。しかし、それを聞いた神楽が、どこことなく苦い顔で下を向いた。

（神樂ちゃん・・・）

新八には、かける言葉が見つからなかった。

（ま・・・本当のことアル・・・）

神樂が笑いながらそうつぶやくと、銀時の声が聞こえてきた。

「もしあのチビがその夜兎だとしてもだ。

あのチビが最凶最悪かどうかは分からんだろ」

指についた耳かすをふっ、と吹き飛ばしながら銀時はそう言った。

（銀ちゃん・・・）

子供たちの顔がどこか明るいものへと変わる。

しかし、桂は当然納得できない様子である。

「全く貴様は本当に緊張感のない奴だ・・・  
もし連中が密偵ならどう責任をとる!？」

「そんな時や斬ればいい。  
それだけの話だろ」

銀時はそうあっさりと言いつつ、  
それを聞いて、桂は腕を組んだ。

「全く・・・お前の考えることはよく分からん」

そう言った後、少しの間沈黙が流れた。

銀時がぽりぽりと頭を掻いた後、いつもの面倒くさそうな顔で桂を見た。

「おめーもそろそろ分かってんだろ。  
ここいらが潮時だったこと」

「・・・？」

「一体なんの話だ？」

「戦いくさだよ」

そう切り出した銀時に、新八たちも驚く。  
しかし、誰よりも驚いたのは、銀時と向かい合っていた桂であろう。  
銀時の、そのいつものだるそうな瞳の中に、真剣な想いが隠れているようにも見えた。

そのせいか、つい誰もが聞き入ってしまう。

「仲間は減る一方、中には逃げ出す連中もいる始末……

坂本は地上での戦に見切りをつけて宇宙にいつちまった……」

銀時がふと、うつむいた。

「あの高杉ですら、片目を失う大怪我を負った……  
少し前なら、あいつがあんな怪我、負うなんて考えられなかった。

……それだけ俺たちも、相当消耗してきてるってことだ。

もう……ここいらが限界だろーよ」

「銀時……貴様、連中に丸め込まれたか」

「そんなんじゃねーよ」

そう言うと、銀時は顔を上げた。

「もう分かってるだろ。

こんなやり方、先生も喜ばねえって事くらいよオ」



銀時は、桂を見据えてはつきりと、静かにそう言った。  
力強くもなく、感情的でもなく。

ただ静かにそう言った。

そう淡々と言つてのけたその銀時を、桂は憎らしげな目付きで睨んだ。

新八も神楽も近藤も、沖田も、土方ですら、

銀時が自分の感情を押し殺して、そう言ったのだと分かった。

当然、それを桂が分からぬはずはなかった。

だが、分かつてはいるが、こらえることができなかった。

彼には彼の、苦しみがあった。

「ならば・・・他に・・・どのような道があったと・・・？」

桂が、声を絞り出すかのように、苦しく銀時に尋ねた。

いや、その目は確かに銀時を責めていた。

桂も心のどこかでは感じていた。

この国のために、今、自分がしていること。

それを先生が見たらなんというか。

少しでもそう疑問に感じてしまえば、そこで立ち止まってしまえば、それ以上前に進めなくなるような気がしていた。

だから、桂は無意識のうちに考えないようにしていた。

しかし、今、それを銀時にはつきりと口にされてしまった。

桂には、そんな銀時が恨めしく思えた。

一方、ならば他にどんな道が、と聞かれた銀時は、いつものやる気のない目で桂を見ていた。  
そして、ただゆっくりと首をふった。

「俺にやあ難しいことは分からねえ・・・」

ただ・・・

いつまでもこんなことを続けても、無駄に仲間死なせるだけだ。  
それだけは分かる」

そう答えた銀時の眼は、昔からよく知るものと、何一つ変わって  
いなかった。

桂が目を伏せた。

「・・・貴様は・・・卑怯だな・・・」

答えを出さない銀時に、桂はそう言った。  
しかし、その口調はどことなく優しく、うつすらと、笑っているよ  
うでもあった。

桂はそれ以上何も言わなかった。  
ただ黙って銀時を見ていた。  
その表情は、もはや呆れたものでも責め立てるものでもなかった。  
ただただ、黙って銀時を見ていた。

その沈黙を、新八たちも黙って聞いていた。

と、突然背後に気配を感じた。

（誰ですか、まったくもう・・・これ以上ネタを被せても、もう読者は・・・）

そう言って振り返った新八は、思わず悲鳴をあげそうになった。

向かい合う銀時と桂の間に流れる沈黙の時間。

その静寂は、突然乱暴に開かれたふすまによって、いとも簡単に壊された。

「ん？」

銀時と桂が、開かれたふすまの方を見た。

「オイオイてめーら・・・」

腑抜けるのも大概にしるよ・・・」

いやらしい笑みを含み、歪んだ口元から、嘲るような言葉がこぼれる。

「こんな連中がふすま一枚向こうで聞き耳立ててるってえのに気付かねーとは・・・」

ずいぶん情けなくなつたもんだな、アア？」

そう荒々しく言い放つたのは、左目を包帯で覆つた高杉であつた。

その彼の右手にある刀。

それは、覗き見をしていた新八たちに、しっかりと向けられていた。

## 21. ならば立ち止まらぬのも一つの方法（前書き）

あとがきまで本編続きます

## 21。ならば立ち止まらぬのも一つの方法

高杉の登場により、その場の空気がギラついたものへと変わっていた。

銀時が振り向く。

陣羽織を羽織った、いつもと同じ姿の高杉。

違うのは、痛々しく左目を覆う包帯だけである。

その高杉が血糊で曇った刀を土方に向けていた。

新八たちを守るように真撰組の三人が子供たちの前で構えており、土方が先頭で高杉と対峙している。

土方は腰の刀に手をやろうとしていた。

その光景を銀時は動じずに見た。

その目は新八たちの知る目に近い。  
なんともやる気のない目を高杉に向けた銀時が、あーと言いながら頭をかいた。

「・・・まだ寝てなよ高杉くん。  
夜更かしは体に毒だよ。  
そんなだからいつまでたっても背が伸びないんだよ」

真面目くさった顔で桂も口を挟む。

「うむ。」

傷は深い。背は低い。  
寝ておれ高杉」

どう見ても危険な状況であるにも関わらず、  
普段の日常となんら変わりない、とでもいう風に高杉を茶化す銀時  
と桂。

それに対し、高杉が見事に食いついた。

「てめーらうるせえんだよ毎回毎回・・・  
いい加減にしねえとたたつ切るぞこの電波に腐れ天パが」

「電波じゃない桂だつ」

「悪かったよ冗談だつてばよ低杉くん」

「そうか、気付かなくて悪かった。  
切ってほしかつたんだな、てめえは。」



わかった介錯してやるから首出せ。とつと出せ」

「高杉、お前に圧倒的に足らんのはカルシウムだ。もつと牛乳を飲め。小魚も食え」

「そつだぞ高杉。俺を見習え俺を」

その場が、笑っていいのか悪いのか分からない空気へと変わっていった。

あの殺気だった高杉をここまで茶化することができるのは、今も昔もきつとこの二人だけだろう。

しかし、その空気も長くは続かない。

「黙れ」

高杉によって、また空気が緊迫したものへと戻る。

「こんな身元も分からねえ連中ここに連れ込みやがって。馬鹿かてめーら」

「連れ込んだのはこいつだ」

そう言つて桂が銀時を指差す。

高杉が銀時を見た。

「気に食わねえ。」

しかも俺のいねえところでコソコソ話しやがって。

戦を止める？

ふざけるのも大概にしろ」

高杉は桂と銀時を交互に見た。

「俺たちは自分の意志でこの戦に参加した。違つか。俺もお前もツラも、あの坂本ですらだ。」

あのアホですら自分の意志で戦に参加して、自分の意志でこの戦場を去っていた。

それを俺たちは止めなかった。そうだろうが。

それを今更・・・

随分と腑抜けたもんだな、ああ？」

高杉の目に狂気が宿る。

近藤と土方は唾を呑み込んだ。

「俺は止めねえ。

たとえ片目を失おうとも首だけになろうとも。  
退くくらいなら俺あ死を選ぶ」

銀時の目に、一瞬哀しい色が浮かんた。

高杉の左目を覆う包帯が、赤くにじんではいる。

この時、新八は何かが分かった気がした。

ああ、そういうことだったんだ・・・

高杉を最初に見た時に感じた、悲しい感情。

それがどこから来たのか、ようやく分かった気がした。

生意気ではあったが、師を尊敬してやまない、純真無垢な一人の少年。

その少年から、世界は一瞬で師を奪い去った。

そのことで彼がどんなに世界を恨み、憎んだのか。

そして師のいない世界をどのように歩むか、決意したその悲しみ。

その悲しみを、高杉の傷ついた左目のなかに見たのだ、と。

「・・・・・・・・高杉さん・・・」

小さく新八がつぶやいた。

しかし、それは高杉の耳には入らなかった。

ふと、銀時と向かい合って座っていた桂がすっ、と立ち上がる。

「俺とて同じこと。」

この国を救うまでは立ち止まらんと決めた」

銀時は振り向かず、それを聞いた。

銀時は座ったまま、高杉を見ている。

「てめーはどうすんだ銀時。  
去るのか、残るのか」

銀時は口を閉じたままだ。  
それを見た高杉がククと笑った。

「答えが出せねえってのか？  
情けねえ野郎だ」

高杉が右目でチラと土方を見る。

「白夜叉ともあるもんが・・・  
こいつらに惑わされたか？」

白夜叉という言葉に皆が反応する。

だが、呼ばれた本人は相変わらず緊張感のない目を向けている。  
しかし、どこか寂しそうにぽつりとその言葉を繰り返した。

「白夜叉、ねえ・・・」

そのつぶやきが耳に入ったのか入っていないのか。

一呼吸おいたあと、すっ、と高杉が小さく息を吸い込んだ。  
それを銀時は見逃さなかった。

#### 次の瞬間

びゅっ、と高杉が大きく刀をふりかぶった。

くそっ！！

対峙している土方も素早く刀を抜く。しかし、一寸遅れた。

「トシ！……！！！」

皆がはつと息を呑んだ。

ガツツ！！！！

鈍い音が響いた。

「　　っ！！！」

土方が刀を振るよりも早く振り下ろされた高杉の刀。

それを刀の鞘で受け止めていたのは、なんと銀時であった。  
と同時に、刀を抜きかけた土方の右腕を左手で掴んでいる。

このやろっ、いつの間に・・・

寸前まで座っていた銀時がいつの間にか高杉と自分の間にいる。  
しかも、銀時が止めなければ間違いなく自分は斬られていた。

土方にとって、こんなに屈辱的なことはなかった。



さらに、その土方の腕を掴む力は強く、ぴくりとも動かないのだ。  
土方はどうすることもできない。

「銀ちゃん！」

皆が息を吐いた。

一方、予想していたとでもいう風に高杉がにやりと笑う。

「そいつらを守るか」

きつい口調で、しかし、どこか寂しそうにそう言った。

「ちげーよ」

銀時が急に真剣な目つきで答えた。

「俺の守るもんはただひとつ。  
てめーの武士道<sup>ルル</sup>。  
それだけだ」

そう言った銀時を高杉は黙って見ていた。  
しかし、それも少しの間だった。

ふん、と鼻で答えると高杉は刀を引き、かちんと鞘に納めた。

「好きにしろ。」

ただし、そいつらが何と言おうと戦は止めねえ。止めてえ奴は勝手に止めりゃあいい。  
それだけのことだ。

だが銀時。

そいつらが何かした時アその責任、お前にとつてもらうからな」

そう冷たく吐き捨てると、くるりと向きを変えて、高杉は部屋を出ていった。

それを見て、皆がはあと息を吐き出した。

「・・・ったく・・・」

銀時もだるそうにため息をつく

「ほらよ」

そう言つて、銀時は刀を桂に放った。

「む？」

そこで初めて、桂は自分の刀がないことに気付いた。  
ぱし、と桂が刀を受け取る。

「万事屋、てめえ・・・」

土方たちも改めて銀時のスピードに驚く。

「まったく、言いながら刀を脇に差し直す桂。しかし、その表情はどこか暗い。」

何かを言おうとして、桂は顔を上げ銀時を見た。

「・・・お前は・・・」

「ん？」

すると、さっきの真剣な表情はどこへやら。銀時はいつものとぼけた顔を桂に向けた。

それを見ると、桂は何も言えなくなった。

「・・・いや、なんでもない。」

「・・・とゆーか銀時貴様、どんな時でも帯刀くらいしておかなか！  
全く、緊張感のない奴だ」

それだけ言うと、桂も歩き出した。

「俺は見張りに行く。」

お前は・・・時間まで少し休め」

「はいはい」

桂が出ていき、その部屋には銀時と5人が残された。

## 21。ならば立ち止まらぬのも一つの方法（後書き）

桂が出ていくのを見送ったあと、銀時はその5人をだるそうに見た。

「つーわけだわ。

まあ・・・とんだ無駄足だったな、あんたらも」

「銀ちゃん、血が」

「・・・え？」

銀時の胸からちらりと見えていた包帯に、うつすらと血がにじんでいた。

銀ちゃんと呼ばれた銀時は、少し驚いたようだったが自分の傷を見てすぐに何でもない、という風に答えた。

「あ、あー・・・。よくあることだ。  
　　つたく傷が塞がる暇もねえ」

そうばやく銀時に近藤が申し訳なさそうな顔をした。

「すまねえな、よろず・・・いや・・・坂田さん。

アンタが受け止めてくれなきゃトシは・・・斬られていた。礼を言う」

「なアに。ああ見えてアイツも本気じゃなかったからな。本気だったら多分俺ごと斬られてただらうよ」

銀時は頭を掻きながらそう言つと、  
近藤の言葉に面白くなさそうな顔をしている土方の顔をしげしげと眺めた。

「あんだよ、人の顔ジロジロ見やがつて。  
んなにおもしれーか俺の顔は」

キレ気味の土方を完全に無視し、銀時が返す。

「・・・アンタ・・・」

もしかして従兄弟かなにかに多串くんって奴いる？」

「また多串かよ！！他にネタねーのかよお前はよ！！」

「え？多串くんのこと知ってる？」

飼ってた金魚を田んぼに逃がして村の皆から怒られたあの多串くん」

「オイイイイ！！！！！」

多串の野郎、でかくなりすぎた金魚手に負えなくなって捨てやがったよ！！！！！」

「オイオイお前最悪アルな」

「まアアンタはそーゆーお人ですよね。

最近じゃア金魚だけでなく人の姉貴も捨てやしたからね」

「え、そうなの？」

多串くん、それは酷いよ」

「多串じゃねえつつつの！！！」

つかてめーらもナニこいつの話に乗っかってんだよ！！！！！」

結局、銀時そっちのけで土方と沖田がいつもの小競り合いを始めた。

先ほどの緊張感が嘘のようにギアアギアと騒ぎ出すその土方たちを見て、

銀時はふと何かを思い出したようであった。



・・・てゆーか・・・アレ？

急に頭に浮かんだその疑問。銀時はそれを口にした。

「てゆーか俺・・・あんたらに自己紹介したっけ？」

その急な言葉に、子供たちがどきつとする。

すでに子供たちは何度も何度も銀時の名を呼んでしまっていた。

「あ・・・いや・・・そのう・・・」

それを誤魔化そうと、フォローの達人土方が口を出す。

「そりゃあお前さんたちの名を知っていて当然だろ。」

今、攘夷志士の桂、高杉、そして白夜叉を知らん奴はいない」

土方の口から『白夜叉』の名が出てきたことで、子供たちはなぜかいい気分がしなかった。

だが、今、話をややこしくするのは得策ではない。さすがの子供たちも黙っていた。

「そりゃアそうなんだが・・・本名まで知られているとは思わなかったな」

銀時がのんびりそう言った。

めんどくせえ奴だ、と土方の額に青筋が浮き上がったところに、近藤が豪快に笑いながら話に入る。

「そう言えば、こんなに世話になったのに自己紹介もまだだったな。失礼した！」

この若いのと、頭が切れるこの男は俺の部下で、沖田と土方と言う」

そう話を振られ、沖田も自己紹介を始める。

「俺ア沖田総悟。

俺の目標は、いちいち癪にさわるこの男の頭をぶった斬ることです。どーかよろしく、旦那」

「てめ・・・いい加減にしろよ・・・」

なんのことです？と言わんばかりの顔の沖田を土方が睨む横で、近藤が気にせず続けた。

「そして俺は近藤だ。よろしくな」

「え？猩猩？<sup>ウマウマ</sup>ああ、ゴリラのことが」

「だから近藤だっつーの！！  
なんでアンタそんなに俺をゴリラにしたがるの！？俺の顔一体どんな風に見えているの！！？」

「旦那、猩猩はオランウータンのことです。ゴリラは大猩猩です」

「総悟オオオ！？訂正するとこ丸々間違ってるからアアア！！！」

「あ、そーなの？物知りだねえ、えつと君・・・総一郎君だっけ？」

「旦那、総悟です。」

なんでアンタはこんな簡単な名前も覚えられね んですかい？総悟  
って名前の男に恨みでもあるんですかい」

「あ、ごめんごめん総五郎君」

「アンタねイ・・・」

いつもの、グダグダな雰囲気になっていく。

子供たちにとって、それが何よりも嬉しいことであった。

「銀ちゃん、ワタシは神楽アル！よろしくな」

「銀さん、僕は新八です」

子供たちがそう言って自分に笑顔を向けるのを見て、銀時は胸のなかに妙な感情が湧きあがるのを感じた。

どこか懐かしいような。それでいて落ち着くような。それを何と呼ぶのかは分からない。ただ、嫌なものではない。

「おめーら・・・」

そう言いかけて、銀時は口をつぐんだ。

馬鹿げている、そう思った。

『どこかで会ったことがあるか？』

そんな問いかけ、笑われるのがオチだろう。

ふ、と誰も気付かぬくらい小さく笑うと、銀時はくるりと体の向きを変え、新八たちに背を向け歩き出した。

「あんまウロウロしないこつた。そうすりゃ誰も寝首は搔こつたア  
思わねえから。」

今日はここでゆっくり休んでくれ。

それでもって明日の朝早くにでもここを発ってくれとありがてえ」

その言葉に、真面目な顔をした近藤が返す。

「それではお前が斬られるぞっ！」

銀時は振り返りもせず、とたとたと歩いていく。

「ここを去らなきゃ斬られるのはあんたらだ。」

あんたらは国側の人間だろ？しかもお偉い立場の。

何もこんなところで死ぬこたあねえよ」

「銀さんっ！」

「銀ちゃん、嫌アル！ワタシ行かないからナ！」

子供たちが叫んだが、銀時は最後まで聞かずに手をひらひらと振って部屋を出ていった。

## 22. 立ち止まってからまた前に進むのも一つの方法

夜も更け、鬱陶しく続いていた雨は止んだものの、辺りはまだ残る湿気のせいで、すっきりとした気分にはならない。

そんな空気のなか、一つの荒れ果てた古寺の門に背を預け、気持ち良さそうに寝ている一人の武士がいた。

銀時である。

白い戦装束に身を包み、刀を抱えたまま無防備にすやすやと寝ている。

銀時のその白く曲がりくねった髪は、湿度のせいでいつもにも増して好き勝手な方へと跳ねては遊び、まるで本人の気質を表しているようであった。

彼は見張りのつもりなのか。

もしそうならば、何も意味をなしていないのは一目瞭然であった。その銀時に、顔の半分に包帯を巻き、陣羽織を羽織った目つきのきつい、小柄な男が近づいてくる。

高杉であった。

門のところで寝ている役立たずな見張りの前まで来ると、その厳しい目つきで銀時の白い癖っ毛を見下ろした。

「おい天パ」

そう言いながら、持っていた刀で頭を小突くが、全く本人は目を覚まそうとしない。

ハ、と高杉が息を吐く。

「オメーはそうやってまた逃げるのか。

あの時みてえに。村塾が燃え崩れていったあの時みてえに・・・  
いろんなものから目エ逸らして生きていくのか」

そう吐き捨てると、高杉は門を背に、一歩、歩き出した。

「高杉」

その背中に、声がかかる。

「確かに、俺は・・・

あの時、耐えきれずにすべてから目を背けて逃げた・・・

だが、もう逃げねえ。そう決めてここまでやってきた」

高杉が体を半分だけ、銀時の方へと向ける。

そこには、刀を高杉の方へと掲げ、しっかりと立つ銀時がいた。  
それを見て、高杉は口の端をにいと上げた。



「ついさっきまで、戦を止めようと話を持ちかけていた奴が一体何を言うのやら」

そう、蔑むように高杉は冷たく言い放った。しかし、銀時は動じない。いつもの彼らしい、死んだような魚の目でまっすぐに高杉を見ている。

銀時は落ち着いた口調で問い返した。

「なら、てめエは死ぬまで戦を続けて、英雄にでもなりてえのか？ 死んで人々の語り種くさぐさにでもなりてえのか？

違うだろ。

オメーがしたいのはそんな事じゃねえだろ」

「・・・分かってねえな」

「あ？」

「さっきも言っただろう、銀時。

俺ア別に、目的を達成できるならどんな目にあっても・・・

・・・例え、刺し違えて死んじまってもいいと思ってる」

そう言った高杉の声は、先程とは違い、とても穏やかであった。

「……」

「……銀時よオ」

「……あ？」

「俺たちの見ている方向は……歩んでる道は……あの時から……あの時から皆、違っちまったんだ。」

「だからよ……」

高杉がふと銀時に背を向ける。

「……もう、俺たちを護ろうだなんて思っな」

「！」

俺ア別に……！」

「これから先、戦場いくさばにいても……ますますオメーが苦しい思いをするだけだ。」

「……もう、十分だろ……銀時」

「あ？何が十分だつて？」

その銀時の問いかけに、高杉が口を閉ざす。

「おい、高杉！」

銀時の呼びかけから逃げるように、高杉は振り返らず歩いていく。  
銀時はその後を追わず、暗闇の中に姿が見えなくなるまで、黙って高杉の後姿を見ていた。

「・・・相変わらず、ワケわかんね 奴」

そう、ぽつりと吐きだすと、銀時はまた腰を下ろした。  
腰を下ろしてから、しばらく地面を眺めて、何かを考えていた。

「・・・相変わらず、素直じゃね 奴・・・」

小さくそうつぶやくと、再びその背を門に預け、また眠りに就こうと瞼を閉じた。

瞼を閉じたが、眠る事は出来なさそうであつた。

「・・・オイ、てめーら。

うるちよろすんなって言つたろーが！」

銀時が、門を見上げた。  
すると、門の屋根に乗り、そこからひよこ顔を出した神楽と新八が見えた。

「ったくよー。なんかあつたら俺が責任取らされるんだっつーの！  
少しはわきまえなさいってんだ」

「すみません、銀さん」

「ゴメン、銀ちゃん」

そう言いながらも、全く悪びれてない様子の子供たちが、ひょいと銀時の前に下りてきた。

「覗き見盗み聞きが趣味なのか、てめーらは？将来家政婦にでもなりてーのかてめーらは！」

そうまくし立てる銀時を相手にせず、銀時の両脇に子供たちが腰を下ろす。

「おい無視かー。なんなんだ近頃の子供は。少しも大人の話を聞く気がないのな！」

そう呆れてばやく銀時に、新八が微笑む。

「アンタ・・・本当に何も変わらないですね」

「あ？何ワケわかんないこと言ってるんだ？」

「あ、いやこつちの話です」

そう言った新八を、銀時は胡散臭そうな目で見た。

「お前ら・・・連中とどういう関係だ？」

「え？」

「あのゴリラたちだよ」

「あの、だから・・・その、戦で親をなくしてさ迷ってたところを拾ってもらって・・・」

「嘘だろ」

新八から空へと視線を移した銀時が、はっきりとそう言い放った。

「な・・・なんで嘘だと思うんですか？」

「なんつーか・・・おめーら5人は昔っからの知り合いみてーに見

える」

その言葉に新八がドキツとした。  
その横で神樂が口を尖らせる。

「ふざけんなヨ。あんな連中と知り合いだなんて吐き気がするアル」

「・・・そーかあ？」

「そうアル。あんなのとはいくら酔こんぶもらっても付き合いしないアル」

「なんで酔こんぶなんだよ!!」

「あ、でも銀ちゃんとならつるんでやってもいいアル」

「なんで上からなんだよ何様なんだよテメーはよ!!」

「お前友達いなさそうアル」

「あ、それ言えてますね」

「メガネてめーまで何言つてやがんだ!俺にだって友達くらい・・・  
・・・アレ?俺友達いたっけ?  
つてんなこたアーどうでもいい!

だいたい俺ア孤児<sup>ガキ</sup>養えるほど金なんかねえんだよ。  
たかるなら高杉とかにしる。アイツボンボンだから。いい生活でき

るぞーきつと」

「アホか。銀ちゃんとじゃなきゃダメアル。

そうネ、この戦が終わったたら銀ちゃんとワタシで何でも屋をやるヨロシ。

ワタシいいヒロインになるアル」

「なんで僕いないんだよ！」

「おーい待てえガキどもオ。

なんで会って間もない奴と組んで店開かなきゃあならねーんだ。ありえねーだろが」

「銀ちゃん、こーゆーのはファーストインポテーションね。理由じゃないアル、ノリと勢いが大事アル」

「神楽ちゃん、ファーストインプレッションね。それじゃあノリも勢いもないからね」

「大丈夫ネ。銀ちゃんとワタシがいれば大抵のことはなんとでもなるアル！」

「だから僕も入れろおお！！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ神楽と新八に挟まれながら、銀時は星一つ見えない空を眺めた。

この戦が終わったらか。

神楽がさらつと言つてのけた言葉が、銀時の心に引つ掛かった。

この闘いが終わることなど、果たしてあり得るのだろうか。

闘いが終わり・・・

陽だまりの中で互いに笑い合つて過ごせる、

あの昔のような日々が来ることなど・・・あり得るのだろうか。

銀時は黙つて、厚い雲に覆われた空を眺めた。

そう願うには、互いの向いている方向が今では違いすぎた。

銀時は虚ろな目で空を眺めている。

いつまで経つても、星はおろか月さえも覗かなそうな夜である。

「ジメジメした夜は、気分まで湿っていけねーや」

そう言つと銀時はゆっくりと瞼を閉じた。



### 23. 大切なものはゴールよりスタート地点にあつたりするもんだ

ここは、昔、村塾があつた跡地。

あれから何年経つたのか。

今ではあの焼け落ちた柱などは片つけられ、辛うじて焼け崩れなかつた門だけが寂しく残っていた。

その門をくぐると、小さく質素な庵いおじがひとつ、ぽつんと結ばれていた。

その庵の窓を開け、縁に腰かけている一人の銀髪の青年がいた。

まだあどけなさが残るその青年は、一本の刀を抱えながらぼんやりと外を見ている。

すると、二人の青年が門をくぐって入ってくるのが目に入った。それを見て、ああ、と青年はぼんやり思う。

そうだ・・・あいつら・・・今日は・・・

その青年には、遠くからでもその二人が誰なのか、はっきりと分かつた。

他にこの庵に近づくものはいないからだ。

長い髪を高く結んだ青年と、小柄だがきつい目付きの青年。

その二人が、落ち着いた物腰で、こちらに近づいてくる。  
それを見て、銀髪の青年はゆっくりとまぶたを閉じた。

あの日から・・・

青年は想いを巡らせていた。

あの日から、俺たちは別々の道を歩き始めた・・・

一人は国のため、

一人は亡き恩師のため、

そしてもう一人は・・・

そこでいつも考えが止まってしまう。

本当に、これでいいんだろうか・・・

俺はまた、同じ過ちを繰り返すのではないだろうか・・・

青年は恐れていた。

また敗けることを。また失うことを。

その時、馴染みのある声が聞こえてきた。

「おい起きんか銀時」

「てめえ、俺たちの晴々しい日でもものんきに昼寝か？  
つたく緊張感の欠片もねえやつだ」

銀時と呼ばれた青年の前で、二人がそう毒づく。  
面倒くさそうに、銀時がその目を開いた。

「・・・なんだ、てめーら。いつもよりすました格好しやがって。  
お見合いでもすんのかア？」

そう言つて、二人の格好を見た。  
確かに、二人とも、紋付き袴である。

「誰が見合いなんぞするか馬鹿者！」

「ヅラは人妻がいいんだもんなア？」

「ヅラじゃない桂だ！」

「と言つか人妻好きの何が悪い！？」

「不倫は文化だとも言いたいのかてめーはよオ！」

「フン、高杉、貴様こそ見合いがよろう。  
座ったままでな。立つとバレるからな」

「何がバレんだよアア!？」

銀時そっちのけで、高杉と桂が胸ぐらを掴んでのにらみ合いを始める。

呆れた顔の銀時が二人に声をかけた。

「ねえ君たち何しに来たの？俺の昼寝の邪魔？  
それなら帰ってくれない？」

俺の読み終わったジャンプあげるから、ね？」

誰がそんなもんいるか！と桂と高杉が同時に突っ込んだ。

二人とも掴んでいた手を離し、襟元を正す。  
そして、桂が真面目な表情で銀時を見つめた。

「今日、我々もとうとう元服した」

「ようやく、一人の大人ってエ認められたわけだ」

そう言うと、二人とも誇らしげに、脇に差してあった己の刀に手を置いた。

「あーそうなの。おめでとう。  
んで何？ご祝儀ねだりに来たの？何もないよ」

違うわっ、と桂が食いつく。

「ようやく我々も、攘夷戦争に参加できる日が来た」

そう言うと、桂が脇に差しであった刀を鞘ごと抜き、それを掲げた。  
高杉もにやりと笑う。

「あの日から・・・この時をどんだけ待ちわびたことか」

同じように、高杉も鞘ごと刀を脇から抜くと、桂の掲げた刀に自分の刀を重ねた。

「ようやく立ち上がるときが来た」

二人が、銀時を見た。

その瞳は、決して揺るがぬ意志を映し出していた。

一方、銀時は相変わらずだるそうな目で、ぼんやりとつつ向いていた。

「銀時。お前はどつする」

銀時は瞳を閉じた。

考える必要なんかねえ・・・

答えは、最初からここにある

すっ、と目を開けると銀時は顔を上げた。  
二人とも、答えを待っている。

銀時は桂と高杉をしつかりと見つめた。  
そして、にたっ、と嫌らしく笑った。

「派手なケンカになりそーだな」

そう言い、窓の縁から下りると、銀時は二人の前に立った。  
いつの間にか、銀時の背丈は二人のそれを追い越していた。

銀時が、抱えていた刀の柄をしつかりと握り直す。

三本目の刀が、重ねられた。

【23。大切なものはゴールよりスタート地点にあつたりするものだ】

「・・・きつ、おい、銀時・・・っ」

まだ夜も明けきらぬ早朝。

辺りはまだ薄暗く、どこか夜の気配が残っている。  
相変わらず空は厚い雲で覆われており、いつ降り出しても不思議ではない天気であった。

そんななか、誰かが、古寺の門に寄りかかって寝ている銀時の体をさすっている。

随分乱暴にさすっているが、銀時は一向に目を醒ます気配がない。  
とうとうしびれを切らし、気持ち良さそうに寝ている銀時の胸ぐらを掴み、耳元で思いつきり叫んだ。

「いい加減起きんかこの天パ!!」

さすがに参ったのか、銀時がかすかに目を開ける。

「・・・んあツラかア?どうしたそんなに大声出して・・・  
そんなにご祝儀ほしけりや俺にも何か寄越せってんだ・・・」

「ツラじゃない桂だ!  
貴様見張りの癖に何しつかり寝とるんだ!しかも一体なんの夢を見とるんだ!」

「成人式ではしゃぎすぎた高杉が逮捕された夢」

「余計にワケわからんわっ!」

はあ、と桂はため息をついてから、厳しい目付きで銀時の両脇に視



線を移した。

つられて銀時も自分の両脇を見る。

するとそこには、自分と同じように門に寄りかかりながら、静かに寝息を立てて眠る新八と神楽がいた。

「・・・どういうことだ、これは」

桂が怒ったような眼を銀時に向けた。

銀時はあくびをしながら頭をぱりぱりと掻いた。

「どういうことって・・・昨日ここで駄弁<sup>だべ</sup>っているうちに寝ちゃっただけだけど・・・」

ナニお前・・・一体ナニ変な想像してんの？

ナニこの話をR18指定にしようとしてんの!?

俺がこんなガキに手を出すロリコンだとも思ってたんの?!?」

「誰がそんな下世話な話をしておるっ！目を覚まさんかこのアホ天パ!！」

お約束のように突っ込みを入れた桂が厳しい口調で続ける。

「貴様のことだからってつきり逃がすかと思ったのに・・・なぜまだここにいます？」

ここは戦場だぞ?こんな子供、置くわけにはいかん」

「いやー、俺もそう言ったはずなんだけどさー」。

言葉が伝わらなかったみたい」

そう言うと、銀時は大きな伸びをした。

寄りかかったまま寝ていたため、当然体はあちこち痛く、疲れもとれるはずもない。

しかし、もうすっかり慣れていた。

「高杉は？」

「あの怪我だ。少なくとも今日は行かせられん」

「あいつが大人しく留守番するようなタマかよ」

「心配いらん。

ゆうべ薬を盛っておいた。昼までぐっすり寝とるだろう」

「ひでー奴」

ケケケと笑うと、銀時は立ち上がるため腰を浮かせた。

すると、寝ていた子供たちが銀時の方へと寄りかかってきた。

まるで、行かせまいとしているようであった。

「すごい懐きようだな」

その光景を見て、桂が驚いたようにそう言う。

銀時も呆氣にとられた顔をしていたが、照れを隠すように小さく笑うと

子供たちの頭を優しく支えながら上手く二人の間から抜け出した。子供たちは目を覚まさず、相変わらずすーすー寝ている。

「・・・彼らはどうする？」

「んなもん、置いてくに決まってるだろうが」

銀時が子供たちに背を向け歩き始める。

「戦場なんざ・・・ガキの行くところじゃねーよ」

それを、何とも言えない気持ちで桂は聞いた。

おそらく。

俺たちのなかで一番戦場が嫌いなのは銀時こいつだろう。

しかし、一番戦場が似合うのもまた、白夜こいつ叉であった。

桂は、自分の横を通りすぎる銀時を見た。

その表情はいつもとなんら変わりはなく、桂はそれに安心を覚える。

「そうか」

それだけつばやくと、桂も銀時に並んで歩き出した。

寺の外にはすでに兵士たちが待機していた。

皆、ところどころに包帯を巻いている。

傷を負っていない者など一人もいなかった。

しかし、桂と銀時を見るその目に宿る光は、決して曇ってはいなかった。

己の信念を貫こうとしている、強い意志がそこには確かに見て取れた。

そんな彼らを見て、銀時がふんと鼻を鳴らした。

「今日はずいぶん少ねえな。大丈夫かア？」

「鬼兵隊を動かす訳にはいかんからな。いつもの半分、といったところだ。」

まあ此度の襲撃こたひ、地の利はこちらにある。これで足りるだろう。

とゆうか貴様、昨日会議で話しただろーが！全く聞いてなかったな！？」

「聞いてたつつうの。」

あー、アレだろ。プランD2だろ」

違っわっ、全く聞いとらんじゃないか貴様は・・・

いつものように掛け合いをする二人の声が、遠ざかっていく。

子供たちは、それに気付くことができなかった。

## 24。髪は長い友だち

「あーあ、すっかり寝ちまつてるよ、ガキどもが」

そうつぶやきながら、新八と神楽の寝顔を覗き込んだのは、土方たちであった。

「ずっと万事屋のそばにいるゝとかなんとか言っておきながら結局置いてけぼりか。  
まったく情けねーな」

「土方さん。

その言葉、そっくりそのまま俺たちにも返ってくるんでやめてくたせえ」

「いやあゝ桂の奴め。朝の一番風呂を勧めてくれるなんて、なんていい奴だと思つたら、  
俺たちを置いてくためだったとは・・・してやられたな！  
敵ながらあっぱれ！わははははっ！！」

「近藤さん・・・

文面じゃあ分からないからって裸のままではやめてくれ」

「気持ちよくてな、つい！」

【24。髪は長い友だち】

「つまり、僕たちは置いていかれたってわけですね・・・」

服を着た近藤に起こされた新八は、悔しそうにそう言った。  
横と一緒に寝ていた自分が、まったく気付かなかったことが情けなかったのである。

「もともと戦闘員として認識されていたわけではないからな・・・置いていかれても無理はない」

横にいた土方が冷静にそう言った。

近藤がうんうんとうなずきながら後を続ける。

「それにあの万事屋のことだ。

たとえ頼んだところで、子供を戦場に連れて行きはしないだろう」

「まア・・・あの旦那のことだからきつとそうでしょうねイ」

「そんなの・・・ちつとも嬉しくないです・・・」

「・・・あの腐れ天パア！子供だと思って馬鹿にしゃがって・・・帰ってきたら絶対許さないアル！！」

そう吠える神楽を新八がなだめていると、寺の中から何やらざわめきが聞こえてきた。

「なんだろう？何かあったのかな？」

不思議に思った新八たちは、その騒ぎの方へと駆けつけた。

境内に、何やら人だかりができてい<sup>けいだい</sup>る。



よくよく見れば、その騒ぎの真ん中に、木刀を片手に持っている男がいた。

それを、何人かの男が取りおさえているところであった。

最初は喧嘩のように見えたが、次第に、どこかへ行こうとしているその男を周りが引き止めているところだとわかった。

「ちくしょう、あいつら……ふざけやがって……!!」

「高杉さん、駄目ですっ!」

「桂さんも坂田さんも、高杉さんのその怪我を心配して……!」

そう、桂と銀時に置いてきぼりを食らった、高杉である。

その顔の左側を覆う包帯は、新しい傷からの出血のせいで赤黒く汚れていた。

それでも高杉は戦場に行くことを、

銀時たちのあとを追うことをあきらめず、その人だから抜け出そうとしている。

しかし、その足取りは覚束なく、ふらふらとどこか頼りないものであった。

その頼りない自分の足を強く叩くと、高杉はくそつと汚い言葉を吐いた。

「野郎、睡眠薬でも盛りやがったな・・・」

おかしいと思ったんだ・・・ヅラの野郎が酒を勧めてくるなんて・・・」

昨晚、痛みを誤魔化そうと部屋で煙草を吸っていたところへ桂が酒を持ってきたのである。

痛みを誤魔化すにはこれが一番いい、という桂の言葉に疑問を感じながらも、それに甘えてしまったのだ。

その結果、見事に置いていかれたわけである。

高杉にとって、二人に情けをかけられたこと、そして、桂にまんまと嵌め<sup>は</sup>められたことが何よりも許せなかった。

「桂と銀時の首をとるのが先だな・・・」

頭に血を昇らせながらも、静かに怒っている高杉を周りの浪士たちが恐る恐るなだめている。

その光景を、新八たちは遠巻きで見ていた。

「銀さんと桂さん・・・高杉さんのことも置いていったんですね・・・」

新八がしんみりとそうつぶやいた。

「昨日喧嘩したから起こさなかっただけじゃねーのか？」

味気なくそう言った土方を、皆が冷めた目で見た。

「な・・・なんだよ・・・」

「土方さん、アンタ友達いたことないでしょう？可哀想に・・・俺でよければ友達になってあげやしょうか？」

沖田が憐れむような目で土方を見ながら、肩に手をぽんと置いた。

「なっ・・・なんだよ急に！」

それとこれとなんの関係があるんだよっ！」

「トシ・・・さすがの俺でも今のはフォローできんわ・・・すまん・・・」

近藤が目頭を押さえながら、土方の肩に手をぽんと置いた。

「なんだよそれ！？俺アアンタにフォローされなきゃいけないほど不味いこと言ったか！？」

「あーあ、可哀想な男アル。銀ちゃんたちの友情が分かんないとはもうお前は一生マヨネーズ相棒にして生きていくヨロシ」

「うつせーんだよてめーら！

いくらガキの頃からの知り合いだからっていつまでも仲が良いとは限らねーもんなんだよ！

いつまでも友情が続くと思うのはガキだけなんだよ！！」

「うわ・・・土方さん、今のアキツいですぜ・・・」

「トシイイイイ！もうやめて！

聞いてるこつちが悲しくなってくるからお願いイイイ！！」

「土方さん・・・僕は友達ですからね？友達とってくれていいですからね？」

新八も、可哀想なものを見る目付きで土方の肩に手をぽんと置いた。

「マヨラー、ワタシは友達じゃないからナ勘違いすんなヨ」

なんとなく、神楽も土方の肩に手をぽんと置いた。

「誰が勘違いなんかするかア！！！」

そう叫びながら、肩に置かれた手を土方は払いのけた。

そんな風に、高杉たちをよそにどうでもいいことで盛り上がっていた新八たちだったが、

ふと、一人の男が血相を変えこちらへ走ってくるのが目に入った。

「んー？・・・アレ・・・？」

その男は、鎧も何もつけていない作務<sup>さむえ</sup>衣姿で、目にはゴーグルをつけていた。

手には何やら紙を一枚持っている。

高杉さん！と深刻そうに叫ぶその男に、皆の注目も自然と集まった。

さすがの高杉もそれに何かを感じたのか、少し落ち着いた口調で答えた。

「・・・どーした三郎。何かスゲー発明でもしたかよ」

「違います！これ見てください！」

三郎と呼ばれた男が、手にしていた紙を高杉に渡した。それを見た高杉の目付きが、次第に厳しいものへと変わっていく。

「三郎・・・こいつをどこで手に入れた？」

「近くの村です。」

部品を調達しようとしてたら、その紙つ切れを幕府の役人がばらまいてました」

「高杉さん！一体何と書かれているんですか！？」

三郎の慌てぶりと高杉の反応に、皆の緊張が高まる。

皆の視線が高杉に集まった。皆、高杉が口を開くのを待っている。新八たちも、何事かと固唾を吞んで事の次第を見守っていた。

当の高杉は、今ではいつもの冷静さを取り戻していた。

紙から視線を上げると、一つしかない目で、ゆっくりと周りを眺めた。

一通り見渡したあと、ようやく口を開いた。

「幕府が廃刀令を出した」

「！！？」

その言葉に、兵士たちが一斉にざわめき出す。

「なんだって!?!」

「そんな馬鹿な!」

「国は俺たちから・・・侍たちから刀を奪うつもりか!」

「刀は侍の魂ぞ!」

「なぜ、そんな命<sup>めい</sup>が・・・」

幕府が、自分たちが護ろうとした国が、自分たちの魂である刀を奪う。

それは、今までずっと国のために闘ってきた彼らに計り知れないほどのダメージを与えた。

その動揺する様を、何とも言えない気持ちで新八たちは見ていた。

（そうか・・・今日が廃刀令の出された日か・・・）

近藤が聞こえぬよう小さくつぶやいた。

（・・・攘夷戦争が正式に終わった日だ・・・）

そのざわめきの中、三郎への批判も聞かれ始める。

「本当にそれは幕府の声明だったのか？」

「お前、敵が流したデマを信じたんじゃないのか！？」

まだ、国を信じた輩がそう三郎を責め立てた。  
しかし、三郎は哀しい顔をして首を横に振った。

「それだけじゃない・・・」

幕府は・・・

我々を・・・攘夷志士を、幕府に刃向かう逆賊として、  
粛清すると・・・

そう・・・正式に公表した・・・」

「なんだと！！？」

周りにいた兵士たちが、一気にざわめき立った。

「そんな・・・嘘だ！」



「こんな馬鹿げたことがあるものかつ!!」

「俺たちは・・・俺たちは国のためにっ!」

「ちくしょう・・・ちくしょう!!」

「完全に幕府は天人の傀儡と化したのか・・・っ!!」

「・・・腐ってやがる・・・」

今までこの国を護ろうと必死に闘ってきた自分たちが、国に裏切られた。

初めは驚きと動揺に覆われていたその場の空気が、次第に国の裏切りに対する憤りへと変わっていった。

その光景を、新八たちは息を吞んで、ただただ傍観することしかできなかった。

（オイ、土方さん・・・

ここに、たくさん未来の攘夷志士予備軍がいますが・・・どうします？斬りやしょうか？）

意地悪く、沖田がそう言った。

しかし、そう言った沖田の顔にも脂汗が浮かんでいた。

(ふざけるな・・・  
今のこいつら相手じゃア・・・真撰組全員でかかっても捕れる気が  
しねえよ・・・)

殺気立つ志士たちを目の前に、土方も悔しそうにそうつぶやいた。

新八と神楽はずっと黙ってその光景を見ていた。

新八と神楽の胸のうちには、何とも言えない複雑な感情が生まれて  
いた。

子供たちが感じていたのは、銀時がもう戦わなくてよいのだ、とい  
う安心感だけではなかった。

・・・何のために、銀さんは・・・

今まで銀時がしてきたことの意味を、否定されたようでもあった。  
そう思うと、子供たちは無性に胸が苦しくなった。

「銀ちゃん・・・」

神楽が、そうぼそりとつぶやいた瞬間であった。

バキイイイッ!!!

突然、何かが叩き折られる音がした。

騒いでいた兵士たちが皆、はつとそちらを向いた。

そこには、木刀を地面に叩きつけている高杉の姿があった。

すべての怒りをぶつけたのか。

叩きつけた木刀は見事に折れた。

くると、折れた木刀の切っ先が宙を舞っている。

そのなかで、高杉の右目が静かにそれを見ていた。

木片が地面に落ちるまでの時間。

新八たちにはそれが長く感じられた。

からあん、と木片が地面に落ちて跳ねたあと、高杉はゆっくりと口を開いた。

「何をうるたえてやがる・・・てめーら

慌てることなんざ・・・何一つねえよ」

その声は、とても穏やかで、落ち着いたものであった。

荒々しい行動とは真逆のその口調に、皆、虚を衝かれたのか。

一斉に静まり返り、黙って高杉の言葉に耳を傾けている。

「お前らの護りたいものと、幕府の護りたいもんは・・・もう、違う

・・・それだけのことだ」

折れた木刀を高杉は投げ捨てた。

からん、という乾いた音が再び境内に響く。

「ならば」

高杉が、脇に差しであった刀に手を伸ばした。

「お前らに残された道は・・・なんだ？」

鞘から、白い刃がすつ、と引き抜かれる。

「敵を倒してこの国を救う」

それだけだろうか」

高杉が、刃を空に向かって真っ直ぐに立てた。

「俺たちの敵は

・・・誰だ？」

高杉の刃が、鈍く光る。

「敵は・・・

・・・誰だ？」



と、突然。

「国だ！」

「幕府だ！！！」

「天人の言いなりの、幕府だ！！！」

堰<sup>せき</sup>を切ったかのように、兵士たちがオオオオと声を張り上げた。

「倒すべきは幕府だ！」

「我らの敵は、幕府だ！！！」

「倒せ！幕府を倒せ！！！」

枯れ葉についた火が、一気に激しく燃え広がったようであった。  
その場のボルテージが、急激に上がっていく。

皆、口々に倒幕を叫んでいる。

この勢いを止めることなど、もう誰にもできない。

「なんて野郎だ・・・」

あの野郎、ここにいた全員を煽って倒幕へと駆り立てやがった・・・

「

土方が、額の汗をぬぐうこともせず、そう吐き捨てた。

「アイツが・・・真撰組おれたちの敵か・・・」

近藤も沖田も、目を見開いてその光景を見ていた。

「たか・・・すぎ・・・さん・・・」

新八が、恐怖と悲しみの入り混じったような目で、高杉を見た。

その絶叫のなか。

真ん中にたたずむ片眼の男だけが、静かに微笑んでいた。

## 25. 戦場で生まれた夜叉は（前書き）

「・・・・・・・・ハア・・・・ハア・・・・」

「・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・」

荒々しい息遣いがふたつ、聞こえてくる。

ヒュオオオオオと戦場を駆ける湿った風が、そのふたつの息遣いをかき消した。

その呼吸の主は、二人の若い男であった。

二人は、ところどころに傷を負いながら、背中合わせで刀を構えていた。

その二人を、大勢の天人たちが取り囲んでいる。その数はあまりにも多く、絶望的というにふさわしい。

銀髪の男が、振り向かず背後の男に声をかけた。

「・・・・・・・・んてえ？」

どのあたりに地の利があるって？桂くんよお」

「桂くんではないゾラだっ！  
あつ、間違えた」

「間違っ  
てんのは  
てめーの  
作戦だ  
アアア  
アアア  
!!!!」

## 25。戦場で生まれた夜叉は

「他の者たちは・・・どうした？  
皆・・・やられたのか？」

「いや、見てねえ・・・  
だが・・・」

息を整えながら、銀時が周りの天人を見渡す。

「どうも俺たちは、うまく引き離された気がしてならねえ」

「・・・つまり、俺たちだけに狙いを定めてきた・・・と？」

「ああ」

「なるほど・・・頭を直接叩きに來たというわけか。  
我々の面まで割れているとはな・・・」

「だからそのツラ外せって言っただろーが。目立つんだよ、それ」

「誰がツラだ！ーいい加減にしないとたたっ斬るぞ貴様！！」

というか貴様こそその卑猥な頭のもじやもじやどうにかせんか。  
遠くからでもよく分かる。嫌でも目につくわ！」

「嫌でも目につくってどーゆーこったアア！？」

自分たちが置かれている状況など全く歯牙にもかけず、いつものグダグダなやりとりをする銀時と桂。

しかし、その余裕もそう長くは続かなかった。

「っ！ツラ伏せろっ！！！」

「！？」

わけが分からぬままに、反射的に桂は銀時の言葉に従った。

間一髪、一つの矢が桂の頭の上をびゅっと飛んで行った。

二人が避けた為に、そのまま周りを取り囲んでいた天人に矢が刺さった。

「オイオイ馬鹿じゃねーの。」

丸く取り囲んでいる状況で飛び道具なんか使ったら仲間当たるだけだっつうの」

桂の方を振り返り、矢が刺さった天人を見てプププと笑う銀時。

しかし、その銀時の後ろで、呼吸を整えながら桂は神妙な面持ちをしていた。

地面についた自分の膝を、ぐっと掴んだ。

今まで、戦場で膝をつくことなど、一度たりともあり得なかった。しかも、一度ついた膝は重く、なかなか立ち上がる事が出来ないで



いた。

銀時の言うとおり・・・もう、限界なのかもしれんな・・・

たとえ間抜けな天人が一人いるとしても、絶対絶命とも言えるこの状況は、なんら変わらない。

弱腰とも言えるそんな考えが桂の頭によぎるのも、当然であった。その大人しい桂に違和感を感じた銀時が、いつもの調子で声をかける。

「おいどーしたアツラ。まさかビビっちまったのか」

ツラと呼ばれたが、いつもの返事は出てこなかった。低い声で、桂がぼつりとつぶやいた。

「・・・これまでか」

いつもとは違う、思いつめた桂の様子に、銀時は何も言わなかった。真剣な表情で、黙って話を聞いている。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく潔く腹を切ろう」

桂が奥歯を噛みしめて、そう言った。

銀時が、背中越しにそれを聞いた。

あの桂が、いかなるときでも自分を曲げぬ、あの強い桂がそう弱音を吐いた。

それだけ戦況は厳しいということである。

いくら軽口を叩いてはいるものの、銀時もそれを分かっていた。

・・・腐れ縁として、介錯くらい務めてやってもいいのかもしれない。

そんなことをぼんやりと思った。だが。

・・・あいにく、俺はそこまでいい奴じゃアない

銀時は、ぎりと歯を食いしばった。

「バカ言ってんじゃねーよ。立て」

そう言うと、銀時は、自分の刀を支えにして立ち上がった。それを、驚いた顔の桂が振り返る。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」

ジャキ、と刀を握り直す音が聞こえた。

それを聞いて、桂がうつむいた。

その口元は、穏やかに笑っていた。

・・・こいつは本当に変わらん・・・呆れるくらい・・・

桂も、自分の刀を支えにして立ち上がった。

立ち上がると、鋭い目つきで刀を構えた。

それを背中を感じたのか。銀時がフン、と小さく鼻で笑った。

「行くぜ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ」

いつもの返事をした桂と銀時が、天人へと斬りかかっていた。

【25。戦場で生まれた夜叉は】

目の前の敵を薙ぎ払っているうちに、どこからか、地響きのような音が聞こえてきた。

・・・なんだアこの音は？大砲か？

そんな事をぼんやり思いながらも、天人を斬る手は休めない。

次々に襲いかかる天人の攻撃を、最小限の動きで交わしては確実に仕留めていく。

その銀時の周りには、一人の仕業とは思えぬほどの天人の死体が転がっていた。

しかし、敵の数は大して減ったようには見えなかった。

銀時を取り囲む天人たちは、隙を見ては次から次へと斬り込んでくる。

銀時には休む暇もない。

さすがの銀時も、次第に肩で息をし始めた。

肉体的にも精神的にも、とうに限界は訪れていた。それでもなお、銀時は刀を振り続けた。

ふと、銀時は桂の姿が見えないことに気が付いた。

「ヅラアアア！てめーまだ生きてんのかア！？」

「ヅラじゃない桂だっ！」

貴様こそ人に偉そうなこと言っておきながら、もう根を上げているんじゃないだろうな！？」

「誰が根を上げるかっ！！」

絶対てめーより先には死なねえっ！！」

姿は見えぬが、桂が生きていることを確認する。

それと同時に銀時は、地響きが次第に大きくなるのを聞いた。

・・・この音は・・・まさか・・・

もしかして、と銀時が一つの可能性に思い当たった時であった。

「・・・っ！」

氣をとられていたせいだ。

刺した刃が、天人のあばら骨に突き刺さったまま、抜けなくなってしまったのだ。

普段なら、刺すようなことは滅多にしない。一度刀を刺してしまえば、次の動作に遅れが生じるからだ。

しかし、その天人は背丈が銀時の二倍はあったため、つい下から突いてしまったのだ。

血と汗でにじんでいた銀時の手から、つるんと刀が離れる。

それを、敵が見逃すはずがない。

一斉に、丸腰の銀時に襲いかかる。

だが、銀時は慌てなかった。

目の前に倒れ込む死体から刀を引つたみると、すぐに姿勢を立て直した。

いや、立て直そうとした。  
しかし。

「てめーはここで死ね、白夜叉」

死体と思っていたその天人が、銀時の足を強く掴んだ。  
爪が、銀時の足に食い込み、血がにじむ。

「てんめ・・・っ！大人しく死んでろ！」

そう叫んだ銀時の視界に、一人の天人が映る。

大きな剣を、今まさに自分の頭へ振り下ろさんとしているところであつた。

あしかせ  
足枷を外すよりも、先にこちらを倒さねばならない。

もしコイツの太刀を受け止めたら、二番手が必ず斬り込んでくる。

そう判断したのが先か、後から思考回路が追いついてきたのか、銀時には分らない。

次の瞬間には一筋の閃光が宙を走り、その後には下半身から上半身

がずり落ちる天人の姿があった。  
一瞬、皆がその光景に息を呑んだ。

その隙に、銀時は自分の足を掴む手を腕ごと切り落とした。

「・・・づっ!!」

と、突然背中に激痛が走った。

見ると、矢が一本、刺さっている。

その間に、また一本、二本と矢が刺さっていった。

「うぜえっ!!」

銀時は刀を射手に投げた。見事に、投げた刀は射手の喉笛を貫き、  
どう、と射手は倒れた。

そのまま、地面に落ちている刀を拾おうと屈んだ銀時は、自分に一  
つの大きな影が落とされていることを確認する。

右手で刀を拾うと、すぐさま左足を軸に回転し、そのまま相手を振り  
払おうとした。

しかし。

その刀が相手に届く前に、相手が振り被った金棒が銀時の左の脇腹  
をとらえた。



「ふぐうつ!!」

ばき、めきめき、と骨や内臓が悲鳴を上げる音を銀時は聞いた。

ドシャツ!!

そのまま、吹き飛んだ銀時は、地面に叩きつけられた。

「がふっ!!」

心臓が、まるで馬が駆けているかのように強く、早く打っている。息も、今まで経験したことがないほど荒かった。

口いっぱい、鉄の味が広がる。生暖かいそれは、まだ己が生きていることを訴えているかのようにであった。だが、恐ろしいほど地面は冷たかった。

・・・これは・・・美しく、ねえな・・・

両腕に力を込め、あちこちに痛みが走る身体をゆっくりと起こした。

なぜ、この隙に止めを刺しに来ないのか。

その疑問は、顔を上げればすぐに分かった。

銀時を取り囲み、天人が皆、彼を見下ろしている。

皆が皆、一度刀を振り下ろせば、それですべて終わるのだ。

この絶対絶命とも言える光景の中でも、銀時は何の焦りも感じてはいなかった。

なぜか、心の内は穏やかであった。

それでも一つだけ、心をよぎるものがあった。

・・・先生・・・こんなに血にまみれちゃった俺は・・・

・・・先生のところに・・・行けるのかな・・・

ふつ、と小さく銀時は笑った。

こんな場面で、そんな呑気なことが頭に浮かんだ自分が、無性に笑えて来る。

随分と、センチメンタルなもんだな。

そう自分を皮肉った。

「・・・つつ」

打たれた脇腹の痛みが、頭の芯にまで響く。

銀時は、目をつぶった。するとそこには、見覚えのある戦場の光景が広がっていた。

・・・あの人と出会った戦場・・・あの時、俺の人生は始まった・・・

ふと、穏やかに笑う松陽の顔が目に見え始める。

・・・戦場で始まったこの人生、戦場で終わらせるのが道理なのか  
もしれねえ・・・

そんなことを思った時であった。

「・・・・・・？」

誰かに、名を呼ばれた気がした。

以前にも、こんなことがなかったか。

銀時は、瞼を開けた。

目の前には、金棒を振り被ったまま硬直している天人がいた。

「・・・・・・・・!!」

よく見れば、その天人の喉元を一つの刀が貫いていた。それを、周りの天人が、呆氣にとられた様子で見ている。

「あの野郎・・・人がしんみりしてる時に邪魔しやがって・・・」

そう呟いた銀時の口角が、嬉しそうにつり上がった。刀を持つ右手に、ぐっと力が戻ってくる。

ザシュッ!!

呆氣にとられている天人たちの足元を一気に薙ぎ払う。天人たちは皆、油断していたために避けることができず、呻き声をあげてその場に倒れ込んだ。

と同時に、体をねじったために、激しい痛みがまた銀時を襲っていた。

痛みには顔をしかめながらも、次に銀時は、背中への矢に手を伸ばした。力を入れ、ズツ、とすべての矢を引き抜いた。

そのあと、銀時は目の前の突っ立っている天人へと視線を戻した。

その天人の喉元から、ゆつくりと刀が引き抜かれる。  
そのまま天人は、どさりと地面に倒れ込んだ。  
その倒れた天人の後ろから、一つの影が現れた。

「オイオイなんだア？  
情けねー野郎だ。俺がいねーと満足に戦もできねーのかア？」

顔に返り血を浴び、憎らしい笑顔を銀時に向けながらも、その男は  
左手を差し出した。

「ほらよ。手でも貸してやろつかア？銀時」

高杉、であった。

「うるせエッ！誰がためーの手なんか借りるかよっ！！」

その差し出された手をぱしんと弾くと、銀時はがばつと勢いよく立ち上がった。

しかし、やはり無理はするものではない。

再び激しい痛みに襲われ、冷や汗いっぱい顔で左の脇腹を押さえる無言の銀時を見て、やれやれと高杉が呆れた顔をした。

「本当に情けねえ野郎だ。少しは意地くらい張れねエのか」

「う……うるせーんだよ……」

だいたい、なんでてめーがここにいんだ。まだ寝てる時間だろーが。つーか昨日の会議出てねーくせによくここを嗅ぎ付けたなオイ。オメーの嗅覚犬並み？」

「甘く見ねエでもらいたいな。俺が祭りの会場を見つけられねえとでも思ってたのか？」

その言葉にそりやそうだ、と納得しながらも辺りを見渡すと、鬼兵隊や銀時たちとはぐれた兵たちが、天人と刀を交えていた。

先刻から聞こえていた地響きは、彼らの足音だったのである。

よく見れば、背中に傘を紐でくくりつけた神楽、腰が引けている新八、場慣れした様子の近藤、土方、沖田までいる。

「オイオイ高杉ィ・・・なんであいつらいんの？おかしくね？使者じゃなかったの？」

「さあな。置いていかれた恨みを一発殴りてエとか何とか言ってたぜ。」

別に押し留める義理もねえからな。好きにさせただけだ」

「天パどこアルかー！」と叫びながら次々に敵を殴り飛ばしている神楽を、呆れ顔の銀時が眺めている。

それを見て、高杉がふんと鼻で笑った。



「さあ白夜叉さんよ。余所見してる暇はねえぜ。せいぜい、俺の足だけは引っ張ってくれるなよ」

そう言うと、高杉はくりりと向きを変えた。

数は減ったものの、未だ天人の戦意は消えてはいない。

「っせーな低杉チビ助。

てめーこそ片目だからって甘えんじゃねーぞ。俺アてめーの死角フオローしてやるほど優しくねーかな」

「・・・本当に口だけア達者な野郎だな、てめーは・・・  
周りの天人ども片付けたら真っ先に二度と口聞けねえようにしてやるから待つてろよ」

そう言うと、背中合わせのまま、二人とも刀を構えた。

銀時が、口の中の気持ち悪い血をべつと吐き出し、ぐいと口元をぬぐった。

その地面に吐き出した血を、ちらと眺めた。

「・・・高杉」

「あんだよ。まだなんか言うことあんのか」

「・・・サンキュな」

「・・・気持ち悪い」

「そりゃねえんじゃねえの！？珍しく俺が・・・」

「うるせえ天パ。死亡フラグ立ててる暇があるならさっさと行くぞ」

「わあったよ！」

一通りのやりとりを終えると、二人ともすつ、と息を吸った。

そして同時に、ぱつと地面を力強く蹴った。

そうして、再び斬り合いへと戻っていった。

## 25。戦場で生まれた夜叉は（後書き）

というわけで、今回はあとがきが本編になりかねなかったので前書きから本編でした。

これから少し痛々しい場面や暗い場面が増えていきます。ちゃんと救いはあるラストですので・・・それまで皆様の広いお心で許していただけたら、嬉しい限りです。

## 26。人の話に割り込むのは失礼です

「オイこのアホ天パ。

よくも置いてつてくれたナ、ああん!？」

「ちよつ、神楽ちゃん、本気で殴る気!？」

銀さんこんな大怪我してるんだよ、少しは心配しようよ」

「そうやって甘やかすから調子に乗るアル、この馬鹿は。一度びし  
っと叱らなきゃ駄目アル!」

「おおーい待てー。なんで俺怪我人なのにこんなガキにキレられな  
きゃなんねーの!？」

【26。人の話に割り込むのは失礼です】

ここは、先ほどの戦場から少し離れた雑木林の中にある、目立たない洞窟。

入口は小さいものの、なかは兵士全員が十分に収まるほどの広さである。

そこでは兵士が皆、休んでいる。

その間を、衛生兵だけが忙しそうに動いていた。

傷ついた兵士の手当てをしているのだ。

その手当てを受けている中に、銀時もいた。

背中を受けた傷に軟膏を刷り込まれ、脇腹に包帯を巻かれている横で桂が呆れた顔で立っていた。

「よくもまあこの傷で戦い続けたものだ。化け物が貴様は」

「俺だってできるもんなら静かに寝ていたかったわ!」

相変わらずの減らず口を叩く銀時であったが、大きな声を出すと脇腹に響く。

いててて、と脇腹を押さえる銀時を見て、情けない奴だと桂は溜め

息をついた。

「・・・貴様も、今のうちに左目の包帯を換えておけ。まだ傷は新しいのだから」

腕を組みながら、桂は振り返った。その口調はどこか怒っているようである。

「てめーは母親か。なんでもかんでも口出すんじゃないやねエよ鬱陶しい」  
「母親じゃない桂だ！」

そこには、片膝を立て、洞窟の壁に背を預けている高杉がいた。昨日できたばかりの傷を覆う包帯には、血がにじんでいる。

「なんかその台詞、反抗期の息子みてーだぞ」

「誰が息子だふざけんなこの天パ！」

「全くだ。こんな聞き分けのない息子、育てた覚えなどない」

「俺も育てられた覚えはねえよ！」

グダグダなやりとりを一通り終えた後、ごほんと桂が咳払いをした。

すると、銀時の処置を終えた兵が道具を片付けて下がっていった。その兵が離れるのを見て、真面目な顔をした桂が高杉に向き直る。

「なぜ、貴様がここにいる？ 今日一日くらい、体を休めておくこともできるのか？」

「オイオイ・・・てめーら、そんなに死にたかったのか？ 悪かったな、邪魔してよオ」

「確かに、貴様が来なければ我々は死んでいたかもしれん。それは感謝しよう。

だが、貴様とてまだ片目に慣れていまい。下手をしたら、貴様も命を落としていたぞ」

「そんな時や自分の運命<sup>てめえ</sup>呪うまでよ。

それよりも、てめーの間抜けな作戦で命落とす方が俺アごめんだね」

「それは言えてんな」

銀時にもそう言われ、何も言えなくなっている桂の顔を見て、高杉がクククと笑った。

「まあそう落ち込むなよ、ツラ」

「ツラじゃない桂だ！」

その返しを無視し、高杉は続ける。

「俺たちは、幕府に売られたのさ」

その言葉に、桂も銀時も言葉が出なかった。目を見開いて、呆然と高杉を見ていた。

「今・・・何と言った・・・？」

「俺たちや売られた、と言ったんだ。幕府にな」

その言葉の意味を飲み込めずに、桂が聞き返す。

「幕府が俺たちを売る・・・？どういう意味だ？」

「どういう意味も何も、そのままさ。」

幕府はいつまで経っても戦を止めねえ俺たちに対し、廃刀令を出しやがった。

これからは、幕府主導のもと俺たち攘夷志士の肅清が始まる」

「・・・！」

それを聞いた桂は、驚きを隠せない様子であった。何も言えずに、その場に立ち尽くしていた。



一方、銀時は、何も聞いていなかったのではないかという程、無反応であった。

いつものやる気のない、死んだ魚のような目を高杉に向けていた。その表情から、何を考えているのか読み取することは、付き合いの長い高杉にも不可能であった。

「てめーは驚かねエのか、銀時」

高杉が少しつまらなそうにそう言った。

すると銀時は、あーと言いながら、頭をポリポリと掻いた。

銀時の頭には近藤たちの顔が浮かんでいた。しかし、話はそこまで言及されなさそうである。

「いやゝ驚いたけど・・・道理で、と思つてよ」

すっかり参っていた桂だったが、銀時の言葉に反応する。

「・・・・・・・・何がだ？」

「さっきの戦さ。俺ア白づくめで目立つからともかく、なんでツラまで一緒に引き離されたのかと思つていたんだが・・・幕府が俺たちを切り捨てたってんなら筋が通らア」

「・・・・・・・・なるほど・・・俺たちの情報を天人側に流したということ

か。

中心的に攘夷活動を行う我々を捕まえることで、皆の士気を下げようという魂胆だな」

「そーゆーこと」

納得した様子の桂を見て、銀時はしばらく黙っていた。何かを考えた後、口を開いた。

「んで？オメーらはこれからどうすんだ？」

そう切り出した銀時の顔を、高杉と桂が見た。二人とも、少し呆氣にとられた表情をしている。

「てめーなら分かってんだろ、銀時。」

俺ア今も昔も狙いはこの幕府、この国だ。

いくら廃刀令を出されようが、俺のやることは変わりなしねえ」

「俺もだ。廃刀令ごときでこの国を憂う心は変わらぬ。むしろ、此度の一件はこの国の墮落した姿を再認識させてくれた」

そうだろうな、と予想通りの答えを聞いた銀時は思った。

「まア、お前らはそれでいいかもしれねえ。だが他の仲間たちは？」

他の連中まで引き連れて、そのまま地獄の底まで突進していくつもりか？」

桂は、銀時が何を言わんとしているか、すぐに分かった。これ以上仲間を殺してくれるな、と言っているのだ。当然、高杉にもそれは伝わっていた。

「当たり前エだろうが。何を寝ぼけてやがる、てめーは。その覚悟もねえ奴に、刀なんぞ握る資格はねえ」

「勘違いをするな、銀時。」

俺も高杉も、望まぬ者に戦いを続けさせるほど非道ではない。何より、信念無き者には背中など預けられぬ」

その桂の言葉に、高杉が嫌らしく口元を歪ませた。

「なんだ、高杉。何がおかしい」

「いや・・・鬼兵隊の連中は皆、倒幕の意思が強くてな・・・ありがてえ話だと思ったのさ」

「貴様・・・何か仕組んだのか？」

「何も？俺ア意志を確認しただけさ」

そう言つてクククと笑う高杉を、桂は訝<sup>いぶか</sup>しんだが、それ以上口には出さなかった。

こいつが本当の事を話すわけなどない。それを桂は知っていた。桂は視線を銀時へと戻した。つられて高杉も銀時を見やる。

二人は、真つ直ぐに銀時を見つめていた。

それを見て、あの時と同じ眼だ、と銀時は思った。

こいつらは、何も変わっちゃいねえ・・・

いつまでも変わらぬことは、果たして良いことなのか、悪いことなのか。

それは銀時には分からなかったし、その答えを出すつもりなど毛頭なかった。

肝心なのは、自分が出す答え。自分が進むべき道が見えているかどうか、である。

「銀時」

桂の声で、ふと我に帰る。

「貴様こそ、どうするつもりだ？」

桂と高杉が、銀時の答えを待っている。

だるそうな目で二人を交互に見た後、銀時は耳をぼじった。

「あー、俺か？俺ア・・・」

そこまで言いかけた時であった。

「やっと見つけたアル！このアホ天パ！」

突然、高い声が銀時の言葉を遮った。

え？ナニ？と銀時が間の抜けた顔で振り返ると、そこにはなぜか仁王立ちの神楽がいた。

「か、神楽ちゃん、少しは空気読もうよ！銀さんたち、なんか真剣な話してたじゃない！」

その後ろには、新八もいた。

突然入ってきた神楽に対し、あからさまに機嫌を悪くしている高杉に怯えている。

しかし、神楽がそんなことを気に留めるはずもない。

「新八うるさいネ！こっちも重要な話ネ！」

気が済むまで下がらなさそうな様子の神楽を見て、銀時は面倒臭そうな顔をした。

「おい高杉イ・・・なんでこんなガキ連れてきたんだよ・・・普通よオ、お土産買ってくるからとかなんとか言って柱に縛り付けてでも留守番させとくもんだろーが！」

「知るか。そいつらの面倒を見るのはてめーの役目だ」

「そうアル。ワタシたちをほったらかしにしたお前が悪いアル。子供車の中に置いてパチンコする親並みに最低アル」

「オメーはちよつと黙ってろ！」

ぎゃあぎゃああと口喧嘩を始める銀時と神楽を見て、桂は馬鹿らしくなってきたようである。

はあと溜め息をつくとき銀時に背を向け、歩き出した。

「あと30分もしたらここを離れて西に向かうぞ。それまで休んでおけ」

それだけ言つと、その場を立ち去ってしまった。

「ちよつ、おいヅラァ！」

高杉も腰を上げると、桂とは反対方向、洞窟の奥へと歩き始めた。

「え？高杉くん？まさかこの状況で俺一人にしないよね？」

そう助けを求めた銀時を、「知るか」の一言で一蹴すると、高杉も奥へと消えていった。

こうして、冒頭のやりとりが始まったわけである。

ぎゃあぎゃああと嘔みついてくる神楽をいなしながら、銀時は着物を直し、胴をつけている。

「廃刀令が出されてもまだ戦い続けるのか。お前は」

銀時がその声のした方を見る。すると、見るからに嫌そうな顔に変わった。

土方たちである。

さきほどの合戦のせいで、服装は少し乱れている。

銀時が、脇に刀を差し直しながら口を開く。

「まーな。

てめーらは知ってたのか？直に廃刀令が出るってことをよ」

その言葉に、土方も口ごもる。

「・・・いや、知らなかった」

「どうだかねえ」

「・・・」

疑う銀時に、土方は何も言い返すことができなかった。  
身支度を整えた銀時が、土方たちに向き直る。

「これ以上ここにいたって、なんにも変わりはないぜ。  
高杉に斬られる前に、さっさと立ち去るんだな」

「安心してくだせえ旦那。高杉の野郎なら、逆に斬り殺してやりま  
さあ」

「そ、総悟っ」

横にいた近藤が慌てて沖田の口をふさいだ。

本当にやんちゃで困った奴で、とがははと笑って誤魔化す近藤をく  
すりともせずに銀時が見ている。

その何か言いたげな目を伏せると、ぼろぼろになった白い羽織を肩  
にかけた。



「銀ちゃん？どこ行くアルか？」

「小便」

それだけ簡潔に言うと、銀時はぶらぶらと歩き出した。それを、不思議な表情をした子供たちが見送った。

## 27. 大人はみんな、素直じゃない

いつもの白装束に身をまとい、脇に刀を差した銀時が、鼻をほじりながらブラブラと洞窟から歩いて出てきた。  
暢気に、鼻唄混じりである。

「そんな格好でどこへ行く、銀時」

ふと洞窟を振り返ると、桂が壁にもたれ掛かりながら、腕を組んで立っている。

それをボーツと見ながら、指先についた鼻くそをピンと飛ばした。

「別に、小便だけど・・・何？ツラも連れションしてえの？」

そう言っただけの憎たらしい笑顔を桂に向けるが、それには応えず、まっすぐな瞳を銀時に向けていた。

「さっきの答えを・・・まだ聞いていなかったと思ってな」

「答え？」

「お前はこれから先、どうする？」

「ああ・・・その話か」

桂が壁から離れる。そして、銀時に正面から向き直った。それを見て、半身の構えだった銀時も桂の真正面に向き直った。だが、桂の表情とは違い、銀時のそれはどこかしまりがない。

「オメーも知つての通り・・・俺アオメーや高杉のように理想も高尚な信念もねえ」

そう言うと、にんまりと笑った。

「俺はただ、喧嘩がしたかったただだからな」

そう言った銀時を、桂は真剣な表情で見つめ続けている。その視線から逃げるかのように、銀時は刀の鐔つばに指をかけ、そこから見える刀身を眺めた。

「まア廃刀令が出たって事ア派手な戦はもう終わりだろ。これからは攘夷活動の形も変わってくる」

カチン、とその刀を鞘に納めた。

「刀振るうしか能のねえ俺の居場所なんざもう、ねえ」

銀時は顔を上げた。

相変わらず、桂はくそ真面目な顔をしている。

「逃げるのか」

眉一つ動かさず、桂ははつきりと言った。

その言葉に、銀時のふざけた笑顔も消える。

「そうやって、目の前の戦いから目を背けて逃げるのか。」

仲間を失うのが怖くて闘えないと言っのか。

貴様は・・・」

銀時がうつむく。銀時の表情が見えなくなった。

「・・・白夜叉と呼ばれた貴様は、そんな腑抜けだったか!？」

「腑抜けだよ」

「!」

顔を上げ、あっさりそう答えた銀時を、桂は驚いた顔で見た。

銀時は、いつものやる気のない顔を向けている。

「死ぬことを武士道としてるためーらの信念から見りゃ、おりゃあ間違いない腑抜けだろうな」

「なんだと？」

そう言った桂を相手にせず、頭をポリポリ掻きながら、銀時は桂に背を向けた。

「お、おい待て銀時！

話はまだ・・・」

「悪いけど俺もう小便漏らしそーなの。帰ってきたら続き聞くんわ」

「銀時！

我らにはお前の力が必要だ！・・・よく考えろ！！」

銀時は、振り返らずに手をヒラヒラと振ると、茂みへと入っていった。

それを、物言いたげな顔の桂が見送った。

【27。大人はみんな、素直じゃない】

空は灰色の厚い雲に覆われていた。

時々、雲の中で雷光がうねる。

ゴロゴロと不機嫌そうな様子を見るに、降りだすのも時間の問題だろう。

そんな天気の中、銀時は一人、雑木林を抜けた草原を歩いていた。

その草原は洞窟からかけ離れている。

もうすでに用は足していた。

それでも洞窟に戻らないのは、迷子になったからではない。

何も遮るものがない草原。

そこでは、白い戦装束が異常なほど目立つ。

その草原を、銀時は何の恐れもなく進んでいく。

その草原の先に、小さな人影が少しずつ見え始めた。

それは天人ではない。武士であつた。

幕府軍である。

それを見て、銀時は脇に差してあつた刀を抜いた。

その鞘を投げ捨てると刀をびゅっと一振りした。

刀身が、鈍い光を放っている。

「さあて・・・」

銀時の口角が、にいと上がっている。

「白夜叉の最期の大喧嘩だ。派手にやろうや」

ガチャ、と刀を構えた。

その時であつた。

「このバカ天パアアア！！！！」

「ほぐうつ！！？」

キメきつた銀時の背中に、しっかりと飛び蹴りを決めたのは神樂であつた。

受けたばかりの脇腹の怪我に加え、神樂の怪力キックを食らつた銀時は、前にのめり込んで本気で苦しんでいた。神樂の所業に慌てた新八が駆け寄ってきた。



「神楽ちゃん！銀さん怪我してるんだよ！？本当に死んじゃうよ！  
！」

「あ、そうだったアル。ゴメンネ銀ちゃん」

「ゴメンで済むかこの怪力娘がア！！！」

もだえ苦しんでいる銀時のところへ、近藤、土方、沖田も近づいてきた。

顔だけをそちらの方向に向け、それに気付いた銀時は嫌そうな顔をした。

「また置いていこうったってそうはいかないアル！」

「いやいやいや・・・置いていくも何も、本隊は向こうだろうが」

冷めた表情で銀時はそう言った。

銀時の顔を覗き込んでいた神楽は、騙されずに続けた。

「お前、皆から離れるつもりアル。  
一人だけで戦うつもりアル」

「あ？」

珍しく、銀時が少し苛ついたような表情を見せた。

しかし、その表情をすぐに隠すと、痛そうに脇腹を押さえながら銀時が立ち上がった。

「なぜアル？ツラと喧嘩したからアルか？腑抜けと言われたからアルか？」

桂とのやり取りを全て知っている神楽に呆れるが、銀時はハン、と鼻で笑った。

「あんなもん喧嘩でも何でもねーよ。

俺がガキの頃ヅラとした喧嘩はそりゃーすごかったぞ。あいつは・

・」

「銀さん」

銀時の背後に立っていた新八が、銀時の言葉を遮った。

「なら、なぜ本隊に戻らないんですか？

なぜ桂さんや高杉さんのところへ・・・どうして戻らないんですか？」

その言葉に、銀時は黙り込む。

その時、青白い稲妻が、張り裂けそうなほどの大きい雷鳴とともに空を走った。

ポツリ、ポツリと大きな雨の滴が銀時たちを濡らしていく。

「万事屋・・・お前、自分を餌に本隊から幕府軍を引き離すつもりだろう」

近藤が、口を開いた。

「いや、今回だけじゃない。今までもだ。」

その戦場で目立つ白い衣装は、率先して自分が斬り込むことで兵士の士気を上げる意味もある。

しかし何より、敵の目を自分に向けるためのものだろう」

背中で黙って聞いていた銀時であつたが、ふっ、と小さく笑つと「考えすぎだ」と呟いた。

そのまま、一歩前に踏み出した。

「待てよ」

がっ、と銀時の肩を土方が強く掴んだ。

銀時がわずかに顔を向ける。それは、今にも刃を向けそうな顔であ

った。

「痛い。離せよ。」

真撰組の副長さんよ」

思いもよらぬ銀時の言葉に、皆の表情が一瞬にして固まる。

なぜ、それを・・・

「な・・・何ワケ分かんねえこと言っただ？俺は・・・」

「聞いたことねえ組織だが、警察組織みてーじゃねえか。  
スパイ活動、御苦労さまだったな」

しどろもどろの土方の前に、黒い革の手帳が差し出される。  
それは、警察手帳であった。なかには、もちろん真撰組の名が書か  
れている。

土方は上着から順に全てのポケットを叩いた。  
ない。どこにも、手帳がない。

スポンの尻ポケットまで叩いて、頭の血が引けるのを感じた。

「てめ・・・いつの間・・・」

そこまで言いかけて、ふと土方は思い出した。

高杉と対峙した、あの時。

奴が高杉の刀を止め、土方の刀を封じた、あの一瞬。  
それしか思い当たる場面はなかった。

「あ・・・」

土方の頬を汗が伝う。

その後ろから、憎たらしい声が聞こえてくる。

「オイオイ情けねくなア土方さんよう」

ニヤニヤした沖田が、土方の肩に手を置いた。

「確か警察手帳盗まれたら切腹・・・とか局中法度にありやせんでしたっけ？」

「うるせえ、この時代はまだ適応外だ！」

「トシイイイイイ！！？何やってんのオオオオオ！！！」

「銀ちゃん、前にも言ったけどワタシこいつら知らないアル。」

というか一方的に連れ回されて困ってるアル犯罪アル助けてヨ銀ちゃん」

「おめーは何一人だけ助かるーとしてんだアアア!!!」

そう騒ぎ立てる土方の頭に、ぼんと警察手帳が投げられた。

「ま、次スパイやる時やこんなもん持ち歩かないことだな」

「お前・・・他の連中には言わなかったのか・・・？」

「まあガキどもがよく分からなかったたてのもあるがな・・・バレたら斬られんのは俺だし。  
言えるはずねーだろが」

その言葉に、皆が苦笑する。

「もう桂たちはあの洞窟を去った頃だろう。」

あいつらがどこに行ったか、俺にも分かんねーんだ。

これ以上ここにいる時間も無駄だ。帰って失敗しましたとでも報告するんだな」

「違う・・・!」

土方が叫んだとき、再び稲妻が走った。雨脚が、次第に強くなって

いく。

銀時は草原の彼方へ目をやった。

遠方に見える人影が、徐々に大きくなっていく。

もう、時間がない。

まだ立ち去る様子のない土方たちに、銀時は苛立ちをつのらせていった。

穩便に事を運ぼうと思ったが・・・もう、面倒くせえ

そう思った。

「それとも・・・」

銀時が、ゆつくりと土方の方に向き直る。

「俺の首だけでも持ち帰るか」

そう呟いた銀時の眼は、まるで夜叉のような狂気をまとっていた。  
口元は、醜く歪んでいる。

しかし、どこか哀しみを帯びた表情であった。

一瞬、銀時の見せた表情に、皆身体を強張こわばらせる。

だが、それにもめげず、すぐに新八が叫んだ。

「待ってください銀さん！」

確かに近藤さんたちは真撰組ですが、僕たちスパイじゃ・・・」

「下がってろ、メガネ」

「土方さん！」

土方が、新八を押し退ける。

「どの道、てめーには聞かなきゃならねーことがあつたんだ」

「やめんかトシ！」

近藤の制止すら、聞きはしない。

「旦那ア、そのままコイツの頭がち割ってくださいえ」

「総悟・・・てめ後で覚えてろよ」

ザッ、と土方が姿勢を低くし、いつでも刀を抜けるよう身構える。  
銀時も、刀を構えた。



「銀ちゃん！」

さすがの神楽も、真剣で斬り合いかねない空気に緊張する。

「手負いだから倒せるなどと思うなよ」

銀時の眼が、死んでいない。鈍く光っている。

本気だ、と新八は焦った。

なぜ、こんなことになってしまったのだろう。  
僕たちは銀さんを止めたかっただけなのに。銀さんを死なせたくな  
かっただけなのに。

「銀さん、やめてくださいっ！」

そう叫んだとき。

ヒュオオオオ・・・

花火が上がるような音が聞こえた。

「「「え」「」」

ドオオオオオン！！！！

鼓膜を破りそうな爆音と同時に、銀時たちのすぐ近くの土が舞い上がった。

その削られた地面を皆、黙って見つめた。

その間も短く。

蜘蛛の子を散らしたかのように、一斉に走り出した。

それを狙うかのように、次々に大砲が射たれ始める。

「わああ危ないっ!」

「おいチャイナ、標準語に戻ってんぞ」

「こついつ時にゴチャゴチャうるさいアルこのサド!」

「嫌だアア!!--このままお妙さんに会わずに死ぬのは嫌だアアア  
ア!!--!」

「「落ち着けエエエ!!--!」」

ドォーン・・・ドォーン・・・

その砲撃の中を、銀時と土方が同じ方向へと走っていた。

「おいオメーらまで攻撃されてんぞ!」

「だから連中の仲間じゃねえって言ってんだろーが!」

「もうオメーら用無しらしいな、ザマーミロ!!--!」

ケケケと笑う銀時に土方の血管が切れる。

「てめエエエ！！危機的状況なのは一緒だからな！！」

ドォーン・・・ドォーン・・・

「ウツソオオオオ！！？こんなところじゃ隠れる場所もないよ・・・  
つと、うわっ！」

ぬかるんだ地面に、新八の足がとられた。  
体制を崩し、倒れ込む。

「メガネ！」

「新八イ！」

「！！！」

新八めがけて、一つの砲弾が飛んできていた。

## 28。告白が成功するかどうかはタイミング次第（前書き）

遅くなつてすみません。

感想くださる皆さま、お気に入りに登録してくださる皆さま、評価してくださる皆さま、そしていつも読んでくださってる皆さま！！  
本当に感謝でございます。

この調子だと涼しくなる頃には終わりを迎えそうですが、最後までお付き合いいただけたらこの上ない幸福でございます。

ではでは、本編どうぞ。

## 28。告白が成功するかどうかはタイミング次第

新八は、草むらに寝転んで空を見ていた。

アレ・・・？僕なんでこんなところにいるんだっけ？

アレ？確か僕たち、桂さんと離れた銀さんを追ってここまで・・・

アレ？そう言えば僕、砲弾が飛んできて・・・アレ？

そこまで思い出して、新八はがばと起き上がった。

すると。

目の前には、白い背中が見えた。

いつも頼りにして来た、その背中。

その背中には、傷だらけで、赤黒くくすんでいた。

「ぎん・・・さん・・・？」

「銀ちゃん！」

「だからガキが来る所じゃねえって言ったんだ」

銀時が手にした刀で砲弾を弾いたようである。

銀時が、ゆっくり新八の方を振り返った。

「銀さん・・・？」

その顔は、怒っているものではなかった。  
何かを諦めた、そんな表情であった。

その雰囲気、神楽も土方も、近藤も沖田も思わず足が止まる。

銀時は、刀を持つ右手を、力なくだらんと下ろした。

なぜこいつらは・・・邪魔ばかりする。

銀時はゆっくりと、新八たちの顔を順に見た。

本隊の方に帰そうとしても、帰らない。

刀で脅しても、物怖じしない。

スパイなのかと思ったが、桂や鬼兵隊よりも、俺個人にまわりついてくる。

そして何より、スパイだと分かった今でも、頭のどこかで違うんじゃないか、と感じている自分がいる。

こいつらは、一体何なんだ……  
俺にとってこいつらは……一体何なんだ……？

「銀ちゃん……？どうしたアルか？」

心配そうな顔をして、自分を見つめる神楽に一瞥くれる。

それから銀時は、いつもの死んだような魚の目で地面をぼんやりと見た。

新八たちには、その瞳の奥で銀時が何を考えているのか、皆目つかめずにいた。

その場に、重苦しい空気が流れる。

しかし、その空気を壊したのは、銀時本人であつた。

「てめーら……もういい加減にしてくれねえか」

その言葉に、皆がキョトンとする。  
それを介せず、銀時は続ける。



「なんで俺についてくるのかは知らねーが・・・」

俺アもうツレなんざいらねえ・・・もう面倒なんだよ、そういうの

「旦那・・・？」

「今回の戦で分かったんだよ・・・俺には仲間なんかいらねえ、と俺アこれから一人で生きて行く」

雨がどんどん強くなっていく。

その雨音に、銀時の声はかき消されそうであつた。

「だから、頼むから去ってくれ。これ以上、俺に構わないでくれ」

それだけ言つと、銀時はその場を立ち去ろうとした。

「銀さんっ！」

その新八の呼び掛けに、銀時の動きが止まる。

「銀さんは・・・仲間といるのが嫌だから・・・だから一人になりたいと・・・そう言つんですか？」

「・・・だからそうだと言って・・・」

「そんなの、嘘です」

「・・・あ？」

「今だって銀さんは、桂さんたちに危険がないように、自分の身を危険に晒している。」

桂さんを、高杉さんを・・・仲間を守るために！」

新八の目に、うつすらと涙が浮かぶ。

「その銀さんが・・・仲間はどういらないなんて・・・そんなの嘘です!!」

「オメー・・・泣いてんのか・・・？」

その時、一つの砲弾が銀時たちの近くに落ちた。皆が慌てて、その場に身を伏せる。

近くの泥を巻き上げ、銀時たちにも泥が付いた。

銀時は腹這いになりながら幕府軍をみた。随分近くまで来ている。くそ、と銀時は口のなかで呟いた。

すぐ横を見れば、頭を抱えている新八がいた。

反対側には、神楽がうずくまっている。背中には、例の傘を背負っていた。

それを見て、銀時はあ、と息を吐いた。

「俺はな・・・」

ふと、銀時が呟いた。それに対し、神楽も新八も顔を上げる。

「これ以上誰かが死ぬのは・・・もうごめんなんだ」

そう吐き出した銀時を、子供たちは辛い表情で見た。

「連中はまだ攘夷活動を続けていく。  
それはあいつらの信念だ。」

俺が自分の信念を曲げねエのと同じで、あいつらを止めることはできねえし、それを止める権利も俺にはねえ。

ならよ・・・」

銀時が本音を話すことなど、珍しかった。

銀時自身、ここまで話してしまう自分に驚いていた。

銀時は、右手の刀に目をやった。

遺言、なのかもしれないな。

そう思うと、カチャ、と刀を握り直した。

「俺がやるべきことは、これくらいなんだよ」

「だからって、死ぬつもりなんですか！？  
そんなことしたら・・・皆が悲しみます！」

「別に死ぬつもりじゃねえ。俺の護りてえモン最後まで護り通して  
えだけだ」

「詭弁です！結果として、死んでも構わないと思ってるんでしょう  
！？」

「そんなの勝手アル！銀ちゃんがいないとワタシ・・・ワタシ嫌ア  
ル！」

そう言う神楽の目は、涙で今にも溢れそうであった。  
それを見て、銀時が戸惑う。

「オメーら・・・一体、何なんだ？俺の・・・何を知ってるんだ・・・  
？」

銀時がやっこのことでそう言うと、新八は何かを決心したようだった。

「銀さん！」

呼ばれた銀時が、新八の方へと振り返る。  
新八は、いつにもなく真剣な表情であった。  
大きく息を吸い込むと、言葉に力を込めた。

「僕たちはっ……未来から来たんです！！」

「新八！」

「……………ハ？」

思いもよらない新八の言葉に、銀時が全く飲み込めない表情をしている。

無理もないことであつた。

しかし、その銀時をよそに、新八は言葉を続ける。

「未来での銀さんはそりゃ毎日死んだ魚みたいな目してて……  
家事はしないし、家計はいつもかつかつだし、仕事も適当にしかないけど……」

・・・それでも！

僕たちや桂さん、長谷川さんや真撰組の皆さん、仕事で出会った多くの人たちに囲まれて

毎日馬鹿やりながらも大切なもの護りながら生きてますっ！

だから、だから・・・

仲間がいらないとか・・・そんな悲しいこと言わないで下さい！！

死のうだなんて・・・そんな恐ろしいこと思わないで下さい！！」

「そうアル！

ワタシたち・・・銀ちゃんがない生活なんて、考えられないアル！  
そんなの嫌アル！！」

子供たちの必死な叫びに<sup>お</sup>圧された銀時が、何も言えずに口を開いた  
ままになっている。

子供たちの言葉が、あまりにも予想外だったのだ。

しかし。

しばらく黙って話を聞いていた銀時の表情が、いつものだるそうな  
ものへと変わった。

「・・・えーと・・・君たちの気持ちは嬉しいけどね？  
つくならもつともらしい嘘をつきなさいね？」

全く信じていない口振りで、そう言った。

「オイイイイイ！！普通今の流れなら納得するところでしょーがアア！！」

ひねくれんのにも程があるわ、このボケエエエエー！！」

「ド阿呆ウ甘いわこのメガネ！！」

ウルトラセブンのモロボシ隊員を見習えっ！！あれくらいロマンティックな演出したからアン又隊員も信じたんだろーが！！！！」

「アンター一体何の話をしてるんだ！！！！」

「このボケ天パっ！」

どうしても信じないならこれ見るヨロシっ！！」

そう言っつて神楽が背中の中の傘に手を伸ばした。

その時であつた。

「！！」

ドオオオオオン！！！！

新八たちの目の前が、真つ暗になった。

そこで新八たちは、意識を失つた。



## 29。要するに喧嘩好きは喧嘩ができれば満足（前書き）

投稿一時間後に加筆修正・・・

何度見直してもダメなんですよね氣になるところが出てきてしまう・  
・

というわけで、【改】マークなくてもちよくちよく加筆修正してるところあるんで、お暇でしたら探してくださいまし

29。要するに喧嘩好きは喧嘩ができれば満足

誰かが泣いている声が、聞こえた。

「・・・ぱちい・・・新八い・・・」

この声は・・・神楽・・・ちゃん？

「新八い・・・どうして・・・どうして死んじゃったアルか・・・」

・・・そっか・・・僕・・・死んじゃったのか・・・

僕・・・

今も昔も銀さんの足引っ張って・・・ばかりだっ・・・

・・・バキ・・・バキバキバキッ！！！！

「ふごうっ！！死ぬ死ぬウウウウ！！！！

ってアレ！？僕生きている！？」

突然脇腹を襲った激しい痛み、新八は飛び起きた。  
飛び起きて、新八は自分が生きていることに驚いた。

体を起こし、自分の胴体に抱きついていて神楽を見て、先程の激痛は彼女の仕業であるとわかった。

「・・・て・・・、神楽ちゃん・・・一体何やってるの」

その言葉に顔を上げた神楽の瞳には、涙が見えた。  
それを見て、新八はドキツとした。

そっか、神楽ちゃん・・・僕が死んだと思って・・・

心配をかけて申し訳ない、という気持ちと  
心配してくれたのだ、という嬉しさに新八の顔はくしゃくしゃにな  
っていた。

「ごめんね、かぐ・・・」

「オイ新ハイ。お前とことん駄目な奴アルな」

「・・・・・・・・え？どういうこと？」

「ワタシ、『恋人が死んだごっこ』してたアル。  
今、ヒロインが涙に明け暮れる、一番良いシーンだったアル」

「・・・・・・・・・・は？」

「ちなみにアンタを殺したのは俺でさあ」

「・・・・・・・・・・沖田さん・・・？」

「それで今からコイツに復讐するところだったアル」

「メガネは生き返ったが・・・まあ最初からメガネはどーでもいい。

来いよチャイナ。返り討ちにしてやらあ」

「うるさいサド！言われなくても殺してやるアルっ！」

それだけ叫ぶと、神楽は沖田に飛び掛かった。

互いに殴り合っているその光景を見ても、新八は止める気にはならなかった。

【29。要するに喧嘩好きは喧嘩ができれば満足】

「・・・て、そう言えば・・・ここにどこ!?」

あきれて二人の取っ組み合いを眺めていた新八であったが、ふと、自分の身に起きたことを思い出した。

神楽や沖田が当たり前のように喧嘩しているこの場所・・・それは、

「牢屋だ」

後ろから、冷めた声が聞こえてきた。

新八が振り返ると、そこには、壁に寄りかかり、仏頂面で腕を組ん

でいる土方がいた。

横には、近藤もいる。

二人とも、丸腰である。刀は取り上げられたのだろう。

「牢屋……ですって……？」

そうつぶやくと、新八は辺りを見渡した。

辺りは薄暗いが、次第に目も慣れてきたようだ。

新八も、自分の置かれている状況がようやく分かり始めた。

窓のない部屋に鉄格子がかかっている。

鉄格子の向こうを見れば、まだ他にもいくつか牢屋があるようで、鉄格子のついた同じような部屋が並んでいた。

「ああ。幕府軍に捕まったんだよ、俺たちは」

土方が苛々した口調で続けた。

それを聞いた新八は立ち上がると鉄格子に近づき、他の部屋の様子を覗き見た。

他の部屋には人影が見えない。

ふと廊下を見れば、突き当たりに、上り階段が見えた。

その階段の横には、年老いた男が一人、椅子に座りながら寝ている。その男の腰には、鍵の束がぶら下がっていた。

牢屋の番人らしい。

一通り見た新八は、自分の探しているものがここには無いと分かった。

「あの……銀さんは……銀さんはいないんですか？  
一緒に捕まらなかったんですか？」

そう、銀時がどこにもいないのだ。  
もし新八が気を失ったあとに皆捕まったのであれば、銀時もどこかにいるはずである。

しかし、ここには銀時の姿はない。

自分たちを置いて、銀時だけ逃げるはずなどない。

胸がどこかざわつくのを感じながら、新八は土方の答えを待った。

だが、土方は口をきつく閉じ、黙って新八を見ているだけであつた。  
代わりに、その横にいた近藤が、慌てたように口を開く。

「途中まで一緒だったんだが……俺たちとは別のところへ連れていかれたようだ。」

……なに、すぐに戻ってくるだろうよ」

そう捲<sup>まく</sup>し立てる近藤に、言い知れぬ不安を感じた新八であつたが



「・・・・・・・・・・そう・・・・ですか」

飲み込むように、そう返事をした。

その時であつた。

階段を降りてくる足音が聞こえた。

それが耳に入つたのか、取っ組み合いをしていた神楽も沖田も、動きを止めた。

皆、鉄格子の向こう側、入り口に耳を傾ける。

どうやら、役人のようだ。

何人いるのかは分からぬが、会話をしながら階段を降りてきている。

「・・・・・・・・さすがにありややりすぎなんじゃねえの？  
そりゃあ、何も聞き出せないんじゃないや立場上不味いのはわかんだけだよ・・・・・・・・」

「あの人ア出世したくて仕方ないのさ」

「にしてもやりすぎだ。

あいつを磔はりつけにでもすれば、高杉も桂も釣れるだろ。それ以上やる必要があるか？」

「確実に捕まえたいんだろ」

「だとしても、死しんじまつたら元も子もねえよ。

・・・ってオイ、じーさんまた寝てんのかよ。オイ起きろ！じーさん！..」

「.....ふああ？なんですと？門を開ける？」

「ちげーよ目を開けろって言ってんだ！」

「オイオイ、大丈夫か？連中逃げてねーだろーな」

その会話のあと、二人の侍が新八たちのいる牢の前に現れた。

「お、全員目を醒ましたようだな」

「お前らにも、あとで話を聞くからな」

「.....ここから」

「あ？」

「出せよ」アアアアア「！」

「えええっ！！？」

神楽と沖田が同じタイミングで叫ぶと、鉄格子越しに二人の侍に蹴りを入れた。

普通の人間なら、鉄格子を蹴った足が痛くなるだけである。

・ ・ ・ ・ ・ 普通の、人間なら。

メキメキメキメキバキバコッ！！！！！！！！！！！！！！！！

見事にひしやげた鉄格子ごと、神楽と沖田の蹴りが二人の侍に直撃した。

「ギヤアアアアアアアア！！！！」

牢には、もう鉄格子など何もなかった。  
鍵も何も使わずに、文字通り牢を破ったのだ。

「えええ！！？眠りこけてる門番とか、その門番の腰についてる鍵とか、そーゆー伏線一切無視イイイイイ！！！！？」

「新ハイ。お前みたいにアイテムとかシチュエーションとかにこだわる奴ほど目の前の突破口に気付かないアル。  
だからいつまで経っても童貞アル」

「なんでえメガネ。筆下ろしはまだなのかア？イイトコ教えてやる  
ーかい？」

「お前ら黙れえええええ！！！！」

「おいガキ共。人が来る前にさっさと行くぜ」

呆れた顔の土方が、牢を出ていった。  
二人の侍は鉄格子の下敷きになって、のびている。  
すでに近藤は、門番のところまで歩いていた。

「おい、じーさん。俺たちの刀を返してくれ。そうすりゃ何もしな  
いから」

「んあああ？魚ア？わしの魚はわしのもんじゃあああ！！！！」

「魚じゃなくて刀あああ！！じーさん少しは話聞いて！！！！」

「近藤さん、刀ここにある」

壁に架かっている刀を見つけた土方は、門番と睨み合っている近藤  
に刀を放った。

同じように、土方は取り上げられていた傘を神楽に放った。  
受け取った神楽が、大切そうにその傘を背にくくりつける。  
それを、ぼんやりと新八は見ていた。

「土方さん・・・」

「なんだ」

「さっきの役人たちが話していたことって・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だいたい、想像はつく」

新八は土方を見た。

土方は、とても冷静で、落ち着いていた。

近藤も真面目な表情であつた。

さっきまでふざけていた沖田も、今では神妙な表情をしている。

神楽は黙つたまま、銀時の傘をしっかりとくくりつけていた。

新八は、手のひらに浮き出る汗を握り潰した。

「行くぞ」

土方の言葉が、重く響いた。

30。寝起きの言動ってたまに意味が分からないときがあるよね（前書き）

短いです。

あれ？よむ順番間違えたっけ？という錯覚に陥るかもしれません・  
・スミマセン！

30。寝起きの言動ってたまに意味が分からないときがあるよね

地面が、冷たい。

全身を襲う痛みは、すでに感覚を麻痺させていた。

なんとなく殴られていることは分かるのだが、身体が痛みを感じぬ。そんな具合であった。

地面が冷たいのか、それとも己の身体が冷たいのか。そのどちらなのかさえも、もう分からぬ。

これが、死か。

思っていたよりも時間のかかるもんだな、と頭のどこかでぼんやりと思った。

目の前で誰かの命が消えるときはいつだって一瞬だったのに。

これが、俺の死か。



そのとき。

耳元で、誰かが叫んだ。

何かを言っている。

それは分かるのだが、その声を言葉として聞き取ることができない。  
ただの音として、頭の中を鈍く通りすぎていく。

せめて音の出所を確かめようと、目を開ける。

しかし、視界がぼやけている。

もはや何も見えないのに等しかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

今度ははっきりと、声が聞こえた。

・・・うね

・・・うのね・・・

・  
・  
・  
せん  
・  
・  
・  
せい  
・  
・  
・  
・  
?

『  
銀時  
』

力を振り絞り、声のする方に手を伸ばした。

しかし、霞のかかった頭でぼんやりと彼は考えた。

・・・アレ・・・俺、縛られてなかったけ・・・なんで、手が動  
くんだ・・・？

ふと、伸びる手が止まる。

つてこたア・・・やっぱりここは地獄かなにか・・・

・・・そんなとこ地獄に、先生がいるわきゃねえ・・・

伸ばした手から、力が抜ける。

だらんと、力なく下ろした腕が地面にぶつかる、その時。

何か暖かいものが、彼の手を掴んだ。

「・・・・・・？」

血でにじみ、はっきりしない視界を、  
うつすらと霧のかかった向こう側を見るかのように、彼は目を凝らした。

・・・なんだ・・・

ぼんやりと視界にかかっていた霧が、晴れていく。

そこに見えたのは、桂でも高杉でも、松陽先生でもなかった。

そこにいたのは、涙で顔をくしゃくしゃにした、二人の子供たち。

・・・なアんだ・・・お前らか・・・

うつすらと、口元に笑みが浮かんでいた。

31。暑いからって涼しくなるために心霊話するのは霊に失礼だと思う

「はぐっ！」

「ぎゃああつ！」

「皆邪魔アルっ！どけどけどけえっ！！」

襲いかかる役人が次々になぎ倒されていった。

彼らを殴り飛ばしながら、廊下を一人の少女が突っ走っている。

その後ろを、男たちが追いかけるように走っていた。

「てめーチャイナ！お前は見つからないように動くとか、そういう考えはねーのかっ！！」

土方が、額に青筋を浮かべながら叫んだ。

「土方さん、無理です」

クソ、と叫ぶ土方の後ろに、諦めた表情の新八が続く。

「アレ？そっいゃ、総悟のヤローは？」



「牢屋を出たあたりからいなかったですよ」

「近藤さん、総悟どこに行ったか知らないか？」

そう言つて振り返ると、はるか後ろを近藤がちんたらと走っている。

「つて近藤さんん！？」

ナニそんなにのんびり走っているんだよ！」

「すまん、先に行つてくれ。」

体が重くて、うまく走れないんだ。体調が悪いのかもしれない」

「つて、近藤さん背中背中あつ！」

「ん？」

口をあんぐりと開ける新八と土方を見て、近藤は背中を振り返った。

「つて、じいさんんん！？」

「誰が地井さんじゃああああ！誰が散歩なんぞするかああああ！！」

近藤の背中には、あの呆けた門番のじいさんが乗っていた。  
そのじいさんを近藤は慌てて下ろした。  
それを、土方が冷たい目で見ていた。

「・・・というか近藤さん、自分が何かを背負ってるってことくらい気付いてくれ」

「いやあ、何かの霊が取りついたかと思って、怖くて振り返れなかったんだアハハハ！」

「わしゃレイちゃんよりアスカちゃん派じゃ！」

「アンタ詳しいな！！」

新八もあきれた表情で二人を眺めていた。

「・・・土方さん、真撰組のトップがあれでいいんですか」

「・・・それ以上言うな」

そんな悲しい会話が交わされているとは露知らず、近藤がじいさんに尋ねる。

「ところでじいさん。アンタなんでここに？」

「だって、お主らが逃げ出したら怒られるのはワシだもの」

「じいさん、俺たちを捕まえようとしたのか」

「うんにゃ。一緒に逃げようと思って」

「……………」

「じゃあ、おじいさん」

その不毛な会話に新八が口を挟んだ。

「……銀さんがいるところ、教えてもらえませんか？」

「銀さん？遠山の？」

「それは金さん！」

そうじゃなくて……その……白……夜叉です。白夜叉は、どこにいますか」

「白夜叉……じゃと？」

新八が苦しそうに吐き出した『白夜叉』という名前を聞いた途端、じいさんの表情が変わった。

「銀さん、と呼んだかのう……」

新八が最初につぶやいた『銀さん』という言葉をじいさんは口の中で繰り返した。

何度か繰り返したあと、新八たちの顔をじつくりと見た。

「お主ら・・・銀時の知り合いか何かかい？」

そう真面目な口調で言うと、厳しい表情を新八たちに向けた。それに負けじと、新八も声を張った。

「銀さんは僕の・・・僕たちの、大切な仲間ですっ！！」

そう叫んだ新八を、じいさんは静かに見ていた。わずかに、口元がゆるんだようにも見えた。

「・・・そう・・・ですか」

「・・・え・・・？おじいさん、今何て・・・？」

「じゃが」

新八の言葉を遮ってそう言うと、じいさんはにんまり笑った。

「教えられんもんは教えられん。

まったく正反対の棟だなんて、口が裂けても教えられん」

「!?!」

「チャイナ!こっちだ!」

一人で突っ走っている神楽を、土方が呼び戻した。

「じいさん、すまない」

近藤が去り際にそう礼を言つと、じいさんはなんのことやら、ととぼけた顔をしていた。

「こちらこそ」

じいさんの前を通りすぎた新八の耳に、ある言葉が入った。

「あの子をよろしく願いしますよ」

ハッ、とした新八が思わず振り返った。

見ると、もうこちらには背を向けてよろよろと歩き出していた。

丁度、折り返してきた神楽と目があつたようである。  
一言二言、言葉を交わしてから別れを告げた神楽が、新八のもとへと駆けてきた。

「おい新八イ、どうしたアルか？腹でも痛いアルか？」

立ち止まっている新八を、不思議そうな顔の神楽が見ていた。  
新八は、立ち去るじいさんの背中を見ながら、神楽に尋ねた。

「神楽ちゃん・・・今、おじいさんと何の話をしたの？」

「？」

別に大したことじゃないアル。あのじいさんが、背中の傘を見て誉めてくれたアル」

その言葉に、思わず新八は視線を神楽へと戻した。

「誉めてくれた？」

「うん。借りたものを大事にしてるなんて偉いね、って。これから  
も大切にするんだよ、って」

「借りたもの？なんでそれを・・・」

ハッ、とした新八がじいさんの方に視線を戻すと、そこにはもうじいさんの姿はなかった。

「？」

新八？どうしたアルか？」

「……いや、なんでもない」

「ホラ、さっさと行くネ」

「う、うん」

神樂が、走り出した。

少しの間、新八はじいさんのいなくなった廊下をながめていた。

しかし、そうしていても答えは見つからないし、置いていかれるだけである。

すっきりしない表情のまま、新八も走り去っていった。

### 32。引つ張るのもほどほどに

「はぐっ！」

「ぎゃああっ！」

「皆邪魔アルっ！どけどけどけどえっ！！」

襲いかかる役人が次々になぎ倒されていった。

彼らを殴り飛ばしながら、廊下を一人の少女が突っ走っている。

その後ろを、男たちが追いかけるように走っていた。

「てめーチャイナ！お前は見つからないように動くとか、そういう考えはねーのかっ！！」

土方が、額に青筋を浮かべながら叫んだ。

「土方さん、無理です。」

「……って、このやり取り前回と全く一緒オオオ！！！手エ抜くんじゃねーよ作者アア！！！」

「やめとけ、新八くん。作者に逆らうなど、愚の骨頂だぞ」  
かみさま



全裸の近藤が、走りながら新八をたしなめた。

「ってちよつとオオオ！！？なんで俺が全裸にされてるの！！？おかしーじゃん！！！！」

今の流れ、全裸にされるの完全に俺じゃないよね！！！！？？おかしいよね！！？

そんな冷たい目で見てないで何とか言ってトシイイイ！！」

「チャイナ！止まれ！！」

助けを求めた近藤を一切無視した土方が、神楽を呼び止めた。

「何アルか、マヨラー！！」

「今、その階段を一人の役人が下りていった！

牢屋つてのは、大抵陽の当たらねえ地下にあるもんなんだよ！」

その言葉に、新八も近藤も真剣な表情になる。

「もしかして、銀さんはそこに・・・！」

「可能性は、ある・・・しかし・・・」

ためらいながらも、土方は低い声で続けた。

「そこで目にするもんは、オメーらには厳しいものかも知れねえ。

・・・それでも、行くか？」

土方が、厳しい視線で子供たちを見た。

だが、新八も神楽も、正面からそれを受け止めた。

「モチロン!」「当然です!」

力強くそう答えた子供たちを見て、土方はうなずいた。

【32。引つ張るのもほどほどに】

「と言っわけで、行くアル」

そうケロツと吐き捨てると、神楽が地下へと繋がる階段を飛び降りた。

「えええ！？ちょっと待ってよ神楽ちゃん！！」

「あのバカっ！」

慌てて男たちも神楽のあとを追って階段を降りた。

地下に降りると、そこはかすかに照明がついているものの、辺りは真っ暗であった。

ましてや、明るいところから急に暗い地下へ降りてきた新八たちにとって、その暗闇では目など全く役には立たなかった。

それでも、新八たちがかすかに見える神楽の背中を見つけ、駆け寄った。

よく見れば、足元には一人の役人が倒れていた。

しかし、それには全く興味を払わず、神楽は目の前の闇を見つめ、構えの姿勢をとっていた。

（かぐ・・・）

新八が名を呼び掛けて、すぐさま口を塞いだ。  
神楽が、真剣な表情で、目の前の闇を睨み付けている。額には、汗も見られた。

（・・・！）

さすがの新八も辺りを覆う緊張感に、背中に冷たいものが流れるのを感じた。

（誰か、いる・・・！）

ごくりと、唾を呑み込んだ新八の横を、刀を抜いた土方と近藤が、静かに通り、神楽の前に立った。

彼らも、この暗闇に潜む相手が只者ではないことはとうに分かっていた。

かちやと、近藤も土方も、刀を握りしめた。

その時、ふいに暗闇の向こうから、声がした。

「おい、脱獄者」

なぜ相手は自分達が牢を破ってきたと知っているのか、それだけでも不気味である。

それに加え、重く、それでいて余裕さえ感じる声。暗闇で表情はおろか、背格好すら見えなかったが、相手は確実に笑っている。

それだけはわかった。  
だからこそ、それがますます彼らの緊張を高めた。

「貴様ら、この状況で勝てると思っているのか」

誰も、何も答えなかった。

敵うはずがない。

そう思いながらも、闇のなかで、相手の動きを探ることに全神経を使っていた。

分が悪い、と土方も近藤も思った。

おそらく、相手はずっとこの暗闇にいた人間。

この闇など、相手にとって何の不利にもならない。  
もしかしたら、自分達の姿は相手には丸見えなのかもしれない。

ならば。

・・・例えば自分達は刺し違えてでも、子供たちは逃がす・・・

それが、俺たちにできること・・・

じりじりと距離を詰めながら、二人はそんなことを思っていた。

(・・・っ?!)

近藤さん、土方さん・・・!?)

その二人の異変に新八が気付いた時であった。

「止まれ」

冷たい声が、闇に響いた。

「・・・どうしても、やるのか・・・」

「?」

さつきとは全く違う、少し諦めたような声であった。

「貴様らの目的は白夜叉だな？」

「・・・・・・・・」

「少しは返事をしたまえ。」

それとも、返事もできぬほどビビってるのかな？」

「誰がビビるかヨ！」

ムダ口叩いてないでさっさとあの馬鹿返すヨロシ」

「ちよつ神楽ちゃ・・・・」

まんまと挑発に乗った神楽に、土方も近藤も焦りを感じた。

挑発に乗ったこと自体はこの際、どうでもいい。

だが、返事をしたことで相手が子供だと・・・女だと向こうに伝えることが問題であった。

すぐさま、土方が口を挟んだ。

「そうだ、我々の目的は白夜叉だ」

「彼を返してもらおう」

畳み掛けるように、近藤も後を続けた。

その言葉に怒りを感じたのか、呆れたのか。  
しばらくの間、相手は黙っていた。  
しかし、その沈黙のあと、思いもよらぬ言葉が返ってきた。

「好きにするがいい」

「!?!」

「ああ、そうだ・・・  
ひとつだけ、忠告しておこう」

ヒュッ、と何かが宙を裂く音が聞こえた。

「奴にぶつた斬られないよう気を付けるんだな」

「っ！臥せろっ！！」

「!?!」

ガッン!!!!

何かが、新八の額にぶつかった。  
すぐさま、激しい痛みが頭を襲った。  
と、同時に冷たいものが額から流れ出るのを感じた。



「これ・・・血・・・？」

「新ハイ！！」「メガネ！！」

皆が、後ろを振り返った。

新八が、額を押さえ、顔を真っ青にしている。

「ぼく・・・」

ふっ、と新八は意識を失って倒れた。

「おい、メガネ・・・っ！！」

新八に気をとられてた一瞬、土方は何者かが横を通りすぎる気配を感じた。

土方はすぐさま、闇に向かいビュン、と刀を降り下ろした。しかし、その刀は何も捉えなかった。

そのあとに、階段を駆け上がる姿が一瞬だけ目に写った。それで終わりだった。

「新八！しっかりするアル！新ハイイイイ！！」

皆が、倒れ込んだ新八を揺さぶっていた。  
しかし、新八は全く動かなかった。

33。だから引つ張るのもいい加減にきなさいってば（前書き）

時間軸は少し戻ります。

さんざん匂わせてますが、少し、拷問要素入ります。でも、本当に匂わせるだけなのでご安心下さいませ。

あとがきまで続きます。

33。だから引つ張るのもいい加減にしなさいってば

ここは、暗く湿った、とある牢。

地下に作られ、普段日の当たらぬその牢は、とある目的のために、特別に存在した。

罪人から、必要な情報を聞き出すための牢。  
つまり、拷問部屋であつた。

そのこの牢の壁には、罪人から情報を得る際に使用するための道具がいくつも掛けられていた。  
その道具は使い古されたもののようで、薄黒く汚れ、ひどく鉄臭い。よく見れば、部屋の片隅に、使用したばかりなのか、赤黒い液体が着いたものがいくつか転がっていた。

それを、一人の男が冷たい目で見ていた。

「まだ話す気にはならんかね」

そう吐き捨てると、壁に掛かっている、まだ使われていない道具を右手でさわり始めた。

「ここにあるものはどれも、簡単に君の手足の肉を裂き、骨を砕くことのできる道具ばかりだ。

もしこれを使えば、君の手足は一生使い物にならんだろうな」

その男は、一つ一つ道具を手にとっては、嬉しそうに眺めた。

よく、手入れされている。

にいと、唇をつり上げた。

「自慢できることじゃないが、私はこの仕事も長くてね。どのくらいやれば死ぬのか、その加減には詳しいんだよ」

かちや、と道具を元に戻した。

「つまり、死よりも辛い苦しみをいかに長く与えることができるか。私はその加減をよく知っている」

そう言うと、くるりと大袈裟に振り返った。

振り返ると、反対側の壁を見た。

その壁には、鉄の鎖が二本、取り付けられていた。

その鎖の先に、痛々しく、赤く腫れた手が繋がれていた。

「どれほどの痛みか・・・君には想像もできんだろうな」

少し憐れんだ表情で、その鎖に繋がれた手の先を見下ろした。

そこには、痣と血に覆われた一人の男がいた。

その男の髪は真っ赤な血で染まり、もとの髪の色が分からぬほどであった。

顔も腫れ上がり、片方の目は開かぬほどであった。

気を失っているのか、開くだろうと思われる方の目は固く閉じられている。

「・・・私には理解できんよ」

その拷問吏は、静かに男に近寄ると、膝をついた。  
顔を覗き込むと、優しい声で語りかけた。

「鬼と呼ばれた君が・・・」

その君が、こんなに傷ついてまで守るに値するものかね？

その、桂や高杉という連中は・・・」

桂、高杉という名前に、ずっと無反応だった男がわずかに動いた。  
拷問吏は、当然それを見逃さなかった。

「君は連中のことを仲間だと思っているのかな？」

ククク、と嫌らしく笑うと、はつきりと彼の名を呼んだ。

「可哀想に・・・惨めな白夜叉よ」

白夜叉と呼ばれた男が、かすかに目を開けた。

その目は、彼の流れ出る血よりも深い紅色をしていた。

「向こうはそうは思っていないのにな・・・」

その言葉に、紅い瞳が食いついた。

「その目・・・認めたくはないのかな。まあ気持ちは分かるがね。しかし、彼らは君のことなど何とも思っていない。」

そうだろうか？

その証拠に、連中は全く現れない。お前を助けにも来ない。

違うか？」

拷問吏は、勝ち誇ったかのように口の端をつり上げて笑った。

それを黙って紅い瞳が見つめていたが、ふと、痛々しそうに唇が動いた。

「……ってねえ……」

かすれた声に、拷問吏が嬉しそうに聞き返す。

「ん？何だって？」

「……わかって……ねえよ……オメーは……」

「分かっているのは、君の方だと思うが？白夜叉よ」

「フン……」

「……」

白夜叉の口許が、かすかに緩んだ。

「……もし……あいつらが来たら……俺ア……間違いなく……あいつらをたたっ斬ってやるぜ」

そう言うと、白夜叉は血の流れ出る口許を、にっとなつり上げて見せた。



一方、拷問吏の顔からは先程の笑みは消え去っていた。

少しの間を置いて、ふう、と残念そうに立ち上がると同時に、素早い手刀で白夜叉の首根を強く打った。

うぐ、と小さな呻き声をあげたあと、白夜叉の体から力が抜けていった。

気を失った白夜叉をみて、拷問吏は再びため息をついた。

「まだ粘るのか・・・全く、先が見えん。

こんなのに一晩で吐かせるなどと・・・松山め、無理もいいとこだ」

寸前までの緊張感はどこへ行ったのか、やれやれと愚痴をこぼしながら拷問吏は部屋を出た。

出ると、廊下の脇に置かれていた水瓶からひしゃくで水をすくい、ガブガブとそれを飲み干した。

と、その時。

なんとなく辺りが騒がしいことに気が付いた。

「なんだ？本当に桂や高杉でも攻めてきたのか？」

そんなことを呟いた時であった。

一人の役人が、牢へつながる階段をバタバタと下りてきた。

「い、い、い、石川どのっ！大変でござるッ！！！！  
って、暗くて何も見えん！石川どの、ここにおられるか！？」

急に暗い地下に降りてきたため、彼の目は全く見えなかった。  
それもそのはず。

ここは、地下で陽が当たらぬというだけでなく、蝋燭が一つも置かれていなかった。

かすかに、拷問部屋からの光が漏れてくるだけであった。

「ここだ。

全く、騒がしい奴だ。さては金丸だな」

うんざりとした様子で、拷問吏は金丸の方に視線をやった。

と言っても、その彼にもわずかに影が見えるだけで、はっきりと顔を見た訳ではなかった。

「おお、そこにおられたか、石川どの。

それにしても、全く、何故こんなにここは暗いのだ」

「うるさい、これも演出の一つなんだ。

肝のちいせえ野郎は、うすっ暗い地下のなかで拷問部屋を見ただけでゲロっちまうもんなんだよ」

それなら俺も楽でいいんだが・・・とのんきに続ける拷問吏の言葉を、金丸が慌てて遮った。

「って、石川どのっ！」

拙者、世間話をしにきたわけではないのでござるっ！！」

「ああ、そうだった。

一体どうしたってんだ？

桂や高杉でも攻めてきたか？松山の首でも獲られたか？」

「そうではなく・・・って、石川どのっ！！

君主の名を呼び捨てにするなど何度も言っておるだろうっ！」

「うるせえ、あんなに人をこき使う奴なんざ呼び捨てで十分。それよりも、何をそんなに慌ててるんだ」

「そうそうそれでござる！

大変でござる！

白夜叉と一緒に捕まえた異形の者たちが逃げ出したの・・・ぎゃあっ！！」

「・・・！」

最後まで言い終わらぬうちに、その役人は白目を向いて前に倒れ込んだ。

はつきりと見えたわけではなかったが、ただならぬものを感じた拷問吏は素早く腰に手をやった。

が、ふと、自身が丸腰であることを思い出した。

まずい、と思ったがそれも一瞬であった。

この仕事、いかにハツタリをかませるかがミソよ

そう開き直ると、彼は手にしていたひしゃくを相手に向けて、いかにも刀を持っているかのように構えた。

ここは地下である。

昼間であっても陽は射し込まず、照明も設置されていない。ましてや、ここは言うなれば彼のフィールドであった。

暗闇は敵にとって不利にはなるものの、彼にはそう影響を与えるものではなかった。

そんな余裕があつたからか。

その薄暗がりのなか、何者が攻めてきたのか確かめるため、彼はじつくりと闇に目を凝らした。

・・・一人ではないな・・・何人か、いる・・・

暗闇であるから、はつきりとした姿形は分らない。何人いるのかさえ分らない。

しかし、漂う気配が、只者ではないと彼に伝えていた。

はあ、こいつらが白夜叉と共に捕まつた連中だな・・・

白夜叉の仲間というだけあつて一筋縄ではいかなさそうだ、と彼は

思った。

連中の目がこの暗闇に慣れる前にどうにかせねば。

「おい、脱獄者」

先手を打たねば、と考えた拷問吏は、姿の見えぬ相手に声をかけた。その場に緊張した空気がはりつめるのを、拷問吏は感じた。拷問吏は、嬉しそうに口の端をつり上げた。

「貴様ら、この状況で勝てると思っているのか」

彼は自分が有利な立場に立っていることを知っていた。・・・たとえば、自分の武器がひしゃくであったとしても。

相手は、自分たちの置かれている状況が圧倒的に不利だということを感じている。

それを彼は感じ取っていた。いや、確信していた。

そう、思っていた。

「・・・・・・？」

ふと、彼は気を引き締めた。

向こうの空気が、明らかに変わったのだ。

この状況を畏れてはいるが、死は畏れていない。

そんな緊張感が、相手から伝わってきた。

・・・連中・・・刺し違えてでも、ここを通る気だな・・・

「止まれ」

思わず、彼は口を開いた。

「・・・どうしても、やるのか・・・」

つまらなそうに彼は呟いた。

「貴様らの目的は白夜叉だな？」

斬り込まれないように、彼は言葉を続けた。

しかし、向こうから返事はない。

彼は、少し焦りを感じた。

だが、それを相手に気取られては終わりである。

彼は、嘲るように言葉を投げた。

「少しは返事をしたまえ。

それとも、返事もできぬほどビビってるのかな？」

「誰がビビるかヨ！」

ムダ口叩いてないでさっさとあの馬鹿返すヨロシ」

「ちよつ神樂ちゃ・・・」

思いの外、威勢のいい返事が返ってきたことに彼は驚いた。そして、思った以上に声が若いこと、高いことに驚いた。

・・・相手は女・・・いや、子供、かな・・・

もしかして、この相手ならば丸腰でもどうにかなるかもしれん。そう思った時であった。

「そうだ、我々の目的は白夜叉だ」

「彼を返してもらおう」

間髪入れず、男の低い声が響いた。

この声からは強い決意を感じ取れた。

自分の身体で敵の刃を止めてでも、進まんとする意志が。

・・・先程の気配は、こいつらのものだな・・・

男たちの声で、彼は再び冷静さを取り戻した。

・・・これ以上のハツタリは、無駄か・・・

拷問吏は、静かにため息をついた。

「好きにするがいい」

あっさりと彼は言った。

その言葉に相手が驚いているのが、しっかりと伝わってきた。

面白い連中だ、と拷問吏は思った。

白夜叉、か・・・

戦場で生まれた、ただの哀れな鬼かと思っていたが・・・  
なかなか面白い仲間を持つてるもんだ

そんなことをふと思いながら、拷問吏は白夜叉の言葉を思い出した。



「ああ、そうだ・・・

ひとつだけ、忠告しておこう」

これ以上の長話は危険である。

彼は、手にしていたひしゃくを見つめた。

「奴にぶつた斬られないよう気を付けるんだな」

彼は、手にしていたひしゃくを、相手に向かって思いっきり投げた。  
投げると同時に、駆け出した。

「！！！！」

相手が動じているのが、面白いほどよく分かる。

誰かの名前を呼ぶ声やら誰かが倒れ込む音やら、そんな騒がしい音が聞こえる横を、彼は駆け抜けた。

その時、ビュン、と背中の後ろで風が走るのを感じた。

誰かが、自分めがけて刀を降り下ろしたらしい。

あぶねえ・・・やっぱりまともに相手にしなくて良かったぜ

振り返らずに、そのまま彼は階段を駆け上がった。

・・・まあ、あれがひしゃくだと分かったときの連中の顔が、見てみたかったもんだが

「・・・ちえ、つまんねえな」

白夜叉を渡すはめになったことよりも、それが見れないことの方が何より残念だ、と拷問吏は逃げながら思った。

33。だから引つ張るのもいい加減にきなさいってば（後書き）

「新ハイイイ！！！しつかりするアル！目を醒ますアル！！！」

「新八くん！返事をしろ！頼むから、返事をしてくれ！」

君に何かあつたら・・・俺は・・・お妙さんに何て言えばいいんだ  
！！」

「メガネ！おいメガネ！！！」

皆が、新八を取り囲み、必死になって起こそうとしていた。  
それでも新八は一向に目を醒ます気配がない。

「くそ・・・・・・・・！！」

土方が、悔しそくに拳を床に叩きつけた。

その時であつた。

「・・・・・・・・・・？」

何か、手に木の棒のようなものが当たったのを感じた。

彼は、何とはなしにそれを持ち上げると、手探りで形をなぞった。

「・・・・・・・・・・」

暗闇のなかで、探ったものの全体像をつかんだ彼は、なんだか馬鹿らしくなってきた。

ふと、冷静になり、自分のポケットを探り始めた。

「マヨラ・・・・・・・・？何を・・・・・・・・？」

「トシ・・・・・・・・？」

「いや・・・・・・・・ちょっとな」

ゴソゴソと、土方は自分のポケットからライターを取り出すと、火をつけた。

辺りが、急に明るくなる。

そこでようやく、神楽も、近藤も、何が起きたのか把握した。

そう、目を回している新八の側には落ちていたのは、ひしゃくであった。

「・・・・・・・・・・で、オイ・・・」

その明かりのなかで、皆、同じように突っ込まざるを得なかった。

「ひしゃくかよオオオオオ！！！！」

「ふざけんなメガネ！心配かけさせやがってヨー！」

「・・・・・・・・暗闇だったんだ、まあ刀を投げられたと勘違いしても仕方ねえ・・・」

そうフオローする土方の顔も、呆れ果てていた。

「だとしても情けなさすぎるアル！！このダメメガネが！」

「だから新八くん、作者に楯突くなとあれほと言ったのに・・・」

「・・・ってオイ。じゃあ何か？このメガネをからかう為だけに二話も使ったってのか！？」

「いい加減話進めろヨ作者!!」

.....おあとがよろしいようで。

「.....」  
「.....」  
「.....」

34。CMで引っ張られてCM明けでも引っ張られるとつんざりしてつい

いつの間にか月がきれいに見える季節になりましたね

34。CMで引っ張られてCM明けでも引っ張られるとっんぱりしてっいっい

「こんなの・・・嘘だ・・・」

「・・・銀・・・ちゃん？」

冷たく、薄暗い地下室。

肺の奥まで痛く染み渡るような冷たい空気の中に、嫌でも感じる血の臭い。

そんな部屋の空気の中、子どもたちのかすかな声が響き渡っている。

暗い壁には、白夜叉と呼ばれた一人の男が見るも無惨な姿で、冷たい鎖に繋がれていた。

血。痣。痣。血。

彼を覆っているものは、それがすべてだった。

「銀ちゃん!」



部屋に入るなりその光景を目にした子どもたちは、近藤たちの制止も聞かず、すぐさま変わり果てた銀時のもとへと駆け寄った。

「銀ちゃん！嫌アル！銀ちゃアん！！」

子どもたちが目に一杯の涙を浮かべ、銀時の名を何度も繰り返した。しかし、繰り返すだけで、手を触れることはできなかった。あまりにも痛々しい姿に、触れるのが躊躇われたのだ。

変わり果てた銀時を目の前に、へなへなと座り込んだ子どもたちの横に、近藤と土方が並んだ。

いつにもなく真剣な表情の近藤が、丁寧な手つきで銀時に触れる。

「大丈夫だ。気を失ってるだけだ」

そう言うが、子どもたちの表情は変わらない。それを見て、近藤は土方に目配せをした。

「……………トシ」

「おっ」

呼ばれた土方が、おもむろに刀を抜いた。  
抜いた刀を、銀時の手を繋ぐ鎖に叩きつける。  
パキン、と乾いた音を立てて鎖は断ち切られた。

銀時の体が、ゆっくりと倒れ込む。  
それを、近藤と慌てた子どもたちが恐る恐る受け止め、床に寝かせた。

寝かせた銀時を、皆が取り囲む形であった。  
目を閉じたまま、起きる様子のない銀時を、子どもたちが神妙な面持ちで見下ろしている。

自分の怪力が、銀時を痛め付けてしまいかもしれない。

神楽は、こんなときに普通の女の子でない自分を呪った。  
どうすればいいのか、全く分からなかった。

しかし、新八もそれは同じだった。

あのとき、と彼は頭のなかで何度も何度も同じことを繰り返し考えた。  
た。

あのとき、僕が変なことを言わなければ。  
あのとき、僕が銀さんを足止めしなければ。  
あのとき、僕が・・・僕たちがいなければ。

銀さんは捕まらなかったはずだ。  
こんなことにはならなかったはずだ。

こんな・・・こんな辛い想いをさせなくてよかったはずだ。

考えても考えても答えの出ぬことを、ぐるぐると頭のなかで繰り返していた。

涙を浮かべ黙り込む子どもたちに、土方はやれやれとため息をついた。

「覚悟をしろ、と言っただろ」

「トシ！」

「俺たちは毎日ヘラヘラ生きてるコイツしか見たことねえが、コイツは、ここじゃあ毎日命張って生きてるんだ。

これくらいのこと、コイツだって覚悟の上だったはず」

子どもたちが、真っ赤にした目を土方に向けた。

「お前たちは、コイツの覚悟を甘く見ていたってことだ。

ピーピー泣いてる暇があったら、さっさとここから逃げるぞ」

そう言うと、カチン、と刀を鞘に収めた。

ひどく分かりにくかったが、土方は土方なりに子どもたちを慰めたつもりなのだろう。

なんとなくそれが分かった子どもたちは、互いに顔を見合わせた。

「・・・新八イ。お前、ひどい顔アルな」

「神楽ちゃんだって。文面じゃ分からないけど、鼻水だか涙だか分からない水で顔グシャグシャだよ」

「新八！乙女に向かって吐くセリフじゃないネ。だからモテないネ。まだ童貞ネ！」

「安心しろ新八くん！未来の兄が彼女を紹介してあげよう」

「アンタら黙れエエエエ！！！！！」

「！」

子どもたちがギャアギャアと騒ぎ出したことで、部屋が急にうるさくなった。

その騒ぎに気付いたのか、銀時がかすかに動いた。

「銀さん！？」

「銀ちゃん！！」

その言葉に、銀時の目が、ゆっくりと開く。

「銀ちゃん！見えるアルか！？」

子どもたちの目に、再び涙が浮かぶ。

しかし、それは先ほどの涙とは全く違うものであった。

「銀さん！聞こえますか！？銀さん！」

銀時の視線の焦点が、まだ定まらない。

口を動かしていたが、何とつぶやいたのかは分からなかった。

「銀ちゃん・・・？」

「万事屋・・・？」

銀時が、力なく、空に向かつて手を伸ばしている。  
まるで、何かをつかもうとしているようであった。

「銀さん？どうしたんですか？」

「幻を見てるのかもしれないな」

土方がそうポツリと言うと、銀時の手が、ピタリと止まった。何かをつかもうとしたその手から、あきらめたように力が抜けていく。

「銀ちゃん！」

だらんと力が抜け、下りた腕を神楽がしっかりと握りしめた。手を握られ、銀時は初めて辺りに人がいることに気付いたようだった。しばらく宙を見ていたが、ようやく、神楽たちに焦点が合った。

「銀ちゃん！」

「銀さん！」

彼らが目に映り、驚いたのか。一瞬、動きが止まったあと。ふと、銀時の口元がゆるんだ。見覚えのある、いつもの、にやけた口元。

「……っせーよ、おめーら……」

今・・・何時だと思ってんだ・・・コノヤロー・・・」

子どもたちの顔に、いつもの笑顔が戻っていた。

35。 仲のいい奴との待ち合わせほどなあなあになるものはない（前書き）

あとがきまで本編続きます。



### 35. 仲のいい奴との待ち合わせほどなあなあになるものはない

「残念ながら、のんびり感動の再会を味わってる暇はねえぞ。さっきの野郎が仲間つれて引き返してくるかもしれねえしな」

まだ意識のはつきりしない銀時の傷を、子どもたちが持ち合わせの手拭いで覆っていた。

その作業が一通り済んだあと、土方が立ち上がった。

「問題はこれからどう逃げ出すかな」

土方が子どもたちをみた。

神楽も新八も、壁に掛けられていた手頃な武器を手になっている。

新八の表情が、緊張していた。

負った怪我のため、意識が朦朧としている銀時が自分の足で逃げるのは不可能である。

結果として、近藤が背負うことになったのだ。

近藤が銀時を背負う以上、道を開くのは土方、新八、神楽しかないのだ。

「いいか。万事屋があんな調子だ。戦闘はなるべく避けるぞ」

「は、はい！」

普段なら、

さすがヘタレアル帰ってマヨでもすすってるヨロシなどと茶化したであろう神楽も、今回ばかりは素直に土方の意見にうなずいた。

これ以上、銀時を辛い目には合わせられない。

神楽も、同じ気持ちであつたのだ。

土方が刀を抜くと、皆を一通り眺めた。その後、何も言わずに部屋を出た。

そのあとに、黙って子供たちが続く。

暗い廊下を抜け、光が差し込む階段を土方がゆっくりと、様子を伺いながら登っていった。

それを見て、ふと近藤が声をあげた。

「そーいえば総悟の姿が見えんが」

「今更ア！？」

「沖田さんなら、牢屋出た辺りからいなかったですよ・・・」

「そうだったのか。全く気がつかなかったな。」

まあ総悟のことだ。大人しく隠れているはずなどあるまい。そのうち見つかるだろう」

「近藤さん、いろいろと問題発言なんだけど。てかその理屈でいくと、俺たちと合流した時、下手したら俺たちも見つかるんだけど」

ブツブツ言いながらも、土方が地下階段から顔を出し、周囲を伺った。

人が誰もいないのを確認すると、近藤たちに合図を送る。その合図で、皆が地下階段から上がってきた。

「なんか・・・怖いぐらい静かですね」

「・・・様子が変だな」

先程までさんざん侍を蹴散らしてきたのに、今では人っ子一人いない。

畏かと思えるほど、辺りは静かであった。

無気味なものを感じながらも、土方が廊下の先に神経を払いながら進んでいた。

そのときだった。

「!」

ドゴオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「おおっっ!!?」

突然、激しい爆風が先頭を歩いていた土方を襲った。

「トシっ!」「土方さんっ!」「マヨラ!」

バラバラと、直撃を受けた廊下の壁が崩れている。

その煙のなかで、ゴソゴソと人影が動いているのが新八たちにも見えた。

間一髪のところでは避けた土方である。

「トシ!」

「危ねえ……油断し……」

「なあーんでえつまらねえ。空気読んでそこは当たれよオ土方ア」

その憎たらしい口調に、土方の表情も一瞬止まる。

目を凝らせば煙の向こう側に、見覚えのある人影が見えた。

「・・・最悪ですね。今ので確実にここに人が集まりますよ・・・  
どーしてくれるんですか近藤さん」

「おいゴリラア。部下のしつけくらいキチンとしておくアル。一般  
市民が危険にさらされるアル」

「いや知らないからね？悪いの俺じゃないからね！？  
ねえ、悪いの俺じゃないよねトシイイイ！！？」

そんな近藤の悲痛な叫びを無視し、キレた土方が叫んだ。

「テメー・・・いきなりナニしやがる総悟オ！！！」

煙の向こう側から姿を現したのは、もちろん沖田その人であった。

「ナニって見ての通りですが？」

どこから調達したのか、やや使い勝手の悪そうなバズーカを肩に乗  
せながら、しれつと言いつつ沖田。

喧嘩をしている暇はないと思いながらも、ついつい土方は抑えられ  
なかった。

「総悟テメーふざけんなよ！

万事屋が負傷しているから、なるべく事を起こさずに逃げようとし

てたのを・・・！」

「旦那が・・・？」

その言葉で、思い出したかのように沖田は銀時の姿を探した。

近藤の背に負われているものが銀時だと気付くのにそう時間はかからなかった。

いくらか想像していたが、思った以上に深刻な様子に、これ以上ふざける気もなくしたのだろう。

冷めたような表情で、つまらなそうに沖田は土方に視線を戻した。

「アンタの言いたいことは分かってまさア。

だからってコソコソ逃げるのは俺の趣味じゃねえ」

「沖田さん！」

「人の話は最後まで聞くもんだぜイ、メガネ。

で、問題だ。

今、ここで派手にブツ放したのに一人も来ねえのはなぜだと思いやす？」

「？」

「総悟・・・お前、まさか・・・」

表情が固まる土方と近藤を見て、沖田がにやりと嬉しそうに笑った。

「この火薬庫の導線という導線に火をつけてやりました。  
ここが吹き飛ぶのも時間の問題でさア」

誇らしげに言う沖田の顔を、皆が口をあんどりと開けたまま見つめた。

「……ってことは……」

「」「逃げ遅れて一番危ないのは俺たちじゃねーか!!!!!!!!!!!!!!  
!」「」

35. 仲のいい奴との待ち合わせほどなあなあになるものはない（後書き）

必死の思いで一行が屋敷を抜け出した直後、屋敷は派手に吹き飛んだ。

まさに命からがらだったと、皆（一人を除いて）くたびれた様子であつた。

しかし、いつまでもその場に佇<sup>たたず</sup>んでいるわけにもいかない。やれやれと一息つくと、皆足を動かし始めた。

あれからどれだけの時間が経ったのかは分からぬが、今は夜らしい。捕まる前に降っていた雨も今では止み、重そうな雲が風に流され、時折まあるく輝く月が姿を覗かせていた。

屋敷の外は、小さな竹藪を抜けるとすぐに草原へと続いていた。背丈ほどの秋の草花が、彼らの姿をうまい具合に隠してくれたため、追手が彼らを捕らえることはできなかった。

夜空に赤く燃え上がる煙を遠くに眺め、

ここまで来れば一安心だろう、この辺りで小休止をとろう

ということでしょうやく彼らは足を止めた。



「そう言えば沖田さん、牢屋を出たあとどこに行っていたんですか？」

「あー、あの牢屋のボケた門番が火薬庫の場所を教えてくれてな。それでちよつと火遊びしようと思ったんでイ」

あのおじいさんが・・・とつぶやく新八の横で、神楽が心配そうな顔で寝かされている銀時の顔を覗き込んだ。

銀時の体は熱く、息も荒い。

神楽の声に反応はするが、ぼんやりとした返事しか返ってこなかった。

「銀ちゃん・・・大丈夫アルか？」

「さすがにこれ以上連れまわすのはキツそうだな。どこかに休めるようなところがあればいいのだが・・・」

「・・・ん？」

腰を下ろしている近藤の横で周囲をうかがっていた土方の目に、妙なものが映りこんだ。

雲が切れ、月が辺りを照らした一瞬、なにかが見えたような気がしたのだ。

「あれは・・・」

「どうした、トシ？」

土方の様子に気がついた近藤も腰を上げ、土方が見ている方向に目をやった。

そして、なにかが目に入ると、思わず土方と顔を見合わせた。

「・・・俺たちは狐にでも化かされているのか？」

「確かに怪しいが・・・」

近藤は、ふと銀時に目をやった。

いくら化け物並みのタフさを兼ね備えた彼でも、これ以上は耐えられまい。

そう思った。

「狐だろうと幽霊だろうと、この際、すぎるしかないんじゃないか」

「・・・」

土方と近藤の視線の先にある、草原。

その更に奥に、ぼつんと見える黒い影。

雲の合間から覗く月の明かりが、その黒い影を一瞬、照らした。  
月の光に照らされ、その黒い影が明らかにされた。

家、であつた。

草原の真ん中に、ぼつんと寂しく佇む、朽ちかけた一軒家。

それを、月明かりが怪しく照らしていた。

### 36。狸寝入りはだいたいバレている（前書き）

あと三話くらいです。

長かった・・・で、付き合わされた皆さんの台詞ですよ。

本当に今までありがとうございました！

あと少しお付き合いいただけたら、うれしい限りです。  
では本編どうぞ。

### 36。狸寝入りはだいたいバレている

ここはどこだ？

目の前に広がる夕焼け。

それは、いつぞやに見た夕焼けによく似ており、哀しい色を帯びていた。

その夕焼けに照らされているのだろうか。大地も一面赤い。

いや、違う

これは・・・夕焼けじゃない・・・

小さな銀時は、突然あることに気が付いた。

自分が、多くの屍のなかに立っていることに。

違う・・・

俺はもうこんなところにはいない。

俺は・・・己のためだけに剣を振るってきた『ここ』にはもういない。

小さな銀時の目は自然とあの人の姿を探した。

・・・先生、松陽先生・・・

俺を・・・早く俺をここから連れ出してくれ。  
でないと俺は一生屍を食らう鬼のままだ。

護るものも何もない、皆に忌み嫌われるだけの哀れな鬼のままなんだ・・・

そんなのは、もうイヤだ・・・！

「・・・んせえ・・・先生・・・！」

松陽先生えっ！！」

小さな銀時は、恩師の姿を求めて走り出した。

しかし、自分がどこに向かっているのか。

どこへ向かえば恩師に会えるのか。

それすらも分からぬまま、その小さな裸足で懸命に走った。

と。

突然、何かにつまずき、小さな銀時は前のめりに転んでしまった。

起き上がり、何につまずいたのかと足元を見る。

違う。

つまずいたのではない。

何かに、足をつかまれたのだ。

白い手が、銀時の細い足首をしっかりとつかんでいる。

足元に何かがいる。

恐る恐る、小さな銀時はそれを見つめた。



それ、は小さな銀時を見上げると優しく笑った。

『大切なものができても、護らねば何も残りませんよ．．．何も、ね．．．』

「  
っ！！」

銀時は思わず起き上がった。

息が切れている。

熱い。

額を、たくさんの汗が流れている。

銀時は手でその汗をぬぐった。

そのぬぐった、震える手で、顔を覆った。

・・・俺は・・・

今度こそ・・・

今度こそ護りたかった・・・

護ろうとしたんだ・・・

先生・・・

夢の中で自分の足をつかんでいたのは、血まみれの、顔のない松陽だった。

【36。狸寝入りはだいたいバレている】

「目え覚めたか。

随分うなされてたぞ」

突然憎たらしい声をかけられ、銀時はふと我に帰った。

そして、自分のいるところに見覚えがないことに気が付いた。

ここは、あの牢屋じゃない。  
どこか、見知らぬ部屋だ。

声のした方を見やると、部屋の外、縁側に腰掛けながら煙草を吸っている土方の姿が目に入った。

あれからどれほど時間が経ったのかは分からぬが、今は夜らしい。  
部屋に明かりはなく、月明かりだけが辺りを照らしていた。  
よく見れば、自分は手当てを受けたようで体中に包帯が巻かれている。

「・・・ここは・・・」

「ここアたまたま見つけた空き家だ。  
布団やら布やら置いてあったから少し拝借した」

そう言われて、ようやく銀時は自分が布団に寝かされていたことに  
気付く。

「・・・」

ふと横を見ると、冷たい畳の上で子供たちが目を腫らして寝ていた。

「オメエが目エ覚ますまで看病してるって言ってたんだが・・・結局寝ちまつたみてえだな」

その言葉を聞き、そつか・・・とつぶやきながら銀時は子供たちを眺めた。

神楽は例の傘を抱きしめたまま眠っていた。

この子供らは、自分の何を知っているのだろう。  
自分の何なんだろう。

なぜ、こんなに自分を・・・

そこまで考えて、銀時は考えるのをやめた。  
考えすぎだ、と自分に言い聞かせた。  
子供の気まぐれに過ぎない。そう思うことにした。

銀時は、痛む体をねじりながらも、子供たちに布団をざっとかけてやった。  
動く度に体を走る痛みに顔をしかめながら、ゆっくりと立ち上がる  
と銀時は縁側まで出てきた。

縁側まで出ると、長い間人の手が入らずに荒れた庭と崩れかけた塀、

そしてそれを皓皓<sup>ハハツ</sup>と照らす夜空の月に目がいった。

満月、であつた。

今ではすっかり月を覆う雲もなく、大きく夜空を照らす月と、億千もの星が夜空を輝かせていた。

その景色に、銀時は思わず、ほう、とため息をついていた。

こうして月を眺めたのは、いつが最後だったか。

彼の記憶にある夜空は、いつも雲に覆われたものだった。

いや、雲のない夜空もあつたのかもしれない。

しかし、彼が月や星を眺めることはほとんどなかった。

機会がなかったのかもしれない。見ることを避けていたのかもしれない。

そのどちらであつたのかは、今となつては分からないことであつた。

「……ン、ゴホン……」

月を眺め、半ば自分が放心していることに気がついた銀時は、気まぐすそうに咳払いをした。

「そっいや……あのゴリラと総一郎くんは……どうした？」

「それぞれ屋根の上から見張つてる」

「んで……テメーは偉そうに一服か」

「違えよっ交代でやってるんだよっ！」

「苦労なこつて、と答えようとした銀時が煙草の煙でむせた。本当に咳き込むと傷に響いた。」

「ゴホゴホ・・・情けねえったりや・・・ゲホゲホありやしねえ・・・」

いつものように軽口をたたきながらも痛み顔に顔をしかめる銀時を見てやれやれ、と土方は煙草を落とすと足で火を踏み消した。

咳が落ち着いた銀時を見て、土方は何かを決心したようだった。先程踏み潰した煙草の吸殻を見ながら、低い声でつぶやいた。

「戦は・・・終わったようだ」

突然の土方の言葉に、銀時は一瞬考え込んだ様子だったが、すぐにいつものだるそうな調子に戻った。

「・・・そうみてえだな・・・」



あんたらの言う通り・・・

ひでえ負け戦・・・だった」

銀時が抑揚のない声で一人言のようにつぶやく。

土方は次の言葉をすぐに継ぐことができなかった。

今、聞くのは酷なことだとわかっていた。

それでも彼の立場上、どうしても聞かねばならぬことがあった。

「んで・・・

てめえはこれから先、どうすんだ・・・？」

「・・・どうするって？」

土方は、銀時がこれから歩む道の行く先を確かめねばならなかった。たとえ、本当の答えを聞けないとしても。たとえ、今後考えが変わるとしても。

今、聞いておかねばならなかった。

一方、そんな土方の都合など知らない銀時は、意外そうな顔をしていた。

「・・・そおさなあ・・・

今のところヅラも高杉もまだ捕まってねえみたいだし・・・  
たぶんこれから先も捕まらねえだろうし・・・

やつらの心配はいらねえだろう

俺は・・・そうだなア・・・

一人でブラブラするさ」

「・・・一人で？」

・・・桂や高杉とは・・・もう会わねえのか？」

土方が深く追求していく。

その土方に疑問を感じながらも、銀時は自分の口から気持ちができる  
すると流れ出るのを止めることができなかった。

深い傷を負って参っていたためか。

はたまた、長年の戦で押し込められてきた気持ちが終戦を迎え破裂  
したのか。

それは分からなかった。

「俺ア・・・もう・・・仲間なんか・・・

・・・二度と持ちたくねえ・・・

どうせ最後には・・・みんなこの手からすり抜けて・・・落ちてい  
っちゃうんだ・・・

・・・なら最初から・・・

・・・何も持たねえ方がいいに決まってるア・・・」

銀時が、遠くを眺めながら、力なくそうつぶやく。  
それを聞いた土方が情けねえ、と舌打ちする。

「・・・てめえ、それでも坂田銀時かア？」

自分の護りてえもん護り通すのがてめーじゃなかったのかア!？」

土方は自分が感情的になるのを抑えきれなかった。  
普段も気に食わない奴だが、こんなに情けない銀時を見るのはもっ  
と気に食わなかった。

「・・・お前・・・

・・・俺の何を知ってるっていうんだ・・・？」

むきになった土方に対し、銀時が当然の疑問を投げ掛ける。  
昼間、新八がカミングアウトしてしまったことなど知らない土方は、  
本当のことを言うわけにもいかないと黙り込んでしまった。

まあ、新八の話を銀時は信じていないどころか、すっかり忘れてさえいるので、どちらでもいいことなのだが。

そんな土方の葛藤も露知らず、おかしな連中だ、と銀時は不思議に思った。

何故、こいつらは自分のためにそんなに必死になる？

そんな疑問が銀時の頭に浮かぶ。

しかし、激しい傷の痛みが思考を鈍らせた。

そんな些細なことはどうでもいいように思えてくる。

・・・少し、自暴自棄やけくそになっているのかもしれないな・・・

そう心の中で自嘲しながらも、またぼつりぼつりと、懺悔ざんげのように銀時はつぶやき始めた。

「てめーらも知ってんだろ・・・

俺が『白夜叉』なんて呼ばれてんのを・・・

その呼び名の通り・・・俺がしたのはただの・・・

・・・ただの殺戮だ・・・

敵の血を流し・・・味方の血も流させた・・・大量にな・・・

・・・連中の言う通りさ・・・

俺は血に飢えた・・・

・・・ただの白夜叉なんだ・・・」

銀時の言葉がつまる。

銀時は天を仰いだ。

これ以上聞くのは酷だ。

土方もさすがに苦しかった。

銀時の過去を知った今、攘夷戦争に参加したことを責めることなどできるはずがなかった。

しかし。

これから先、敵に回るのか  
やはり斬らねばなくなるのか

土方はそれを知る必要があった。

いや。

もしそうならば、引き留められるのは今しかない。彼は思っていた。  
だから、彼はそれを知る必要があった。

「お前は・・・・・・・・これから攘夷活動を続けていくのか？」

言葉につまっている相手にまだ尋問を続けるのか。  
つくづく自分の性が嫌になる。

そう自分を嘲りながらも、土方は吸殻から視線を外さずにそう尋ねた。

「・・・・・・・・攘夷・・・・活動だ・・・・・・・・？」

銀時は土方の横顔を確認すると  
はっ、とくだらなさそうに笑ってうつむいた。

「俺あ別に、最初から攘夷なんか・・・・どうでもよかったんだ

これから先、国が滅ぼうが・・・・侍が滅ぼうが・・・・知ったこつち  
やねえよ」

万事屋らしい言葉だ、と土方は心のどこかで安心する。

だが、それで終わりにするわけにはいかなかった。

土方は言葉の裏にある真実を確かめねばならない。

「……じゃあてめえは……一体、何のために参加したんだ？

だれかの……仇討ち……とかか？」

この言葉に銀時の動きが止まった。

それに気がついた土方は、ささいな表情も逃さぬよう、煙草の吸殻から銀時へと視線を移した。

「仇討ち……ねえ」

笑っているような、泣いているような。

どちらとも区別がつかない声で、つぶやいた。

「ガキン時はそんなことも考えたがな……」

だがよ……んなことしても死んだ人間は生き返りもしねえし

・・・何より・・・

あの人はきつと喜ばねえ」

悔しさを噛み潰すかのように、最後の言葉をぽつりと言った。

「だからよ。決めたんだ。

もう二度と大切なもんを失いたくねえ。

今度こそは護りきってみせる、って」

銀時の頭に、懐かしい顔が浮かぶ。

「そう・・・

自分のために泣いてくれる腐れ縁<sup>ツレ</sup>がいて・・・



変わったようであわってねえ喧嘩<sup>ッレ</sup>友達がいて・・・

いつも人の名前を間違える馬鹿<sup>ッレ</sup>がいた・・・

・・・戦を続ける理由なんて・・・

・・・それだけだった」

そう言った後、一瞬悲しい瞳をしたかと思うと、また天を仰いだ。

そう

俺は

ヅラのように、国のためでもねえ

高杉のように、先生のためでもねえ

俺は

俺が護りてえと思ったもんのために

そのためだけに

・・・でも・・・

「・・・ま・・・結局・・・

多くの仲間が死んでいつちまって・・・

高杉も・・・左目を失っちまった

・・・ざまあないぜ

俺は護れなかった・・・何も・・・」

月明かりの下、銀時の目がわずかに光る。  
銀時がふん、と自分を嘲るように鼻で笑った。

「分かつただろ・・・」

こんなてめーの護りてえもんすら満足に護れねえ奴に・・・

二度と仲間なんてもん持つ資格なんざ・・・・・・・・ねえのさ・・・・・・・・」

土方はそれ以上何も言うことができなかった。

「・・・・・・・・あー・・・・・・・・」

そうだった・・・」

何かを感じたのか、銀時は突然体の向きを変えた。

「シヨンベンしたかったのすっかり忘れてた・・・」

そう言うと、おぼつかない足取りで廊下を歩き出した。  
痛々しい身体を、引きずるように歩いていく。

土方はその後ろ姿を、銀時が廊下を曲がるまで目で追った。

・ あの野郎・・・こんなもの抱えてるなんて微塵も見せやしねえで・・・

「・・・ぐすっ」

するとあちこちから、鼻をすすする音が聞こえ出した。

ふと、土方がポケットをさぐる。

お目当ての物をポケットから見つけ出すと、その枚数を数えた。

「・・・ティッシュ欲しい奴いるか」

「「「ぐださい」「」」  
「誰がいるがよ死ね<sup>ぢ</sup>土方<sup>ひじがた</sup>ゴノヤロー」

37。時の流れは残念だったりする（前書き）

急に舞台は現代に戻ったりする。

というかただのツラフルボッコだったりする。

やっぱりあとがきまで本編続いたりする。



### 37. 時の流れは残念だったりする

もつすつかり日も落ち、空には大きなまあるい月が一つ浮かんでいた。

その月明かりが江戸の町を、かぶき町を照らしていた。そのかぶき町の中には、もちろん、あの万事屋がある。

その万事屋の玄関前で何やら騒いでる男が二人、いた。

「あれえおかしいな。電気が点いてない・・・神楽は新八ん家に泊まってんのかな。」

てゆうかヅラ、なんでお前家に入ろうとしてんの。帰れよお前。そして二度と面見せんな」

「ヅラじゃない桂だ！

というか貴様、帰れとはなんだ、帰れとは。

俺がたまたまバイクのスペアタイヤを持っていなかったら、今頃貴様はパンクしたバイクと野宿していたところだ。

礼の一つくらいしても罰は当たらんぞ、銀時」

そう、銀時と桂のコンビである。

森の中で銀時のバイクがパンクし、立ち往生していたところに偶然桂が通りかかったのだ。

そう・・・なぜかスペアタイヤを背負った桂が。

「うるせーよヅラ！ここまでバイクに乗っけてきてやつたろーが！それでチャラだ！

そもそも俺が乗っけていなかったら、てめーこそ今頃スペアタイヤと野宿してんだろが！

お前こそ俺に感謝しろ！」

「それは確かだが、

俺を乗せてくれたお前のバイクのパンクを直したスペアタイヤは俺のものなんだから、

やはりお前は俺に感謝すべきであろう！」

「本当にうぜーな！死んでくれよ頼むから！

てゆーかそもそもなんでスペアタイヤを持って墓参りに行くんだよ！意味わかんねえんだよ！！」

「うむ。それなんだがな。

不思議なことに墓参りに行く前日の夜、枕元に先生が立ってな。是非、スペアタイヤを持って来いとそう言ったのぶばおっ！！

何をする銀時っ！いくら幼馴染でも話している最中に殴るのは酷いぞっ！！」

「だまれこの電波がアアアアア！！！！

先生がわざわざ枕元に立ってまでシなことゆーワケねェだろがっ！！！！

もしホントなら高杉の枕元に立ってくれ毎晩立ってやってくれ！！」

「いや、案外毎晩立っているのかもしれないぞ。

だからあいつ、夜きちんと寝れなくて背が小さいままなのかもしれない」

「・・・ツラ、頼むから祟られてくれ。」

先生、お願いだからこの馬鹿崇めてくれエエエエ！！！！」

「銀時っ貴様、珍しく先生の墓参りをしたかと思えば・・・そんなことを願うのか！？  
情けない・・・」

先生も草葉の陰で泣いていることだろう！」

「泣かせてんのはためーだろうがアアアア！！！！」

こんな漫才を一通りし終えたあと、  
銀時が鍵を出し玄関を開けようとすると、おかしなことに気が付いた。

鍵がかかってないのである。

「なんだ、玄関開きっぱなしか？リーダーも不用心だな」

鍵が開いていることに気付いた桂は、当然のように戸を開け中に入っていた。

「てめっ帰れと言ってるだろーが！」

「まあよいではないか。

久々に酒でも飲みながら今後の攘夷活動について討論でもしよう、  
銀時」

「んなもん誰が討論するかっ！一人でしてろ、朝まで一人で討論してろ！」

・・・つと、なんだこれ？」

桂と言い合いながら部屋に入り、電気を点けると、銀時の目に見慣れぬマシンが飛び込んだ。

「おもちゃか？あいつら俺がいないと本当にしょうのないモン拾ってくるな」

ブツブツ言いながら銀時はマシンをじろじろ眺めた。

すると、リーダーもまだまだ子供だな、と言いかけたところで桂が突然黙り込み、

真剣な眼差しでマシンを見始めた。

桂の目付きが変わったので、さすがの銀時も気になる。

「どうしたヅラ？このおもちゃ、見覚えでもあるのか？」

「いや、おもちゃ自体はわからん。

だが・・・この書かれている絵・・・これは・・・」

そう言いながら桂はスロットを回し、いくつかの絵柄を確かめた。

「この幼稚園児の落書きみてーな絵か。それがどうした？」

「これ・・・カムチャツカ語だ」

「カム・・・は？なんだって？」

「カムじゃないカムチャツカ語だ。そういう文字があるんだ。」

「落書きにしかみえねーけどな。  
んで？ツラ読めんのか？何て書いてあるんだ？」

「そう急かすんじゃない。どれどれ・・・」

そう言うと、桂は右上に書かっていたカムチャツカ語を指でなぞりながら読み上げた。

「ていいん・・・５めい・・・」

その瞬間、銀時の拳が桂の頭を直撃した。

「いたっ！銀時、貴様何をするっ！」

「てめーふざけるのも大概にしるよ！」

何が定員5名だ！これのどこに5人も乗るんだよ！無理だろうがっ！！

読めねーなら読めねーで、もっとバレない嘘つけよ！！本当に馬鹿だろお前」

「ふざけてなどおらん！そう書いてあるから読んだだけだ！失礼な奴だな」

「じゃあ聞くが、その8つのスロットは何なんだよ」

「これは上の段が年、下の段が月日になっているようだな。ずいぶん日付はズレているが」

「ズレてんのはてめーの頭だよ！何だよ日付って！！

じゃあ何だ、これはでかい手動のカレンダーか？

てかやっぱり最初の定員5名関係ねーじゃねーか！

作り話でも少しは辻褃合わせろよ！

馬鹿だろお前本当に馬鹿だろ！」

電波な幼馴染にうんざりしている銀時を尻目に、

桂は一つ一つ現在の日付に合わせていった。

「これでよし」

「そうかい。気に入ったんならやるぞソレ。てか是非持ってお前も

帰ってくれ」

相変わらず銀時の懇願は桂の耳には入っていない。  
熱心にスロットの両脇に書かれた文字を指で追っている。

読み終わったのか、突然手を銀時の頭の上にのせた。  
のせると、ぶちいつ、と勢いよく銀時の毛をむしった。

「いでえっ！何すんだヅラっ！」

「ヅラじゃない桂だ。」

どうもこれを動かすのには髪の毛が必要らしい。  
別に構わんだろう。お前の可哀想な髪の毛が初めて役に立つぞ。喜  
べ銀時」

「ふざけんな！髪の毛で動く機械がどこにあるんだよ！」

あゝいでえっ……。

ボケた頭から生えてきてるお前の髪の毛の方が可哀想だっつの」

頭をさすりながら、頭に来た銀時は桂の髪の毛を引っ張る。  
が、それにも動じず桂は銀時の髪の毛をマシンに入れ、残りの文字  
を読もうとした。

「あとはかすれていて読めんな……」

とりあえず、後はこのレバーを引けば動くようだな」

そう言って桂はレバーをつかむと思いっきり動かした。

!!!!!!!!!!ジャンジャンジャンジャーッ!!!!!!!!!!

すると、突然けたたましい音が鳴り始めたかと思うと、マシンの下の部分から煙が出始めた。

「おいッラァ……。これ壊れているんじゃないの……」



銀時がそう言った途端、すさまじい爆音と爆風が二人を襲った。

37。時の流れは残念だったりする（後書き）

「銀ちゃん、遅いアル・・・」

ここは草原の中に佇む、朽ちかけたとある空家。  
いつもなら人のいないその空家に、いくつかの人影が見える。

新八たちであつた。

荒れ果てた庭に面した縁側には近藤、土方、沖田の姿が、  
その奥の部屋には、銀時が掛けてくれた布団にくるまった神楽と、  
その布団から追い出された新八の姿が見えた。

厠に行つたまま戻らない銀時を子供たちは心配していた。

「あの怪我だ。用一つ足すのにも時間がかかるのだろっ」

そう言う近藤も少し心配そっだ。

「・・・僕、様子見てきます」

そう言って新八が立ち上がった。

そのときだった。

突然、足元が暗くなった。

いや、足元だけじゃない。空間全体が暗闇に覆われた。

「これは・・・っ」

「またか!？」

地面がなくなり、体が浮かぶような感覚に襲われる。

「そんな・・・いやだあああつ!!」

「銀ちゃああああんっ!!!!」

子供たちの届かぬ声が、暗闇のなかへ吸い込まれていった。

**終。結局、勝手に他人の日記を読んでも自白しない限り大抵はバレない（前書き  
次回エピソードにてとうとう完結！**

皆さま、お疲れ様でした。

一週間以内には投稿できるよう頑張ります。

では、あと少し、お付き合いくださいませ。

相変わらず、あとがきまで本編続きます。

終。結局、勝手に他人の日記を読んでも自白しない限り大抵はバレない

万事屋は煙に覆われていた。

視界はほとんどゼロに近い。

そのなかで、銀時と同じように咳き込む人影が見えた。

「おい・・・ゲホツ・・・ツラア。大丈夫・・・か？ゴホゴホ」

その人影を桂だと思っている銀時は、その声をかけた。  
しかし、想像していた声とは違う声が帰ってきた。

「その声は・・・ゲホツ・・・万事屋・・・か？ここは・・・いつ  
の時代だ・・・？」

・・・あれ？この声誰？

なんかマヨネーズ臭いんだけど。

っーかなんか人が増えてない・・・？

疑問を感じながらも、銀時は手探りで窓までたどり着くと窓を大きく  
開け放った。

風が入り込み、煙が薄くなっていく。

「ここはどこアルか？銀ちゃんは・・・」

「あ」

煙の中から突然現れた新八、  
神楽、近藤、土方、沖田。  
それと目が会う桂と銀時。

「・・・何やら分かんが」

そう言つて懷から『んまい棒』を取り出す桂。

「あつ、てめ！俺の部屋をんまい棒くさくするんじゃねえ！！」

銀時が急いでそう言つたのも空しく。

「許せ銀時っ！

わははっさらばだ能無しの幕府の狗どもめっ！！」

そう叫ぶと『んまい棒』を床に叩きつけ、すばやく窓から逃げ出した。



「ヅラってめえっ！

二度と家にくるんじゃないっ！」

近くにいた銀時だけが煙幕に覆われ、またも咳き込んでいた。

それを見て、子供たちの目には思わず涙が浮かんでいた。

それは子供たちのよく知る、いつもの銀時、いつもの光景だった。

「銀ちゃあんっ！」

銀時の名を呼ぶと、子供たちは銀時にぎゅと抱きついた。

「おぶうっ！

やめてお願い銀さん死んじやう圧死しちゃうから！！

てゆーかお前ら突然どこから現れたんだよ！」

いつものように軽口を叩くが、子供たちが泣いているのに気付くと銀時も気まずくなった。

「て・・・え？なんで泣いてるの？神楽ちゃん新八くん！？」

そりゃあ君たち連れていかなかったのは悪いけど・・・

きちんとお土産買ってきたから！それで許して！ね？」

「このクルクル天パ！そんな事じゃないアル！

でも土産はもらっけどな！」

「銀さんの馬鹿あ！！」

そう言っ てまたきつく抱き締めた。

「いだいだい！」

「……っ てアレ？」

苦しみながらも銀時は、ぼうつとしたまま桂を追う様子のない真撰組の三人に気付いた。

「テロリスト逃げていったけど……追わないの？  
てか仕事しろよ税金泥棒」

そう言われた三人は皆、顔を見合わせた。

「……追わないのか総悟」

「そういう土方さんこそ、追わないんですかい。  
ってか仕事しろよ土方コノヤロー」

「お前もだろがっ  
てかお前だけにや言われたくねえんだよっ！」

「はぁ・・・」

と近藤がため息をついた。

「今日は・・・間が悪すぎる。

日を改めよう」

土方も沖田も近藤の顔を見た。

「そうだな」「そうですね」

「・・・なんなんだテメーら・・・？」

当然のことながら、銀時は全く状況がつかめなかった。

近藤と土方は互いに顔を見た。

「万事屋には・・・話さねばなるまい」

「・・・そうだな」

そう言つと真剣な顔で銀時の方を向いた。

【終。結局、勝手に他人の日記を読んでも自白しない限り大抵はバ  
れない】

万事屋の居間で、皆が真剣な顔をしながらソファーに腰掛けていた。

タイムマシンで過去に行ったこと、そこで見たこと、知ったこと・

・  
そのすべての顛末を、銀時に話し終わったところであつた。

銀時の両脇に座り涙を浮かべる子供たちと、真剣な顔のまま銀時に  
向かい合う真撰組三人。

そして、当の本人の銀時は、いつもの何を考えているか分からない、  
やる気のない顔で黙って聞いていた。

その銀時が、ふと口を開いた。

「・・・で、何？」

皆して銀さんを騙そうとしてるわけ？

君らそんなに暇なの？」

どうも、土方たちの話を全く信じていないようであった。

それも、普通に考えれば無理もない話である。

だが、信じさせようとした神楽が、銀時にあるものを突き出した。

「銀ちゃんっ！本当アル！」

嘘だと思っならこれ見るヨロシ！！」

それは、松陽のところでもらった、銀時の傘であった。

「あア？」

その汚ねえ傘がどうしたって・・・」

そこまで言いかけた銀時は、何かに気付くと言葉を止めた。

その傘に綺麗に書かれた『坂田銀時』の文字。

その文字には、見覚えがあった。

神楽が銀時に傘を渡す。

神楽の手から傘を取ると、銀時は食い入るように眺めた。

「・・・オメー、これ・・・」

「先生からもらったアル。  
これで信じたか？」

まだ信じられない様子の銀時であつたが、傘にかかれたその字は、間違いなく松陽のものだった。

人生で初めて見た文字。

それは松陽のものだった。

その銀時が松陽の字を見間違うはずがない。

しかし、はいそうですかと信じられるレベルの話でもない。  
まあ、納得のいかない表情の銀時に、新八が尋ねた。

「銀さん・・・僕たちの事を覚えてませんか？」

僕たち・・・小さな銀さんや戦争中の銀さんといろんな事を話しました。

本当に・・・本当に何も覚えていませんか？」

新八にそう聞かれ、銀時は真剣な表情で考え込んでいた。

「・・・先生が死んだ時と、終戦間際だろ・・・」

そうつぶやくが、銀時の表情は変わらない。  
銀時は首を振った。

「・・・ワリーが・・・」

その頃は色々とテンパってたから・・・よく覚えてねえんだよ」

「・・・そう・・・ですか」

納得したのかしていないのか、新八は下を向いた。  
そのあと、近藤が口を開いた。

「まあ・・・お前が信じようと信じまいと、

俺たちはお前の過去を・・・お前が隠していたもんを見ちまった・・・

お前が大切にしていたもんを・・・踏みにじってしまった・・・

それは・・・謝らねばならない。  
すまない、万事屋」

辛そうに、言った。

一方、銀時は頭を掻くとだるそうに答えた。

「・・・謝られてもなあ・・・  
見ちまったもんはもう仕方ないだろ。」



それに、別に隠してた訳でもなんでもねーよ。

面白い話でもねーし、話す必要もないから話さなかったただけだ」

いつものように、だるそうにそう答えたが、その場の空気は全く変わらなかった。

それが嫌になったのか、銀時はやれやれ、とため息をつくと肩をすくめた。

「まあ確かにい？中二の頃の日記見られたみたいで痛いけどねえ？」

そうおどけた銀時を、土方の低い声が遮った。

「・・・だが・・・」

桂たちと手を組み、戦争に参加していた。それは事実だな」

「手を組みってなんか悪の組織みてーな言い方だなアオイ。

あん時は、元服したしいつちよ暴れてみつか！みたいなノリだったから。流行に乗っちゃった若気の至りってヤツ？」

そう言つて頭をポリポリと搔くが、土方は納得していない様子である。

はあ、とため息をつくと銀時はだるそうな目で土方を見た。

「納得いかねえってか。」

確かに、俺ア攘夷志士だった。  
やんちゃし過ぎて、白夜叉なんて呼ばれました。  
それは事実だ。

それで、どうする？  
しょっぱくか？」

その言葉に、一瞬にしてその場の空気が張りつめられた。

「土方さん・・・」

土方は懷から、煙草を取り出すと火をつけた。  
その様子を緊張しながら子供たちは見た。

「・・・てめーはなんで今まで攘夷戦争に参加してたことを言わなかった？」

「土方くん。その耳にはマヨネーズでもつまってるの？俺の話聞いてたア？」

面白い話でもないからしなかったって言ったでしょーが！」

「てめーには何度が尋問したことがあった。でもその度にはぐらかしたろ」

銀時のペースには乗らず、土方はじわじわと聞いていく。

その態度に、はぁ、と面倒くさそうに息を吐き出した銀時が、ソファの背もたれに体を預けた。

「攘夷戦争に参加したなんて話、誰に自慢できるよ。自分は護りたいもんも護れなかった負け犬ですとのたまうようなもんだぜ」

銀時はさらりと言ったが、新八たちは切なくなった。以前なら流していたかも知れない台詞が、すべてを知った今では、とても重く感じた。

当然、土方もその気持ちは同じであった。

苦い顔でちつと舌打ちをすると、また別の質問をした。

「てめーと桂、高杉とは今でも交流があるのか？」

「ああ？交流だあ？  
ンなもんねーよ。」

ゾラとは子供の頃からの腐れ縁が続いてるだけだし、高杉のヤローとは喧嘩の最中だ」

「それを交流と言うんじゃねえのか？」

「付き合いたくてしてるわけじゃねーよ！っーかめんどくせーから早く捕まえてほしいくらいなんだけど……！」

土方の追及に、面倒くさそうに銀時は返した。  
一方、土方は何も答えなかった。

ここで不真面目なこいつに切れて、奴のペースにはまったら。  
そこから先は誤魔化されて話が聞けなくなる。

それを土方は分かっていたため、くすりともせず真剣な表情で銀時を見つめた。

その土方の顔を、死んだ魚のような目で銀時は見た。  
あきらめたのか、目をつむると面倒そうに話し始めた。

「確かに昔馴染だが・・・今はそれぞれ違う道歩いちゃってる。そのせいでぶつかる時もあるが・・・」

銀時の目がずっと開く。

「俺アずっとダチだと思ってる。・・・例えどんなに変わっちゃっても」

静かにそう言った。

その言葉を聞くと、土方も皆も、何も言えずに黙り込んでしまった。

その時、新八はふと、友人のタカチンのことを思い出した。

族に入り、万引きなんかしていたタカチン。

でもタカチンはどんなに変わったように見えてもタカチンであったし、新八にとって大切な友達であった。

そして、その彼を救うのを手伝ってくれたのは他でもない、銀時たちであった。

ああ、そうか・・・

新八は目から鱗が落ちたような気がした。

「・・・友達の間違いを正してやるのも、友達の役目・・・ですもんね」

そう、ぽつりとつぶやいた。

一方、周りは思いもしない新八のセリフに驚いていた。皆が新八を見ていた。

しかし、新八はしっかり前を向いていた。

高杉と決着をつけるため、銀時が出て行ってしまっ日が来るのではないか。

そんな恐れが新八の頭にはあった。

そうならないでほしいとさえ願っていた。

だが、問題なのは高杉を正すことではない。銀時が一人で行ってし

まうことなのだ。

確かに銀時の問題かもしれない。

しかし、一人で立ち向かう必要はない。

銀時には、自分たちがいる。

新八は銀時を見た。新八が明るい笑顔を向けた。

「でも銀さん。銀さんには僕らがいます。僕らにできることだって・  
・少しはあるはずですよね？」

だから銀さん。一人で高杉さんのところに殴りこみに行っちゃった  
りとかしないでください。約束ですよ？」

そう、力強く言った。

その新八の意外な言葉に、銀時があっけにとられていた。

その銀時の横で、神楽がにたりと笑う。

「新ハイ。ずっとダメガネと思っていたけど、いっちょ前の事言う  
アルな。」

よし、今度からクサメガネと呼んでやる。喜ベヨ」

「なんだよクサメガネって！！今のが臭かったと言いたいのか！？  
臭かったと言いたいんだなコノヤロー！！」

銀時を挟んで子供たちが騒ぎ出す。すると、先ほどの重たい空  
気もどこかへ行っていた。

一本取られた、とても言うように銀時は居心地悪そうにぼりぼりと頭を掻いた。

「まあ・・・そんなワケだ」

銀時が土方に視線を戻すとそう言った。

土方は、目をつぶると煙草を深く吸った。

「てめーは間違いなく戦争に参加した。」

・・・だが、現在の攘夷活動には一切関与していない。

桂や高杉とも幼馴染ではあるが、攘夷に関連した付き合いはしていない。

・・・そうだな？」

「そうだって何度も言ってるだろーが！」

土方がゆっくり目を開けた。

「・・・ならば、俺たちがお前をしょっぱく理由は何もない」

そう言つて土方は煙を吐き出した。

騒いでいた子供たちも、それを聞くと安堵の表情を見せた。

隣にいた近藤が土方を見て微笑んだ。

土方もそれに気づき、照れ隠しになんだよ、とつつけんどんに返す。

「よかつたな。納得できる答えが聞けて」

「何もよくなんかねーよ。氣にくわねえ野郎を一人消せる、いい機会だと思つたのによ」

そう言つて煙草をくわえる横で、ずっと黙っていた沖田がやれやれイとため息をついた。

「つたく許してくださいえ旦那。

最初っからそんなことできるはずがないのに、カッコつけてそう言つてるだけなんでさア」

「やつぱり君もそう思つか、総一郎くん。

まったくカッコつけたがりで痛いなあトツシーは」

「旦那、総悟です」

「うるせーよ、この天パ！これが俺の仕事なんだよっ！

てゆーか総悟っ！

てめえ一体どつちの味方なんだっ！！」

「少なくとも土方さんの味方ではないでさあっ！」



「あーあ、土方くんだけ友達だと思い込んでたんだ。痛いよーお母さんこの人痛いよー」

「うるせえ！」

「いちいち頭にくるんだよ！このドSコンビがつー！」

またいつものようにグダグダな、それでいてどこか落ち着くやり取りが始まった。

それを嬉しいと思ったのは新八だけではない。にかっ、と神楽が笑うと、新八と顔を見合わせた。

「銀ちゃん！！」「銀さん！！」

「おわっ！だからやめろつてのお前ら！」

子供たちが思いっきり銀時に抱きついた。

すると、階段を駆け登る足音の後、すごい勢いで玄関の戸が開かれる音がした。

「うるさいよお前たちっ！」

ウチにはまったり酒を飲むのを楽しみに来る客がいるんだ！少しは静かにしなっ！！」

そう。ギャーギャー騒ぎすぎたせいで、我慢できなくなった一階のお登勢が殴り込んできたのだ。

「うるさい上に、家賃も入れない上に、ペットの面倒も見れない奴なんかとつと出ていきなっ―！」

お登勢の後ろには定春がいた。

この3日間ほど面倒を見てくれたのだ。

「わう―！」

定春は久々に神楽たちに会えて、嬉しくなったのだろう。

神楽のもとへと駆け寄ると、何の迷いもなく銀時の頭に勢いよくかぶりついた。

「ギャー神楽ちゃん定春止めてエエエ！」

「定春も銀ちゃんに会えて嬉しいアル。銀ちゃんが生きていてくれて嬉しいアル！」

「いやいや銀さん今死にそうになってるんですけどオオオ―！！！」

「あーだめだ、なんか花畑見えてきた」

「嘘オオオ！？銀さんしつかりしてえエエエ！！！」

定春に頭をかじられ、顔を血で赤く染める銀時。

その回りではしゃぐ神楽と焦る新八。

その横では土方と沖田が刀を抜いて睨み合っている。

その様子を見て大笑いする近藤と、本当にしょーもない連中だよ、とぼやきながらも笑うお登勢。

結局、万事屋が静かになることはなかった。

夜空に浮かんだ満月が、嬉しそうにそれを見ていた。

終。結局、勝手に他人の日記を読んでも自白しない限り大抵はバレない（後書き）  
ようやく静かになった万事屋。

さんざん騒いだ真撰組の三人も、もう遅いということで屯所に帰っていった。

その帰り際、近藤が銀時に言い残した。

「いいか万事屋。

昔の仲間を助けたい気持ちは分かるが・・・桂や高杉たちに関わるのはもうやめろ

・・・と言つてもお前の事だから聞くまい。

だがいいか。

くれぐれも一人で行かなくてくれ。

危険な真似はせず、俺たち真撰組に必ず教えてくれ。

これだけは約束してほしい」

はいはい分かったから早く帰れとあしらう銀時に、近藤は真面目な顔をして言った。

「お前が傷ついたら悲しむ人間がいることを忘れるな」

そう言つと、両脇にいた神楽と新八を見た。

銀時はだるそうに耳をほじった。

「うるせーな。わあーってるよ」

それだけ聞くと、近藤はくすりと笑って帰っていった。

もう夜も遅いということで、新八も万事屋に泊まることになった。

新八と神楽が、銀時の横に寝るのは自分だと一通り騒いだ後、結局銀時を挟んで寝る事にしたようだった。

そんなふうに住居たちが布団を用意するのを何とは無しに聞きながら、銀時は自分の机に座っていた。

ふと、明日取りに来るから置かせてくれと言われたタイムマシンに目をやった。

「・・・こいつで過去を変える？

・・・ふん・・・」

世界を変える。未来を変える。

当時、そのためにどれほど多くの仲間が戦ったことか。そして、どれほど多くの仲間が死んでいったことか。

それでも、どうにもならなかった。

天人たちには敵わなかった。

未来を変えることはできなかった。

それも分からぬ連中が過去に戻ったところで、何ができるってんだ。

「くだらねえ」

そう小さくつぶやくと、銀時はソファの上に置かれた、例の傘に視線を移した。

・・・だけど・・・

銀時は、その傘を見ながらぼんやり思った。

・・・もし、あの時に戻れば・・・  
先生は、もしかしたら・・・

そんな考えが、頭をよぎった。

しかし。

「・・・くだらねえ・・・」

そう吐き捨てる、その考えを振り払うかのように、銀時はくるり

と向きを変えた。

向きを変えると、開かれた窓から夜空を仰いだ。

すると、空に浮かぶ一つの満月が目に入った。

「・・・・・・・・そういや・・・・あの時もこんなきれいな満月だったな・・・・・・・・」

何かが、銀時の頭の奥から甦ってきたようであった。  
そういえば、と銀時は口の中で小さく繰り返した。

「あ・・・・・・・・」

突然、何かをはっと思い出した銀時は、再び、まあるく浮かぶ満月をしっかりと見つめた。

「そう言えば、あの時も・・・・」

そこまで言うと、銀時は口元を歪ませた。

何かが、銀時のなかでつながったようであった。



「・・・そうか、あれか。  
あれが、あいつらだったのか」

そうつぶやくと、銀時は、はははと小さく笑った。  
笑いながら、嬉しそうに月を眺めた。

「まさか・・・全部アンタの仕業、て訳じゃねえよなア・・・？」  
先生よオ・・・」

どこからともなく、そつと風が吹いた。

## エピローグ（前書き）

このエピローグをもちまして、『白夜叉の』のお話は終わりとなります。

新八「銀さんアンタ・・・攘夷戦争に参加していたんですか」  
桂「戦が終わるとともに姿を消したかな。お前の考えることは昔からよく分らん」

という一卷第六訓の桂のセリフから妄想を膨らませるに膨らませ、出来上がったこの『白夜叉の』。

始めた当初は7話くらいで終わるかな、と考えていましたが、それが浅はかだった・・・

気付けば、初の連載作品なのに40話に達するというこの有様。本当に、驚きました。

しかし、RPGさえもとにクリアしたことのない私が、買ってもらった計算ドリルなんかも最後までやり通したことのない、根気のないこの私が、最後まで、やり通すことができたのは

お気に入り登録して下さった皆さま、評価して下さった皆さま、毎回励みになる感想を下さった皆さま（ひとくくりにしてごめんなさい）、そして今読んでくださっている、皆さま方のおかげです！  
本当に、本当に、こんな拙い文章に長い間お付き合いくださいまして、ありがとうございます。

この作品の終了とともに、私自身また読む側に戻ろうと思っており  
ますが、またどこかでお会いするかも分かりません。その時はまた、  
相手してくださるととても嬉しいです。

では、随分とあいさつが長くなってしまいました。『白夜叉  
の』完結編、どうぞ。

相変わらずあとがきまで本編が続きます。

## エピソード

夜。

空には億千の星たちとまあるい月ひとつ。

拓<sup>ひら</sup>けた草原にはそれ以外の明かりは一切ない。

その草原の真ん中にぽつんとたたずむ、一つの朽ちかけた空き家が  
あった。

それにも当然灯りがともるはずがない。

月明かりのみが、その空き家を照らしていた。

その空き家の廊下をゆっくりと、ぎこちない動きで歩く、ひとつの  
人影が見えた。

それは、厠から部屋へと戻っている、銀時であった。

一歩踏み出すだけで、身体を少し動かすだけで、痛みに襲われる。  
そのため用を足すのにも歩くのにも、おそろしいほど時間がかかっ  
た。

・・・なんて、ザマだ

彼の中から、思わず笑いが込み上げてきた。

こんなザマになつてまで生きてやがる。

みんな・・・みんな仲間は死んだつてえのに。

それは、自分を嘲る笑いだった。

今度こそは護ると決めたのに・・・

結局・・・俺はまた何も守れなかった・・・何も・・・

銀時の重い足取りが、そこで止まってしまった。

彼はそれ以上前に進むことはできなかった。

壁に手をつき、崩れるように前かがみになる。

身体が小刻みに揺れていた。

・・・やめろ馬鹿。どこまで連中に情けない姿を見せるつもりなんだ

自分にそう言い聞かせると、必死に体勢を立て直した。  
立て直すと、左手で濡れた顔をぬぐった。

その時、銀時はおかしなことに気がついた。

いつの間にか、先程まで寝ていた部屋の前まで来ていたのである。  
それはいいのだが、おかしいのは誰もいないことだ。

先程まで狸寝入りをしていた子供たちや屋根の上にいた近藤と沖田、  
土方の誰もが立ち去る素振りなど見せてはいなかった。  
だというのに、彼らはそこから姿を消していたのだ。

とうとう勘までも頼りにならなくなったか・・・

それにしても、あいつらは一体・・・何だったんだ

そんなことをぼんやり思いつつも、銀時は先程まで土方が座っていた縁側に、顔をしかめながら腰かけた。

座ると、自分の感覚がおかしいのではないかと思うほど冷たかった。

本当にさっきまでここに人が座っていたのか？

突然、銀時の胸に一つの黒く重いものが浮かんだ。

考えれば、彼らの銀時への懐き<sup>なつ</sup>ようは尋常ではなかった。

敵だけではなく味方からも白夜叉として怖れられた銀時である。

その自分に、なぜ連中はあんなにも懐いていたのだろう。  
なぜ、あんなにも笑いかけてくれたのだろう。

一つの黒い影が頭をよぎった。

そもそも本当に・・・本当に、連中はいたのか？



その黒い影は、一気に銀時を覆った。

もしかして・・・本当はあんな連中、いなかった・・・？

彼らがいたことを証明してくれるのは誰もいない。  
桂も高杉も、ここにはいないのだ。

・・・すべて・・・俺の作り出した妄想だったのか・・・？

一度<sup>ひとたび</sup>その考えが浮かぶと、銀時は一気にすべてが嘘のように思えてきた。

そもそも、今ここにいる己だって確かじゃない。  
もしかしたら全て夢で、自分はまだあの牢屋の中かもしれない。

そんなことを思った。

すると、再び笑いが込み上げてきた。

「・・・・・・・・く、ははは・・・・・・・・はははは・・・・・・・・！」

銀時は笑った。

声を出して笑った。

肺が痛くても声を出して笑った。

すべてが、今ではすべてがおかしく思えた。

正体の分からぬ彼らのことも、それに振りまわされる己自身も。  
すべてがおかしなことだった。

もう、狂ってるんだ

銀時は、そう思った。

もう、壊れているんだ

坂本がいなくなった時から

戦争に参加した時から

先生が死んだ時から

いや

最初から

あそこ  
夕暮れの戦場で生きていた時から

夢ならばそれもいい。  
ずっと目を醒まさなければいいんだ。

狂った笑い声は、ごほと咳き込んだために中断された。  
口の中に、鉄の味が広がる。

それをぺつと足元に吐いた。

と、そこにあるものを見つけた。  
怪訝けげんな顔をしながら、銀時がそれを見つめる。

あれは、なんだ・・・？

それは、土方が踏み消した一本の煙草だった。

その瞬間、銀時の表情が変わった。  
ぱつと振り返ると、自分が寝ていた布団を見つめた。

そこには、先程自分が子供たちに布団をかけてやった、あの無造作に畳の上に置かれたままの布団があった。

「・・・っ！」

痛みが銀時を襲ったがそんなものは関係なかった。  
早く確認したい。  
それだけが銀時を動かした。

這いながらも布団にたどり着くと、銀時は布団を自分の元へと引き寄せた。

「  
．．．．．あつたけえ．．．．．」

自分が寝ていた褥むしろはすっかり冷え切っていたのに対し、その布団だけは未だ、温かった。

まるで、誰かがさっきまで包くるまっていたかのように。

銀時の目から、ぼろぼろと涙が零れた。

夢でも妄想でもなかった。  
なぜ彼らが突然去ったのか、それは分からなかった。

しかし、彼らはいた。

自分に笑いかけてくれる彼らがいた。

自分を『白夜叉』でも『バケモノ』でもなく、

『銀さん』や『銀ちゃん』と呼んでくれる彼らがいた。

ただただ、それが嬉しかった。

銀時は声を出して笑った。嬉しくて嬉しくて声を出して笑った。

草原の真ん中にある朽ちた一つの空き家。

それが銀色に輝いて見えたのは月明かりを受けたためだろうか。

それは誰にも分らない。



## エピソード（後書き）

夜。

空には、億千の輝く星たちとまあいる一つの月が浮かんでいる。

その月明かりを受けた空き家の縁側に座り、その月を仰ぎ見る銀髪の男が一人、いた。

まわりには誰もいない。

その男だけである。

その男はとても穏やかな顔で、月を眺めていた。

『僕たちはっ・・・未来から来たんです！』

彼の頭に、最後の戦場で泥まみれになりながら聞いた言葉が甦ってきていた。

『未来での銀さんはそりや毎日死んだ魚みたいな目してるけど・・・それでも僕たちや桂さん、長谷川さんや真撰組の皆さん、仕事で出会った多くの人たちに囲まれて』

毎日馬鹿やりながらも大切なもの護りながら生きてますっ！

だから、だから・・・！』

あの時の、新八の必死そうな顔を思い出して銀時は幸せそうに笑った。

「先生」

月を眺めながら、誰に聞かせるわけでもなく、銀時は口を開いた。

「俺・・・

生きてる

俺・・・

もう少し生きてみる

先生

アンタが教えてくれたこの剣の使い方

アンタが教えてくれたこの世界の生き方

今度こそ

それを貫いて生きてやる

今度こそ

手のひらからひとつも溢れずに

護ってみせる」

今までの仲間も

そして

これから出会う、まだ見ぬ仲間も

全部

全部だ

「だからよお先生

寂しいかもしれねえが、もう少し待っててくれ

ジジイになった俺と高杉、ツラがそっちに行つてよ

また先生と一緒に笑い合えるように

もうちょっとこっちで頑張つて生きてみるからよ

だから

もう少しだけ」

銀時がそう言い終わると、どこからか柔らかな風が吹いた。

その柔らかな風は優しく草原を撫で、  
そよいだ草葉が心落ち着く音色を奏でた。

そしてその風は銀時の頬をも撫で、銀色の髪を優しく揺らした。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4231k/>

---

白夜叉の

2011年9月11日08時25分発行